たるその黑髪の、ふたりひとしく火炎をはいて、にらみあらそふ物すさまじさ。殿はながめてたゞばうぜんと、心こゝにもあらおそろしや。こゝに直ちに重氏公は、心悟りてはや發心の、道に心をかたむけ給ひ、實には榮花はさだまる者か。人のよはひも五十路にあれば、かゝる女の愛着心に、蛇の地ごくにおちもやせんと、厭離淨土を願はんことゝ、こゝに發心書置なして、さしもたつとき大守のお身を、うすきすがたのそのいでたちに、城をぬけいでさて行く空は、たづね紀の國影あらたなる、高野弘法大師の峯へ、夜半にまぎれて向はせたまふ。お心根こそ殊勝でござる。妾なでしこ我身の罪と、人のそしりを我身一つに、はぢてあはれや自害をなして、花のすがたを夕べにちらす。はかなかりけるしだいでござる。ヤンレー。

○親方さまの、乾の隅の御寶藏へ、七福神がより集りて、黃金枕に御子歳、御目覺めたら早や元日で、最早二日のりぞめなさる。明方の湊の寶の御舟、千兩箱のねあげをいたす。大八車や又四ツ車、先へひきくるこれ丑の歳、金銀寶は皆寅の歳、金は世上へ貸附けまする、節季がきたら親方さんの、七十五人の庭番頭が、貸家先へと掛取りに行く。金は利足ではいさう致し、利足元金殘らずよりて、富貴繁昌と相成ることを、水の上にて、たとへたならば、飛ぶが如くや是れ卯の歳、親方さんの乾の隅は、並び〳〵て藏辰の歳、福德そのふる御巳の歳、門にりん〳〵轡の音する早や午の歳、内に聞きつけ大黑神が、馬の手綱にしつかとすがり、外へはやらじと未の歳、水難火難八九の難は御屋敷離れて皆申の歳、萬の寶は皆酉の歳、惡魔外道の申すよには、黃金花咲く此屋形に、我等如きは、すみかはならん。屋敷離れて皆戌の歳、殿の御威勢や七福神は末世末代御亥の歳。

○はや東雲の街道筋、木やり囃して地車の、轟く音ぞいさましや。和歌浦には名所がござる。一に權現、二に玉津島、三に下り松、四に鹽釜に、むざんなるか稚き者は、母の柳を都へ送る。元は熊野の柳の露に、育て上げたる其綠丸。梛や柳とちぎりたる、連理返りや楊枝村、夫婦坂とて今も猶、云ひ傳へたる物語り、うきを深山や三熊野の、柳の棟木はけに此因緣ぞしられけり。（那賀郡）



## すつたらばう

陰暦正月物貰ひの男裸體にて歌ふ歌。

○すつたらばうが、くるときは、世の中ようて世がようて、お家が繁昌、村繁昌、あたまにかけたる、しめなはは、一五三かい、五五三かい、いとさんほんさんはうそはしかが、おかるいな〳〵。（阿波郡）

## お福

陰暦正月物貰ひの女、お福の假面を被りて歌ふ歌。

○ヤレ奥さん御免なされ。西の宮のお福女郎でござります。とうに、ごねんとうに參りませうと思うたれど、福は方々門數で、やう〳〵今日、ごねんとうに、參りました。西宮のお惠比須さん大黑さん、さぞ、ごねんごろの、おことづけ。春は早々いぬゐの隅から、一分や小判がわいてくる。旦那さんには斗りこむ、奥さんにははきよせる、お子供衆の事なら、めつたやたらに、つかみこむ。ヤレ奥さん、此のおせはしのに、手取り足取りひげとり豆とり、おかもひなしてつかはるな。福はとなり、とち平、とんないさんところの、御馳走は、大石橋のれんがく、針金のにうめん、火吹竹のかばほこ、福のお腹もほゞりぼつてり、ふくれてゐます。其又ふくれた勢に、お庭ならしに一踊り、トコマカシテシワリトナ。麥よし、米よし、みのりよし、今年は明けての福の年。ホー〳〵。（阿波郡）

## 田植歌

○朝咲く花は朝がほの、晝さく花はひぐるまの、晩にさくのは雪のした。

○三井寺の夜明のかねに出たれども、これへ來るまに暮のかね。

○お舘へくる道すぢのじるたんぼ、すべつてこけて又起きて、とんぼからけて來たわいな。

○此ごろ地獄に博徒が徘徊、一から六まで五ぬけとはつたら、因果と五がで、、けさも衣も、獨鈷錫杖、水晶

の珠數から、鐵鉢迄も皆とられ、可愛い地藏さん丸裸。

此歌は草取、稻刈、臼搗、米蹈、茶摘、茶もみ、絲繰、絲引、絲績、麥搗、籾摺、麥打、地搗等にも用ふ。

（那賀郡）

○奥山の庄屋のかみさん、たてれば、ぽん〳〵、すわれば、ぽん〳〵、さつても、ようなる、おかみさん。（板野郡）

○お心やすいは常のこと、おあがりなされよ、たかだなへ。

○京極内匠は戀故に、可愛やお菊は返り討。

○殿御がなにやらさゝやいた。つぼねに入るなとさゝやいた。

○奥山の草刈り子供よ。栗の花が咲いたか。咲いたとも〳〵、九つ小枝に皆咲いた。

○奥さん杓子はどこにある。うーらのはしりの棚にある。

○さゝけ山のしづくで、傘十六流いた。（阿波郡）

○栗の木の一の枝に、猿が腰を休めた。



○お上りなされよ、高棚へ。お心安いは常のこと。

○隣で粉喰うて茶飲んで、重箱枕で休んだは。（麻植郡）

○奥山の栗の木に、栗の花が、よう咲いた。咲いたとも〳〵、九つ小枝に、みな咲いた。

○奥山の草かりよ。栗のとーがさいたかなう。さいたいなう、ほつくらほつたと、さいたとなう。（美馬郡）

## 麥打歌

○阿波で一番（附）「エーイエー、」名を揚げたのが、（附）「ヨイナーヨイナー、」五百羅漢に川田の一本、矢上の楠、新居の百貫手印、苫が島。（附）「ションガエー。」（那賀郡）

## 麥搗歌

○み山の奥の、その奥のきんだん鳥といふとりは、はがへは雪にたゝまれて、あしは氷につめられて、この雪氷とけるなら、おとのゝそばへはなしどり。ヤツトサノサ。（勝浦郡）

○父桔梗、母芍藥に姉牡丹、妹菊、賤雜頭。

○あんなきれいな、姉さんが、うちらのあたりにあるなれば、（合唱）「ヨーヨーヨイトナ、」繪かきやとうて繪にかいて、肌の守りと、するわいな。（合唱）「ヨーヨーヨイトナ。」（那賀郡）

○月にむらくも花に風、ヨーイヤヨイナ、おじやまになるかはしらねども、すこしおさまのおてやーすーけ、ヨーイヤ、おてやーすーけ。（海部郡）

### おすがた節

○アーもんでちらりとーうめのはなー、アヨイヨイ、おはいりなされといふの花、あとはおへんじなしのはーな、ヤツトサノサ。

○さまさんよ、くわんすは、りん〳〵りんきする、ちやびしやくちやかごは、ちわをする、下でわりきが、みをもやす。

○ごしやめんなされ頬冠、取らぬは不禮か知らねども、坊主あたまに露がうく。

○一番そーや、二番そーや、三番そーで來た故に、屋形は繁昌と踏みまする。

○深山の奥の其奥の、まだ其奥の岩つゝじ、芽を出し、葉を出し、蕾だし、何をたよりに咲く花ぞ。（勝浦郡）

○朝顔やー、（合唱）「ハヨーヨーナ、」晝はしほれて夜はーまた、ハヨイ、露をふくんで色にでる。（合唱）「ハーヤツトサノサ。」

○お姿吉野の（合唱）「ハーヨイヨイナ、」絲櫻一枝折らうと思へども、ハーヨイヨイナ、殿の物なら折られまい、（合唱）「あれさうぢや折られまい。」

○イエー、さらぐわんーす（新鑵子）君に濃い茶と思へどーも、（合唱）「ヨーヨーナ、」憎くや、かなけが、邪魔をーすーる、ヤツトサノサ。（合唱）「邪魔をーすーる。ヤツトサノサ。」

○イエー、殿さんーの、お聲聞くより走り出ーで、亂れた髪に氣も付かーず、（合唱）「ヨーヨーナ、」殿のお出での、

ごあいさーつ、ヤツトサノサ。（合唱）「ごあいさつ。ヤツトサノサ。」

○イエー、はじめて、おいでた殿様ーに襷も外さず、手も下げず。（合唱）「ヨーヨーナ、」そこの所は、御量見、ヤツトサノサ、（合唱）「ごりやうけん。ヤツトサノサ。」

○イエー、お姫（お殿或ハお様）は表の床のはーな、私は小溝の燕子花、（合唱）「ヨーヨーナ、」おそば恐れて下り藤、ヤツトサノサ、（合唱）「下りーふーぢ。ヤツトサノサ。」

○あさーがーほーのー、アヨイ、はなのつぼみのー、ふでーさーきーに、アヨーノ〳〵ナ、つるがまるらせー候とーなーり、アヨイ、ひとめのーかきにしのーびーざーき、エーしのびーざーき、しのーびーざーき。

○あーおせすんがりーと、たかはしーのー、（合唱）「コラセ、」下行水が、しづなれーば、（合唱）「アーようでたな、」もつれつきたいー、かづーらーばし。

○おやーかーたー、屋形内うちは、朝日あさひーで、出でたーれーどーも、みちのくー、尋ねー、はるばーると、たづーね來たぞーよ、えんしうーや。



○おいたはしいや照若君、侍從じじゆうたよりに力草、たづね、きしの、松下へ。

○門にちらりと、こもそうが、あの吹く笛のよさわいな、むねにやきばん彌五郎さん。

○つく〳〵〳〵〳〵走りつく。走りついたら、すがりつく。さまでないぞよ、だいがらのさを。ヤツトサノサ。

○夜前もやかたへ來て見れば、だいがらつまえて猫の糞、賤は門から犬の糞。ヤツトサノサ。

○私の様なふくとさへ、嫁に呉れいとほーぼから、河豚鮪私しや何處へもいかなじの魚。

○おすがたをー、ちらりと、ヨイナーー、みたに（地名）から、つのむーねー（山名）、ヨイナ、やまへとー願をーこめ、ソラヨイ〳〵ナ、なぬかなよーさかけあーんど。

○エーどなたさんもーおうたひなーされ、ハラヨイ〳〵ナ、どんなわーたーしがーつけーまーすーる。

○紺のエー前垂、どつこいな、松葉のちらし、ヨイ〳〵ナ、待つにこんとは氣にかゝる。ヨーハラヨイ〳〵ナ。

○わが戀はー住吉浦の、ドツコイナ、夕景色、ヨイ〳〵ナ。

只青々と松ばかり。ハリヤヨイ〳〵ナ。

○石山にかけし霞は吹きはれて、向う遙にみかさ山。

○君さんむかうの百足山、しづは唐崎一ツ松、あひの湖へだてられ、いまだ粟津がじつつらい。

○せたのから橋中ほどで、田原藤太秀郷が、むかでうたんと弓を引く。

○始めてあうた君様に、なにからさきで申さうやら、胸は矢走やばせの舟の數。

○山中通れば鶯の、梅の小枝に晝寢して、花のちるのを夢にみて。

○お様の召したる著物は、大阪染か京染か、白にぼつ〳〵梅の花。

○おすがた吉野の絲櫻、一枝欲しく思へども、人の花なら折られまい。

○竹になりたい五三竹、外に望みはなけれども、お様文書く筆の軸。

○お屋敷の御庭に咲いたる金銀草、一と年お花が五色咲く。春咲けや赤し、夏白し、秋紫で冬うこん、末に金の花が咲く。

○あなたは向へのなぎの花、私は手まへのあやめ花、及びないのが谷越し櫻。

○君に別れて夫れからは、袖は涙にしよんぼりと、乾く隙なき沖の石。

○そなたの御聲は、義經の初音の鼓打つ如く、賤忠信で無けれども、音に聞えて飛んで來た。

○頃は五月の末つ頃、晴るゝ隙なく降る雨に、水嵩增る川々や、私の胸は解けやらで、思ひ斗りが增さりけり。

○様さんが御歌上手と聞いた故、矢走の船に帆を卷いて、歌の文句を積みに來た。

おすがた節は田植、麥打、草取、籾摺、米踏等にも歌はる。

（那賀郡）

○お姿見るよりーー走りーでーてー、妻菊さんかよ懐しーや。よう出たな。言うてお側へ萎れー菊。ヤツトサノサ。

（板野郡）



## 草取歌

○朝咲く花は、朝顔の、晝咲く花は、ひぐるまの、お日が、傾けやー、桔梗の花。

○かうーとしよりーては、(附)「ドッコイナー、」かれーくさーのーはなさくー、(附)「ヨイトナー、」みーでーはーなけれーどーもー、(附)「ハラヨーイヨーイナー、」おさまーお歌うーたをー、聞きにー來ーたー、(附)「ヤットソーヂヤー、」聞きにーきーたー。

○おさまは、風よし、しよてんよし、ならびに御歌の文句よし。どこに非難が入れられうか。

(那賀郡)

## 盆神踊歌

此歌は古より上八萬村、佐那河内村、國府村大字和田村の特有にして、歌の由來等明かならず。又文句にある言葉に意義の不明なる者いと多し。盆に村人等あまた社地に參り、一大圓形を作り其圓の中央に二人乃至四人の太鼓打を置き、トントントントンと太鼓の拍子に四圍の者聲高々と謠ひ、且つ踊りつゝ、左へ〳〵圓周上を進む。踊手は皆團扇を持つ例なり。また干魃の時は雨乞として同じく此踊をなす。太鼓に三つ拍子とか八つ拍子とか或は十六拍子とあるは、其の打ち方なり。



### 入　葉

○をどりが參る。どちから參る。伊勢から參る。四十五の寶、頂きつれて、打出の小槌手に持ち連れて、御神踊りは一踊り〳〵。

### 孫　八

○ィヤ上から下る、ィヤ孫八彌十郎、ィヤ京からをこけ、ィヤ堺からかけご、ィヤ十七八をうめとのをこけ、ィヤさかずとほそれ、ィヤうまずとたまれ。ィヤをこけに入れて、ィヤかけごでしめて、ィヤあの淀河へ、ィヤ流された。彌十郎ィヤあかねの帶で、ィヤ太刀やふりさいて、ィヤ駿河の町をねりや廻る彌十郎。

### 御神踊（三ッ拍子）

○今日今宵の晝踊り、一ッは御神御奉公、ィヤ今日今宵の此中で、不淨穢れがあるとても、ィヤ今日今宵は許され〳〵。

### 御屋敷（同上）

○ィヤこなたの屋敷はよい屋敷、ィヤ東表に藏七つ、ィヤ南表に藏七つ、ィヤ中なる藏には大黑が、ィヤ打出の小槌を手に持ちて、ィヤ百姓揃へて御酒盛り〳〵、ィヤ前のえ河を見てあれば、ィヤ花の筏が流れ來て、ィヤあれをこなたへかいこんで、ィヤ殿になれ〳〵旅のとの。ィヤ黃金臼の八ッから建てゝ、ィヤ白がね槌を百拵へて、ィヤ九十九人の米搗く中の女郎たちは、ィヤ、どれが眼につく旅のとの〳〵。ィヤかちん前垂八重襷、生絹の帷子眼についた〳〵。ィヤあれをおれらにたもるなり、お手にや取らずと身にや著ずと、ィヤこなたの屋敷へ年三年〳〵。

○ィヤ此御池の蓮池に、鶴と龜とが晝寢して、ィヤあひで千鳥がしく踊り〳〵。



### 御屋形（同上）

○ィヤ御屋形樣の御屋敷、拜み申してあら美事。御椽の柱と六十六本ぬり隱し、塗り落したる木端に、金をのまして空は檜の、おのしふき〳〵、ィヤ熨斗ぶきの〳〵、八ッ棟作りの空見れば、東格子や西格子、丹波の御簾おかけある〳〵、ィヤ表の掛りを見てあれば、手桶鑵子は白銀よ、茶筅茶びしやく皆黃金〳〵。ィヤ扨次ぎの間を見てあれば、長持道具に槍千本、たちしやくぶりとは打見えた〳〵。ィヤ扨鷹部屋を見てあれば、白う黑うの、はいたかは、先ははやぶさあら美事〳〵。

○ィヤ辨慶が〳〵指したる太刀はあら美事、とんぼー返しの水車、水の上なる浪かくし、遂には辨慶かなれず〳〵。

○ィヤ讃岐左近殿召す船は、船は唐金帆は錦、柱は白銀せみ黃金〳〵。

### 千　松

○ィヤ己が弟の千松は、まだ十五にはならねども、小口を

いちぢとおたしなむ〳〵。ィヤ先一番に刀を召すが、刀はなにと好ませた。三尺七寸鎌倉よ。大のしのぎに、三尺さげをと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎにお弓を召すが、お矢は何と好ませた。重籐作りの御弓に、稻妻のうつほと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎに具足を召すが、具足は何と好ませた。上七段は唐金よ、下六段は板がねよ、合してふた色十三はら〳〵と好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎに兜を召すが、兜は何と好ませた。八方白銀お兜に、唐のしやぐまと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎにお馬を召すが、お馬は何と好ませた。關東名馬に虎月毛、金ぷくりんの鞍を置き、めうちん轡に綾の手綱をよりかけて、先は美事や、あら美事。

## 燕（十六拍子）

○ィヤ燕が〳〵勢田の唐橋から金ぎほしに巣をかけて、かひ子をまうけておさいづる〳〵。ィヤ其を大蛇が聞き附けて、槇の柱をきりり〳〵と卷きのぼる〳〵。ィヤそこで燕が云ふ事にや、大蛇は子をば育てぬか〳〵。ィヤそこで大蛇が聞き分けて、槇の柱をきりり〳〵卷き下る。ィヤそこで燕よろこんで、末繁昌におめでたかれ、世の中よかれとおさへづる〳〵。



## 御門

○ィヤこなたへ參りて、御かどの掛りを見てあれば、黄金の蔦が生えかゝる〳〵。ィヤこなたへ參りて、朝日の掛りを見てあれば、錢倉金藏あら見事〳〵。ィヤこなたへ參りて、屋形の掛りを見てあれば、八つ棟作りの檜皮ぶき〳〵、是も都に劣るまい〳〵。ィヤこなたへ參りて、廣間のかゝりを見てあれば、槍長刀は數知れず、虎毛のおつほか千五百、ィヤ虎毛のおつほが千五百。ィヤこなたへ參りて、厩の掛りを見てあれば、七軒厩に七匹たて、七人番所がかみを卷く〳〵。

## 御寶

○ィヤ上から御りう車が三つ下る。先の車に何を積んだ。蛭子大黑積みや下した〳〵。ィヤ中の車に何を積んだ。お伊勢の寶を積みや下した〳〵。ィヤ後なる車に何を積んだ。諸國の寶を積みや下した〳〵。ィヤ三つの寶をおし合せ、こなたのお庭へ積みや納めた〳〵。

## 大黑（同上）

○ィヤ乾の角なる福えの木、本は白がね中こがね、枝にはお錢がなりさがる〳〵。ィヤ枝にお金がなるならば、米でついぢをつきまゐらせ、米でついぢをつきまゐらせ。ィヤ米でついぢをおつきやらば、錢で踏む道築きまゐらせ。ィヤ錢で踏む道おつきやらば、太刀でもがりを結びまゐらせ。太刀でもがりを結びあらば、秋の鹿ではござらねど、ついの小袖をぬぎかけて、尻を廻して殿とせよ、尻を廻して殿とせよ。（名東郡）

## 盆踊歌

○剃刀片手に、床の門で、あはしてくだされ、床屋さん。あはしてあげるは易すけれど、もしやきれたら御氣の毒。

○白鷺が小首かたいて、ヨイソラ、二の足ふーんで、ホーラ、エライヤツチヤ、エライヤツチヤ、痩せはせぬかえ水かゞみ。ホーラ、ウントサノサツサ。

○種蒔かぬ、岩に松さへ、ヨイソラ、はえるでなーいか。ホーラ、エライヤツチヤ、エライヤツチヤ、添ふに添はれぬ事はない。ホーラ、ウントサノサツサ。（那賀郡）

○出たことは出たが、むぎのくろぼで、でたばかり。

○御しやめんなされ、私やひよこのとやだちぢや。

○たがよしはらの、露にぬれてはしのばれぬ。

○でた事はでたが、聲がをさのて屆きやせぬ。（海部郡）

○笹山通れば笹ばかし、猪豆喰うてほーい〳〵。

○踊るあはうに見るあはう、同じあほなら踊らなそんぢや。（麻植郡）

## 大臣踊

○ヨー昔大臣小臣殿、ヨー鬼界が島に放されて、ヨー此島を見てやればー、人間のー住まず島ではおんないがー、

誰はの人が教へある、ヤーたれはの人が教へある。

（勝浦郡）

○むかし大じん五りん殿、四海が島へながされて、こーの島は人間の住むべき島でおんないが、たればの島でおそれある。大じん踊は一踊り〳〵。

○われをば誰とか思ふらん〳〵。われこそ昔のゆゝ　大じんよ。さらば船をもよほせて、ろをとりかぢを押し直す。大じん踊は一踊り〳〵。

○こーのほーどのをみとり丸の高よりも、西ふく風がありがたい。大じん踊は一踊り〳〵。

○王あがはしへ早着いた〳〵。王あが橋やうを見てあれば、れんぼ風がいせいする。大じん踊りは一踊り〳〵。

（那賀郡）

## 鶴上踊

○備前の國の、絲屋が子息の二番目は、鶴上殿とて鳥さす折のいで立ちは、腰に金箔茜木綿に茶の小袖、都ではやるゆあみ笠、ひちく小竿で鳥をさす。

（勝浦郡）



## 大黒踊

○今年のお稲の、はえの、よさは〳〵、からが五尺に、穂が二尺、先大黒と祝はれた〳〵。大黒踊はひと踊り、ヤひとをどり。ヨーハツサ、サーサーサー、トントコトン〳〵〳〵、トントコ〳〵〳〵〳〵トン。

○此大黒は有德なり〳〵。扇硯を手に持ちて、にほんの寶をかきや集める〳〵。此屋敷はよい屋敷〳〵、四方四面に藏たて、、藏のまはりに松植ゑて、松の小枝に黃金花〳〵。此おせどの福よの木〳〵、よのみならいで錢や金やがなりやさがる〳〵。此おせどの蓮池に〳〵、鶴と龜とが晝寢して、龜を枕に、よれまくら〳〵。（那賀郡）

## 住吉踊

○住吉の松の葉越しに月見れば、しばし曇りて又さいた。

○住吉の松の葉越しに沖見れば、お船寶を積むと見た。

○住吉の四社の前なるそり橋は、誰がかけたよ、中ぞりに。

○誰というたが、誰がかけうた、おれがかけたに、中そりにや。

○住吉の松の葉にさへ書く文は、殿にさられて手が下る。

（那賀郡）

## 金高踊

○これより東の大和の國なる金高長者に子がなうて、峯の藥師に申しこみ、子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り、まうし子踊は一踊り。

○そーれでまーんだかなはずば、〳〵、寶珠作りのお腰ものを、千腰ばかり大内の寶に持たせ、峯の藥師のそりはしに、かけて參りませう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○それでまーんだかなはずば、〳〵、厚さ四寸の板金を千枚ばかり大内の寶に持たせ、峯の藥師の上ふきに葺いてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○それでまーんだかなはずば、〳〵、白目の鏡を千枚ばかり、大内の寶に持ちたれば、峯の藥師の釣鐘に、釣りてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下されゞ　まうし子踊は一踊り〳〵。



○それでまーんだかなはずは、竹のかもじを千さけばかり、大内の寶にもちたれば、峯の藥師の鐘の緒に、さけてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○その時藥師がおどろいて、黃金の棒を千本ばかり、黃金の足駄を千ぞくばかり。つけかへはきかへたづぬれど、長者にさづかる子種なし〳〵。

（那賀郡）

## 長者踊

○大和の國の金高長者に子が無うて、峯の藥師に願こめて、こめて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしも踊りは一踊り。

○厚さ四寸の板金を、千枚ばかりもーちの（後の）寶に持ちたれど、峯の藥師うはふきに、上葺ふいて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしも踊りは一踊り。

○それでも、まーんだ、かなはねば〳〵、をーりよー造りの御腰物の千腰ばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の、それ橋とかけて參らせう。南無藥師。子種を一

人御下され。もーしも踊りは一踊り。

○それでもまーんだ、かなはねば、唐の鏡を千枚ばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の釣鐘に、かけて、參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしの踊りは一踊り。

○それでも、まーんだかなはねば、竹のかもじを、千さけばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の鐘の緒に、かけて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしの踊りは一踊り。

○そこで藥師が驚いて、黄金の棒を千本ばかり、黄金のふくりを千さけ許り、ふきかへ、はきかへ、たづぬれど、長者に授かる子種なし。もーしの踊りは是れ迄ぞ。

（那賀郡）

## 姫子踊

○姫子に貰うた、手拭はく〳〵、どこでおとしたで、やれをしや〳〵、姫子の踊りは面白や。

○若しも誰じが拾たれば、召した御馬に代へませう〳〵。

姫子の踊りは面白や。

○鎌倉の孫が方より細布えてきた。是爰で染めてたもれよ。はりまのしよしやの、こうかけ、書寫坂本のかうかけ。かまくら踊りは一踊り。

（那賀郡）

## 鼓踊

○花の十九のいでだちは、あかね木綿茶の小袖、それまたまよはん人はない。つゞみ、つゞみ踊は一踊り。

○いとし殿御が來る道は、黄金とうろを八つさけて、それの光で來るがよい。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

○にくい殿御がくる道は、猿が酒もりするがよい。それにみとれてこんがよい。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

○いとし殿御が帶くけは、ぢんや麝香をくけまぜて、腰のまはりは花々と。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

○にくい殿御の帶くけば、いばらかいばらくけまぜて、腰のまはりはいざいざと。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

○いとし殿御の水くめば、桶も金桶金びしやく、清水しみづの上水を。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

○憎い殿御の水くまば、桶も破桶われびしやく、清水しみづの底水を。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

（那賀郡）





○召した御馬がいやなれば、あぶみかぶとに代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。

○あぶみかぶとがいやならば、具足のかぶとに代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。

○具足かぶとがいやなれば、差いた刀に代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。

○差いた刀がいやなれば、めーした御首に代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。

○召した御首がいやなれば、肌の守りに代へませう〳〵。姫子の踊りは是れまでぞ。

（那賀郡）

## 鎌倉踊

○鎌倉のふたご山で、小鳥籠をわすれた。九つ黄金小倉より、小鳥籠がをーしゆさよ。

○そことほるは七きむしや殿よ。あれこそこれのむこ殿よ。むこなれば人目打物松山こされた。

○あかしやくまにとらげ打物、あれこそおれのむこ殿よ。

鎌倉踊は一踊り〳〵。

## 神踊

○墨すりて、ながるゝ水に繪をかく殿は、いやよの、二道かくる殿は、アイヤ〳〵、ストトントン。

○淀川に綱なき船をつなぐ殿は、いやよの、二道かくる殿は、アイヤ〳〵、ストトントン。

（那賀郡）

## 烏帽子踊

○大坂若しゆにたふされた、もがりが空へたふされた〳〵。

○左をりか右折りか、冷泉折りかとりせいか、左折りをめす人は、するがの國のさがの守〳〵。

○さがの守もゑほすまい、頼朝殿こそめさうずれ、牛若殿こそめさうずる〳〵。

○牛若殿がめすあれば、くらまのお寺へござるべし。烏帽子あらため有るなれば、しゆりやにおいておかるべし。

○歌はかず〳〵多けれど、烏帽子踊りはこれ迄よ〳〵。

（那賀郡）

## 高麗踊

○太閤樣は人間人と申せども、諸國を照らすお日樣や。
○諸國の城へ呼びよせて、扨諸國木物を切りよせて、舟に作りてかうらいへ、さて其船をおし出して、海河原におつきある。（那賀郡）

## 牛若踊

○牛若殿のお馬のかゝりを見てあれば、奥州育ちの虎月毛、大黑小黑のお召しがへ〳〵。
○牛若殿の軍の懸りを見てあれば、兵庫前なるすゞかもが、浪を蹴上げる如くなり〳〵。
○牛若殿の寺入りは日本で一番鞍馬山、晝はお寺で學問なされ、夜は見かけのお太刀打。（那賀郡）

## 屋形踊

○屋形參りて、おていの懸りをみてあれば、白木の弓が千五百、まなごのおづなが千五百、おがい合せば數しらず〳〵。屋形踊りは一踊り。アイヤ〳〵、トントン〳〵。



○清水の小女郎が布を晒す、絹帶たすきかいやかけて、しほる手元にかいやほれてよ〳〵。屋形をどりは一踊り。アイヤ〳〵、トントン〳〵。（那賀郡）

## 若殿踊

○若殿さまへせしふがまゐり、一國參り、二國參り、拾三國が皆まゐり。
○若殿樣の御門、入りかはり參りて見れば、白銀柱ゆかや立揃へ、上ふき迄も黃金なる〳〵。
○若殿樣のお庭、入りかはり參りて見れば、金のいさごが足につく〳〵。
○若殿樣の馬や、入りかはり參りて見れば、七けん馬屋に名馬をたて、淸書の絲で髮をゆひそろへ、錦の手綱に金入轡、とち金迄も黃金なる〳〵。
○若殿樣のおてい、入りかはり參りて見れば、白柄の鎗が千ほあり〳〵。
○若殿樣の奥のま、かはりて見れば、からゑの屏風ゆかや立てそろへ、まばりを見ればすだれ〳〵。（那賀郡）

## 殿御踊

○山ちかければなー、ヤーもみぢ花で、ヒヨ花をお肴で、あつも一つきこしゆめせ、こーの酒。
○ヤーぬまづが宿よな、ヤーせまい宿で、ヒヨひさけをかるにな、ヤーヤーかりかねて、あたる花むこに〳〵、あのひしやくで、夕をなあのとほらしゆふ。
○ヤーわごれうも十九よな。ヤーおれも十九。ヒヨはく絲よな〳〵あのながのさきで、あのたつべしゆふ。（那賀郡）

## 早川

○早川に金わをすゑて火を焚くとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○墨すそながれし川に繪はかくとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○雲あてはなれし馬をつなぐとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○淀川に綱なし船はつなぐとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。（那賀郡）



## 川水踊

○川水川柳うちとけ〳〵と、さあかされかさるよは只思ひ事あらん。サーサ、そもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○絲櫻に絲柳うちとけ〳〵と、さあがざれかさるよは思ひ事あらん。サーサ、そもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○うき人の髮のわけめがうちとけ〳〵と、サーサ、さてもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○うき人の腰の帶めが打ちとけ〳〵と、サーサ、さてもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。（那賀郡）

## お庭踊

○ヤーさーておにはを見てあれば、黃金小草が足をかーり

まく〳〵。

○ヤーさーて馬屋を見てあれば、ヤーつなぎならべし名馬七きん。駒の毛色を見るなれば、ヤー一に栗毛よ、二にはあし、三に黒鹿毛、よる月かげ。

○ヤーさーて表を見てあれば、ヤー黄金つくり太刀が七ふり。

○ヤー太刀のめいじをよむならば、せきにせりよふせよかさに、やよぎ〳〵、ヤーやよぎ〳〵。

○ヤーこれのおせどを見てあれば、鳥もかよはぬ瀧の切岸〳〵。

○ヤー門のやぐらで沖みれば、青や小草がこれのごせりやうや。ヤー〳〵。

（那賀郡）

## 具足踊

○これの御子息虎松は、都そだちか、國侍か。まづ上方へ太刀打ちに、太刀をば何とこのませた。三尺さけをに虎皮まいて、親のしすけをさゝせた〳〵。

○兜はなんとこのませた。三枚しころに、四方しまだれふきかへす、大小鍬形おとした〳〵。

○具足は何とこのませた〳〵。上七だんはからくれなゐ、下六だんは紫よ。あやのはすゑで、十三ところおとした〳〵。

○鎗をば何とこのませた〳〵。もとは白銀中黄金、末は黄金のたすまきひすまき。

○馬をば何とこのませた。馬はぜんぜん連錢葦あし毛に、しのぶ七くに、明六さいとこのんだ〳〵。

○鞍をば何とこのませた。鞍は白銀、鐙黄金ぶさ、しりがへはから絲、さておん供のせい數は、八百八十四りんせきと見えたり。殘る五百はくれしよふ、先三百はつれもせう〳〵。

（那賀郡）

## 船の踊

○船をつくりて面白や。白銀の帆柱に金でほこそまいたれ。船の踊はおもしろや〳〵。

○船を飾りて面白や。綾の幕を柱かじ、錦で帆こそまいたれ〳〵。



○ひはとこがらど鶯と、船のへさきにすあかけて、黄金よろこびさかえて、巣をばくてさへづる〳〵。

○船も繁昌、ところも繁昌、こなたに倉を立てめさる。船の踊りは面白や〳〵。

（那賀郡）

## 讃岐節

○あー丸くなれ丸くなれ、一寸丸くなれ、コラセ十五夜のあの月のやうに。（囃子）ヨーホイヨーホイヨイヤナ。

○あーかくになれ、かくになれ、一寸かくになれ、コラセ一升桝のあの底のやうに。（囃子）ヨーホイヨーホイヨイヤナ。

（阿波郡）

## まかしよ節

○京屋のおすみと名も高い、さほどのきりやうでなけれども。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。手足の指の先までも、ゐりをのべたる如くなり。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。

小野の小町や、れいせいのおすみの心にやをかしうて、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。なびく心は更になく、北堀町のだいこくや。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。（阿波郡）

## 金比羅道中記

――讃岐の地名　（）踊の囃し。

○イザヤ讃州金比羅へ、行くも返るも逢阪の、花の坂本見渡せば、（姿も揃ふ菅の笠、）勇む伊關や馬宿の、二寶三寶荒神の、（乘つたか〳〵はいどーゞ〳〵、）休みなんせと云ふ下女が、袖は引田の町すぎて、茲に中山ごんべさん（脚氣がなほる參らんせ。）眼は白ろゞ〳〵と白鳥の、道の巷に胴取りに、（はつたか、はらんせ、ちよほいちを。）三本松かへ色かへぬ、君を待田や早たづら、音に聞いたるお梅茶屋、（お客鶯きてとまる。）當る富田や石田村、……

……と云ふ下女は、長い長尾の觀世音（佛の顔も二世三世、）深き願ひのふかみ草、つひに道草藤堂の、（十三塚や平岡や、）茲は佛の生るゝ山とかや。數々たきの御寶物、寢釋迦の本尊拜まんせ。（なる程〳〵合點おちや。）アレ〳〵〳〵、向うは八栗八嶋潟、其名も高き五劍山、（讃岐で富士とは飯の山、）末はとうゞ〳〵瀧の宮、鈴の綱手もあらう

がの、（清めて通る祓川）結びし中はこれがまー思ひ開きのなる事か。夢にも憎い川島は、（大盛そば切りあがらんせ。）中にも月が丸龜や、忍ない、さやばし行く町に、あれが虎屋か櫻屋か、（入りくるお客は大騒ぎ）小坂あがれば右左、中にも大きな飴屋さん、どなたこれから金比羅參詣、參詣がすんだら暫く休息。サンサノエー。（阿波郡）

## 八百物くづし

○八百屋娘にお七とて又もお江戸のしくじりは、一わ、わらべにひのごばう、うどの……、たれ知るまいと思うたら、やつこどうふに、みつけられ、すゞみやお前ひきざかな、大根さまの仰せには、こらやい、そこな、わかめとがのしひたけ、ありのみや、こまゞゝいはたけ御意あつて、其れとき、つけ、みつばみたよな手をつかへ、かもうりみたよなかほをあけ、申し〳〵大根さん。只今申し上げ豆腐、いつぞや夏の唐辛、なすびのこまい西瓜まで、うどや、さんしよの、えんぐみも、つがへはなれぬ、にはとりの、うんだ卵のかばやき、まだたべもせぬ、おりからに、寺の吉さに蓮根や。（阿波郡）



## 餌差音頭

○エーこちのとのごは、忍さしでござる、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。エーこしにもちばこ、手にさをさけて、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ、エーさらしうでぬき、ねぢはちまきで、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ、エーてんじん小林こうめのこえだ、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ、エーこうめこえだに小鳥がとまる。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。エーそれをささうとさを差しのべれや、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ、エーさをがみぢかし小鳥がたかし。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。エーそこで小鳥がへんがへなさる。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。エーおまへ忍さしかわしやもずの鳥、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ、エーごえんあるならまたたのむ。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。（美馬郡）

## 籾摺節

○（男）逢うたることも見たことも、ヨイ〳〵、無い樣さんとこん晩は、ヨーヨーヨーナ、お肩ならべが有りがたい、ヤット、有りがたい〳〵。

○（女）初對面の殿さんに、ヨイ〳〵、たすきはづさず手もさげず、ヨーヨーヨーナ、無禮の程か知らねども、どうか御許し願ひます、願ひます〳〵。

○（男）それやお互ぢや賤とても、破れ手拭ほゝかむり、これも無禮であるなれど、どうか御容赦頼みます、頼みます〳〵。（勝浦郡）

○お館へとうに來うとは思たれど、來る道は遠し足はだいし、こゝへ來るのが今の比。

○おそく參る賤が身は、お手傳にはならねども、すこしお樣へ心ざし。

○殿さんへ。おそい早いがあろかいな。御手傳とはありがたい。

○姫さんの後姿を拜すれば、菊や桔梗の立姿、歩行く風蘭、百合の花。

○御屋形の碓の周圍に菊植忍て、目もきくはもきく、明日はあなたの便り聞く。

○御屋形の、ハーヨイヨイ、御門は入れば廣々と、ハラヨイヨイナー、御屋敷見ればへさつぱりと、ソラ又じつさつぱりと。ドコショノショイ。

○床にかけたるはま弓は、八人張りに十五束、御目出たいぞや、じようとんば。

○御屋形の御屋敷見れば廣々と、西も東も石塀で、其又裏の蓮池に、鶴と龜とが舞ひ遊び。

○御屋形の、ごもんの石に腰をかけ、内の樣子を菊の花。アラヨイ〳〵ナ。

○御屋形へ、來る道筋は、駒鳥の、勇み進んで來たわいな。

○今宵賤らは、姉さんよ、雜炊すきぢや粥すきぢや、歌のかきまぜ、なほすきぢや。アラヨイ〳〵ナ。（那賀郡）

○エーひめさんごしやめんなされ。ヨイ〳〵ヨイトナ、おじやまながらもおてやーすけ。オガラモオテヤスーケ、オテヤスーケ。

○ふたりならびしあねさんの、ヨイ〳〵ヨイトナ、どちらを見ても皆蕾、私も蕾の花なれば、いつそおそばでさかしたい。ヨイ〳〵ヨイトナ。

○あのごきれいなあねさんを、花にたとへて申すなら、立てればぼたん、すわればしやくやく、うしろすがたが百合の花。（海部郡）

○籾摺りおかゝ。一升すつたら五合やろ、一斗すつたら五升やろ、一石すつたら五斗やろ。（麻植郡）

## 米蹈歌

○見る目へん、寢て耳へんがあるなれば、手へん合はして、をがみます。

○姉さんと元は深川染なれど、しだいにうすらぐ水淺黄、末はさつぱり桐の紋。

○今夜も屋形へ來て見れば、れんぎが庭はく、箒が味噌する。あわてさんすなお客でないぞや、ひきやくでないぞや。しゞは籠の米踏みぢや。（那賀郡）

○おやかたへ、とうにこうとは思うたれど、ハーヨイヨイナ、お主がゝりの身ぢや故に、ヨイ御用すまして今こゝへ、ヤーレ、今こゝへ、今こゝへ。おゆるしなされ旦那樣。お揃ひなされ、どなたにも、先づは御無事でおめでたい。ハーヨイ〳〵ナ。

○夜前もやかたいきてみれば、ハーヨイ〳〵ナ、ぼたんの樣なあねさんが、庭にちら〳〵梅の花。ハーヨイ〳〵ナ。（海部郡）

## 米搗歌

○始めてあぶみの姉さんに何からさきで申さうやら、胸の石山開かれん。ほんにうき世がまゝなれば、あのごきれいな、ひめさんと、堅田の浦へ店を出し、すこしの落雁してみたい。（那賀郡）

## 地搗音頭

○イザヤ讃州金比羅へ、行くも歸るも大阪の、其坂元を見下せば、エーエーサツサエーサツサ、姿も揃うて菅の笠、



笠の締紐が、ヤーレサノ、殿ならよーかーらう、締めようとだるめようと、ヤーレサノ、わがまーまによーっトコドー。親方酒手はどうぢやい、どうぢやい。（名東郡）

○東西や東西や東西南北淸めて給へ。（囃）ヤートサツサエーサツサ。

○イザヤ讃州金比羅へ、往くも還るも大坂の、大坂峠を、ヤレコラ（囃）「サイ」、夜で越す時はよ、（囃）「ハイ〳〵」、親は是非ない、ヤレコラ、（囃）「サイ」、妻戀し。（この時一齊に綱を引きて棒を投げ上げ、次の囃を唱ふ）（囃）「親方酒手はどうぢやい〳〵。」それ坂本を見渡せば、皆さんそろうた菅の笠、笠のしめ緒が、ヤレコラ、（囃）「サイ」、殿ならよかろよ。（囃）「ハイ〳〵」、しめうと、だるめうと、ヤレコラ、（囃）「サイ」、我まゝに。（囃）「親方酒手はどうぢやい〳〵。」

○すぐに引田の町すぎて、伊座の中山ごんぺさん、脚氣がなほる、まるらんせ。ハイ〳〵下が竹座で、ヤレコラサイ、音がする。親方酒手はどうぢやい〳〵。

○いさむいせきや馬宿の、二方三方荒神の、乘つたか三吉はいどうどう。馬よはよゆけ。ヤレコラサイ、靴こてはかそよ。ハイ〳〵三十五文の、ヤレコラサイ、四つぐつを。親方酒手はどうぢやい〳〵。

○すいときゝたるおんみ茶屋、こゝはたづらのおんみ茶屋、茶屋のかんばに、ヤレコラサイ、梅の木のゑかくよ。ハイ〳〵、客はうぐひす、ヤレコラサイ、來てとまる。親方酒手はどうぢやい〳〵。

○みは白々と白鳥の、道のちまたにどう取りが、はつたりはらんせちよほいちを、ちよいとはりなされ。ヤレコラサイ、若し半がでたらよ、ハイ〳〵二度のつとめは、ヤレコラサイ、こちがする。親方酒手はどうぢやい〳〵。

○向うに見ゆるは富士山と、いひの山とはあれかいな。とけてながれる、ヤレコラサイ、お山の雪はよ、ハイ〳〵、虎屋くらやの、ヤレコラサイ、化粧の水。サーサコレカラ休息を。親方酒手はどうぢやい〳〵。（板野郡）

## 木遣節

○あしゆーの、ヨホホー、これみなみがた、なんぶーごー

りに、ノーかくれなき、ぢとーくわんだの、コーレ一の弟子、名をば、あきやまいすけというて、いすけしばらく、病氣のせつに、いせーにー、ヨホホー、少しの、願ごめをする。こめた願なーら、ほーどかなーらぬ。親子、ヨホホー、もーろとも、伊勢まゐりーする、伊勢は首尾よく、げかうでさがる。もどるー、ヨホホーエ、道ではなう、馬をかる。馬のなーかのりたーぞ、とへば、うまのなーかのり、いーすけの、はーはよ。馬はつかれて、るーねむりをするー。すでに、京橋わたらんとすーる。そこで、ヨホホーオホホ、まーごめが、なうはーらをたてー、なーにが、不足で、るねむりをするー。ひやくに文や、ヨホホー、二升の、だーいづをかまし、二足はーちもん、よーつぐつをうちー、そこで、まーごめのー、しーばきたてー。

（阿波郡）

（秋山伊助）（伊勢）（諸共）（下向）（母）（馬子）（大豆）（八）

## 船歌

○伊島、淡島、丸が島、ずつと離れて友が島、通ふ船路が由良の瀬戸。

○一にいわしや二ににべの魚、三にさごしやしびの魚、五ついさぎやむつの魚、七つなへらぎやえかます、九つこのしろ飛の魚、長くうたへばはもたち魚。（名東郡）

## 住吉

○住吉の松の葉ごしに月様みれば、しばし曇りて又さえて、お月や山端に身をこゝに。ソモジエコイニハノエソリヤワカ。

（海部郡）

## 君がよは

○君がよは久しかるべしためしには、すぎてぞ植ゑし住吉の松。

（海部郡）

## 榊葉に

○榊葉にゆふしでかけて打ちはらふ、身にはけがれの雲きりもなし。平手を打ちて打ちさがる。

（海部郡）







○難波津や、梅を慕うて鶯の、聲音もなまる法華經の、軒を定めぬ旅ぞ憂き。不便やおつる只一人、寄る邊なき身のよる門も、只ふり心に、南無大師大慈大悲の觀世音、あいの道に引かるゝ順禮も、背におひづる前に札「ふだらくや岸うつ波はみくまの、」アイ順禮に御報捨と、云ふにお弓がしらけをそつと見れば、稚き順禮の。（勝浦郡）

○東西ノ〳〵東西南北靜まりたまへ。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。お家が富貴繁昌と、わか大黑がござんした、ほふろく頭巾でにこノ〳〵と。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。いつもむりに、頭巾をかむり、内で遊びをするよりも、たゝらふむのが、おもしろい。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。そんなら、ふめノ〳〵、やつしつしノ〳〵、獅子まひノ〳〵まひこほし、けがは、さすまいノ〳〵めんひや。ごりしやうの、あるところ、ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ、わしの使の鼠と云ふも、まめで働く忠義もの、親方おもひの白鼠。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。色はちつくり、黑ても、まゝよ、人にすかれる、笑顔よし。こがねは世界のほれぐすり。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。兩手に持ちたる、うちでの小槌、ふればふるほど金銀が、雨ほど、雪ほど、おかれうと、家にも倉にも、積みあまる。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。金もたからもふくろの内に、をさまる御代はさらノ〳〵と、五穀もわきでる金もわく。打出の小槌の玉金よ。ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ。直のよいかねを、ふりいだし、おやかた樣には大願成就、たからつんで、ハエーノ〳〵サツサ、エーサツサ、暫く休息。エーエーサツサ、エーサツサ。（那賀郡）

（難波津）（軒）（身）（門）（心）（前）（報捨）（稚き）（槌）（玉金）（直）（大願成就）

## 由良の港

○丹波路に由良の港はあれなるか。都に優る風景は、偖茲に岩木の判官正氏（奉公）が、忘れがたみのつしを丸、郷人に劣る暮しや鎌ほうこ、鹽くみ桶の重きより、重き思ひの山路を、鹽と薪とを三荷づゝ、いばらに手足をかきさかれ、濱邊には浪に取られし桶ひしやく、涙に道もあんじゆ姫、こなたの道はつしを丸、ヤーおまへは姉さん弟かと、見合す二人が目に涙、うばやめのとにかしづかれたるおと

〻ひが、寒き雪夜にあらむしろ。運命盡きしかたゝかれたり、いやしい土民にふまれたり、名字のけがれ我身の無念、口惜涙限りなし。毎日ひにちのせめせつかん、何と身もよもあられうか。辛い辛抱と母親に、逢ふ計りのこの苦勞、何處にどうしてござんすやら、逢ひたい見たい是れつしを。やう〳〵涙を押し止め、申し姉さん我家の亂れし其もとは、大江のぐんりやう時角め、恨みを晴らさで措くべきか。立つたる正札おとゞひが、きりくづしたる勢は、心地よきこそ、ソーレハ見えにけり。

たゝら節は多人數集りの場處、又は樂車を牽く時などに歌はる。

（那賀郡）

## 油絞歌

○油絞が、「ホーエ、」大阪女郎見て、「ホーエ、」内のかゝみたら、「ホーエ、」千里おく山の、「ホーエ、」ふるい狸ぢや。「ホーエ。」

（勝浦郡）

## 酒造歌

○わしの殿御はどこでもわかる。ヨイナ〳〵、わらで髪結うて、三文編笠けつぐくり、脊中に大の字三つも四つも五つも入れて、阿波の吉野川あちやへとび、こちやへとび、エーヤサツ〳〵で筏乘る。ショーンガエー。

○竹に雀、エーエンエチユー〳〵バタ〳〵、羽を揃へて品よく止まる。止めてとまらぬ色の道。

○ぐわんてう（元朝）に鶴の鳴き聲あのはねつるべ、むかへますぞよ、わかみづを。

○めでたいとも、さかづきのなかにをさまるしかい波。

（名東郡）

## 茶摘歌

○一番に二番の煙草切り交ぜて、味もなし地の煙草盆。

○朝咲く花は朝顔で、晝咲く花は日車で、日が傾きて桔梗の花。

○十五夜の有明月は待たねども、殿御の御出を待ち兼ねる。

（那賀郡）

## 藍こなし



○とりはばら〳〵、夜はほのほのと、あけれや、お寺の鐘がなる。ションガエー。

○八栗八島の、ノーホイノーホイ、大段小段根來白峯ちごがだけ。ションガエー。

（美馬郡）

## 伊勢長節

現時中流以下祝儀の時に行はる。

○春のひかげののどかにて、波しづかなるよさの海、うなばら遠く船だして、島子のつりをなせる時、波の中より一匹の、大龜いでしがたちまちに、少女化かしてをとめとなりにけり。少女しづかに云へるやう、われいま君を導いて、いざ〳〵ゆかんと言ふまゝに、島子はあとに從ひて、行くや千尋の海のそこ、五百重の波をかきわけて、綾の衣を身にまとひ、あまたの者にかしづかれ、玉のうてなに浦島子、長き月日を送りしに、をしきや島子はさとがへる。

（勝浦郡）

## 伊勢節

徳島縣　伊勢長節　伊勢節　伊勢音頭

### 餅の由來

○餅の由來を申すなら、正月來るなら祝餅、二月來るなら地神餅、三月來るなら雛の餅、四月來るなら釋迦の餅、五月來るなら節句餅、六月來るなら祇園餅、七月來るなら佛餅、八月くるなら春の別れの地神餅、九月くるなら栗の餅、十月くるなら亥の子餅、霜月來るなら門徒衆に於て、廿七夜の待夜餅、極月來るなら、ソーレバ、祝餅。

（阿波郡）

## 伊勢音頭

○川の數でも有れや有るものよ。大鼓に、はつたが馬の皮、三味にはつたが猫の皮、鼓にはつたが狐皮、七夕さんが天の川、お半長右衛門桂川、ひなどりこがさん、中を流るゝ吉野川、楠正成湊川、紙屋治平はしゞみ川、お饅頭包むが竹の皮、今の姉さん慾の川。

○今年豐年穂に穂が咲いた。一穂が七俵で、酒に造れば一すまん、四つ世の中よい樣に、五ついつもの如くにて、六つ無病息災に、七つ何事無いやうに、八つ屋敷を掘り廣げ、九つ小倉を建て並べ、此倉寵愛する人は、命永か

れ末繁昌。ソラ〳〵、ヤツトコセーノ、ヨイヤーナ、リヤニノ、コリワイセー、サヽナンデモセー。

○旦那セー〳〵〳〵大黒、チヨイ〳〵、お福さんゑびす。ヨーイセーコセー、サヽナンデモヨーセー。

○阿波の、セー〳〵〳〵徳島のチヨイ〳〵、十郎兵衛娘、ヨーイセソ！コセ！、年は七つで名はお鶴、ソリヤ左に杖をつきまして、ソリヤ背には笈前に札、ソリヤ巡禮御報謝と國なまり。

○お伊勢セー今朝出て松坂泊り、ヨイセソラセ、關の次郎さんが、ヨイソラー晝やすめ。ソラソラヤ、ヤツトコセ。

○瀬田のセー唐橋唐金ぎぼし、上方參りの女中さん、橋の欄干に打ちもたれ、向うに見えるあの山に、昔に於てはどうぢやいな。昔しに於てはあの山を、一卷三卷四卷五卷、七卷半はつきりくるりと引き廻し、瀬田のさきの其の下へ、によつと頭をだして、龍宮界の乙姫を、既に呑まんとするところ、奥州出羽岩城の判官輝政公を滅ほした、新田方なるごうけつの、田原藤太秀郷が、五人張にて十五束の矢根に唾をつけまして、射とめた所が蜈蚣山。

○綠をりとりをりとり綠、因幡で鳥取相撲取り、讃岐で白鳥按摩取り、阿波で藍取り金を取る、軍で首を取る知行とる。羽柴久吉太閤は草履取りから天下取る。（三好郡）

## やつとこな節

酒宴の終らんとする際、大杯を上席の客より順次に廻すときに謠はる。

○紀州のとのさん、ヤーハーエー、ヤツトコセ！ノヨーイヤナ、紀州のとのさん、蜜柑で茶々のむ。ヨーイトナー、エーヤエーヤエーヤー。

○薩摩のとのさん、ヤーハーエー、ヤツトコセーノヨーイヤナ、薩摩のとのさん、いもくて茶々のむ。ヨーイトナー、エーヤエーヤエーヤー。

（那賀郡）

## 水取り

○山鳥、エーエ、イホヤトヨエー、ヨイナ〳〵、子にこそ、まよへー、たちわかれまい、エーイホヤトヨエー、このもりをー。イホヤトヨエー。

○しわとつつこめや、エーエ、イホヤトヨエー、ヨイナ〳〵はやもちあげる、エーさても、ぐわひな、はねつるべ。イホヤトヨエー。

（板野郡）





# 香川縣

## 大黒舞

○きたはいな〳〵、何が又きたはいな。大黒さんにお恵比須さん。大黒さんと云ふ人は、此界の人でない。天竺天より下りた人、天竺天よりおりるとき、天の川の瀬風に吹かれて、お色は眞黑い。一には俵踏むまいて、二にはにこり打ち笑うて、三には酒すくりて、四には世の中よい樣に、五ついつもの如くなり。六つは無量息災に、七つ何事ない樣に、八つ屋敷を廣げたて、九つこなたの御庭には、小松千本植ゑ置いて、梅千本植ゑ置いて、鶯千羽とまらして、ホーホケキヨー、ホケツコーケツコーとなくなれば、福はこなたの御家にどつさりと、入り込みました。

## 田植歌

○大麻や山ーまの草かりー。ふーぢのはー藤花ながぬ咲いたかな。
さーいたーはいさいたはい。なゝよもやよもにさいたはや。
○ないのなかなる鶯どり、なにかなかんとさいづる。大藏桝にとかきをそいて、俵をつめとさいづる。
○あめはほどよしふれよかし、風もふくならほどよくに、秋に籾米藏にみて。
○腰のいたさよ、せまちのながさ、四月五月の日のながさ。
○西山の草刈よ薔薇の花が咲いたかの。咲いたとも咲いたとも、ここにも小草が咲いてゐる。
○畦豆がによいと出れや、浮世笠かついで、西の宮の神主が、中間かと答へた。
○編笠賣奴がおれらを女房にせうと云うた。せうと云うても、によーと云うても、おれ等は女房によーならぬ。
○新葉の大根がもみづけにもまれたや。もまれたや〳〵、吾等もとのごにもまれたや。
○さうとめ〳〵田植ゑんか、一ぷくつけんか、やすまんか。
○日暮におひだした駒はどこにつないだ。尾を越え山を、谷草につないだ。
○とのごの通ひ路、板の橋をかけうや。板の橋やとんどろめく、金の橋かけうや。
○奥山に草かりの。栗の花咲いたかや。咲いたとても、七ふき八ふき九ふき、十ふきまで咲いたとかや。
○かどの錦賣や今宵はこゝがおとまりか。日暮には磯邊を通れば、千鳥なく。千鳥や亦鳴け。聲を聞かう。
○ころべころべ瓢簞や。西のしよじのへうたんよ。
○日暮にのり出した駒はどこにつないだ。山をこえ谷を越え、谷底へつないだ。
○山田のものとて、かしなから團子に豆の粉、わ等もよばれたが、今こゝに戻つた。

## 盆踊歌

○エーヨー、七月とや、七夕ぢや堀端ぢや渡場ぢや。エーご三味にはうれん旗、平家が白旗、源氏が赤旗、渡場は川のはた、在郷（田舎）のおつさん（翁）が納屋のすみに織るのが、これが又むしろ機。



○エーヨー、八月は初馬ぢや、はりこ馬ぢや、けーよー馬ぢや。エー金刀比羅さんには金の馬、ざいごのおかさんが扇にかけてひつぱるのが肥取馬の盲馬。
○エーヨー一合まいた籾種の、そのますあり高は、一石一斗一升一合と一勺、エーヨーイヨヤナコラセ、エーヨー、二合まいた籾種の、その桝あり高は、二石二斗二升二合と二勺、エーヨーイヤコラセ。
○一家は親類、二毛なら猫ぢやよ、さんけ（參詣）するなら讃岐の金比羅さん、四けがな雨風（あめかぜ）、五けさんこちやいむけ、六けが金札ぢや、七おきやつまらん、八けが近江で、九けさん京都ぢやな。
○お寺の門には鯛がをる。鯛かと思たら、しやちほこぢやとせー。ソラヨイ。
○丸くなれ丸るくなーれちよとー丸くなれ。十五夜お月さんの樣にちよと丸くなーれ。ヨーホイヨーホイヨーイヤサ。
○とざいやとざいや（東西）、とうざいやー、こらとうざいやなん（南）
ほくおだやかに（北）、ソーラヨイヨイヨイヤナ。またとざいといふのは、わかいしゆよ。コラセ、靜（しづ）もりたまへといふことぞ。ソーラヨイヨイヨイヤナ、それにちがひはないはいなう。コラエ、ちがひなのが眞中で、日本京都が眞中で、京都六角堂で觀音さんが眞中で、觀音さんでお臍（へそ）が眞中で、是がほんのあだ文句、あだやひよひやくは文句にすらぬ。さらばこれから文句にかゝる。金刀比羅ごりしやうでやろかいなー、地藏和讃でやろかいなー。
○さいの川原の地藏さん、一重つんでは父のため、二重つんでは母のため、三重の塔をつみたてゝ。（以下略）。
○此處は住吉のお前で御座る。いざや若い衆たちみや巡りを始めて、神をまひすじしゆめの酒をまゐらして、女人や。こゝは住吉のお前で御座る。ひしや霧に淡路のしばやと漕ぎ來る舟、さー面白や。女人や。
○今のおんどさんの御聲は云うたら、千里奥山の細谷川の、梅の大木その若枝に、とんととまりしうぐひす鳥が、ほけきやう〳〵とさいづるごとく、私はそのよに聲が出ん。
○愛宕參りに袖を引かれた。雨の餅をひらうた。これも愛宕のご利生かの。おもしろやー〳〵。

○館に參りて御門のかゝりを見渡せば、御門柱は槇柱、桁はせんだん、たる木は欅と打ち見た。尙も見事な館がかり。館踊ををんどろ〳〵。

○館に參りてお庭のかゝりを見渡せば、鶴と龜とが晝寢して、こがね正がねふりかゝる、尙も見ごとの館かゝり。

○館に參りて馬屋のかゝりを見渡せば、七間馬屋に七疋立て、一の名馬はどれ〳〵ぞ。晝は河原毛夜は月かげ、尙も見ごとな館かゝり。

○若殿の世の始りはお馬乘る。お鷹も參る、皆國々からお使者參る。お屋敷踊を踊ろかやの。

○こなたの屋敷はよい屋敷、前には泉水高どうろ、うしろにしんちくしだれ柳。長者殿桝取見れば白銀しいて襷にかけて、黃金桝で米はかる。

○いつよりも春の夜は鳥の聲でねいられな。たまさかの君なれば、名殘惜しの。今宵は良い、そこにをりやれな。をりやる中にもくどきがござる。思案をすれば、おもしんしろや。

○夏の夜は蟲の聲でねられな。たまさかの君なれば、名殘りをしの。今宵は良い、そこでをりやれの。をりやる中にもくどきがござる。思案をすれば、おもしんしろや。

○秋の夜は鹿の聲でねられな。たまさかの君なれば、名殘りをしの。今宵は良い、そこでをりやれな。をりやる中にもくどきがござる。思案をすれば、おもしんしろや。

○冬の夜はあられつりてねいられな。たまさかの君なれば、名殘り惜しの。今宵はよい、そこでをりやれな。をりやるなかにもくどきがござる。思案をすれば、おもしんしろや。

○戀草の〳〵、月は樣々多けれど、しなが月こそ名所なり、名所なり。山は樣々多けれど、音羽山こそ名所なり、名所なり。

○丹後但馬の高手そろれそと立ちより、御茶なりと、お茶がいやなら、お酒なりと。

○いとし殿御が水汲めば、岩の下なるそこ清水、にくい殿御が水汲めば、岩の上なるひなた水。

○盆の七日のたなばたは、河をへだてゝ妻思ふ。雨がふるなら渡られん。これまでぞ。





○戀しや寺の鐘の聲、戀しとゆたら逢はれうかなう。あの山影にをりやる人に、戀というたらかなはうずものか。

○櫻の下の清水を汲めば、いかなる人も袖ひく〳〵〳〵。

○豐後の國のならひには、亂車かわがわるい。

○豐後の國の習ひには、空に包をけやけるか。豐後踊は是非ぞ〳〵。

○かーら一國の黃帝は、(附)「しんがでかんきでんしよーの池、」池の表を見渡せば、(附)「秋吹く風の一條の絲ひき渡るさゝがにの」、蜘蛛がやさしや船を乘る。(附)「それを見て黃帝が船を造らず。」御座は上等に出來しゆんで、(附)「名づけて祝ひ給ふ。さても見事の此の御座に、」御めしなさる我が君樣、白銀柱を卷き立てゝ、綾や錦を帆に卷いて(附)「黃金をせびに含まして、手繩身繩琴の絲、」寶が島へ乘り込んで、(附)「思ふ寶を船に積み」君の社へ納め置く。

○霰を卷き上げ霞かゝりて見えにけり。箱根峠のならびには、山は高山富士の山、(附)芽出度いなう。

○鞆の下津井のあひの白石で、汐が分れのそれ月月は出た汐の時。

○國は近江においてから、江州城下を膳所本多、水にうつりし膳所が城、ござり矢走のまるたぶね、名高き勢多の唐橋で、からかねぎぼしもうちてある。おほはし小橋のその下に、ふるき傳はる大蛇あり。くる年今ねん子をうめど、三里向うの百足山、ふるくつたはる大百足、百足こそうに子をとられ、又も子をうんだけれど、またも百足に子をとられ、ぬけちる處はどこぢやいな。草葉の町までぬけちれば、またもや巢を見たなれば、またもや百足に子をとられ、そこで大蛇が思案する。あとによつぎがないゆゑに、誰ぞ賴む人ないか。たのむ人とてたれもない。通りかゝりし若武者が、俵藤太の秀鄕ぢや。それとみるより大蛇こそ、七つの牙をふりたてゝ、くれなゐの舌をまきたてゝ、橋の上に首もたし、それともしらずに秀鄕は、朱鞘の大小おとしざし、稽古もどりをまちうける。秀鄕それとはつゆ知らず、唐橋上にくるなれば、大蛇こそを見るよりも、あとへひいては武士でなし。大蛇の側につめよりて、大蛇の上をふみすぎ、あといもむかずに通りぬけ、それとみるより大蛇こそ、これがま

ことのおさむらひ、大蛇のかたきをたのまうと、このまゝ頼みは出來はせん。もとの湖とびこんで、美人女と身をかへて、平田の川でまちうける。秀郷それとつゆしらず、平田川へつかれては、美人女が云ふことに、いかになうこれおさむらひ。私こそと申するは、勢多の唐橋その下に、ふるくつたはる大蛇なり。今年今年子をうめど、三里おくの百足山なゝまき半のおほむかで、百足に子をとられます。私のかたきをたのみます。それときくより秀郷は、いやと云うては武士でない。大蛇のかたきを引きうけて、平田川をたちのいて、秀郷屋敷へつかれては、いかになうこれ父母よ。秀郷こん日かへりがけ、せたのからはしその下に、大蛇こそがをりまする。平田川へつかれては、美人女とばけてから、秀郷まへにつめよりて、あなたにたのみがござんすと、今年くる年子をうめど、三里おくの大百足、百足に子をとられます。百足うちくだされと、秀郷大蛇にたのまれた。大蛇のかたきを引き受けた。それと聞くより父母も、百足と云ふはうちにくい。いへば秀郷かたるには、百足位はまだおろか、弓矢を秀郷かしてくれ。父母それと聞くよりも、弓矢かすのはいとやすい。おやこ三人もろともに、わかれの盃いたされて、あくるよじつをまちかねて、弓矢をせなにおうてから、平田川へといそがれる。平田川につかれては、まるたふねにうちのりて、秀郷一人おしたてる。百足山へとつかれては、そこで秀郷いひきかす。いかになうこれかの百足、このたび秀郷まゐりしは、勢多の唐橋その下の、大蛇のかたきをたのまれた。觀念さらせとかの百足、それときくより百足こそ、三井寺樣のかねかつぎ、それとも知らずに秀郷は一本うつならごんとなり、二本うてども又ごんと、四十九本もうちすてば、百足がかねをぬいでから、秀郷みがけて呑みに來る。それと見るより秀郷は一本のこりしとめの矢で口のはくそをつけてから、ぶんとはなせば一うちに、なんなく百足をうちとりた。あとにのこりし秀郷、まるたふねにうちのりて、平田川へつかれては、丸太船よかけあがり、勢多の唐橋いてからは、秀郷そこで聲をかけ、百足を首尾よく打ち取りた。安心なされよこら大蛇。あとへもむかずに秀郷は、





わがやをさいていそがれる。秀郷屋敷につかれては、父母樣におほてがら、始終萬々物語り、あひも四五日たつうちに、美人女がきてからに、たのむ〳〵と聲をかけ、それときくより母おやは、女關の障子をすらとあけ、互に挨拶いたすなら、私こそと申するは、勢多の唐橋その下の、ふるくつたはる大蛇なり。百足を打ちくだされた、御禮と申してみからゆゑ、この米一俵を御禮に、若武者樣にあげてくれ。いへばぼうと消えるなり。むかしが今にいたるまで、俵藤太と名をのこすらん。

## 京踊歌

○一合まいたもみだねの、そのありますが、ドツコイセ、一石一斗一升一合と一勺、ソラヨホイヨホイヨーイヤセ、二合まいた籾だねの、そのありますが、ドツコイセ、二石二斗二升二合と二勺、ソラヨホイヨホイヨーイヤセ、三合まいた籾種の、そのありますが、ドツコイセ、三石三斗三升三合と三勺。ソラヨホイヨホイヨーイヤセ。

○盆の十四日の蓮の葉のだんご、コラセー、一夜もまれてちよいと流された。ソラヨーホイヨーホイヨイコラセー。

○圓くなれ圓くなれ、ちよいと圓くなれ。コラセー、十五夜お月ほどちよいと圓くなれ。ソラヨーホイヨーホイヨイコラセー。

## 一谷

○ドツコイーショ、(オイ〳〵)いかにやなうこれ皆樣よ。(ドツコイ、)お揃ひなされた若い衆よー。(ソラヨーホイ〳〵ヨーイヤセー。)なんでやらうかかでやろか、(ドツコイ、)いーちのたーにで申さうか。(ソラヨーホイ〳〵ヨーイヤセー、)元暦元年春の頃、(ドツコイ、)春はこれ三月上旬で、(ソラヨーホイ〳〵ヨーイヤセー、)六日の夜半の戰に、(以下同前)源氏の大將と申するは、(以下同前)九郎判官源の、義經公の旗下で、武藏の國の住人で、熊谷次郎の直實と、平家方の御大將、無官の大夫と申するは、國は攝州須磨の浦、敦盛その日の扮裝は、金覆輪の鞍をしき、金唐皮の障泥下げ、鳩胸仕立の鎧下げ、仙臺仕立の轡あて、紺と淺黄の伊達手綱、駒の仕立が出來たなら、御身

の仕立をいたされる。髓にすねあて手にてごて、緋威鎧をやはとめし、鍬形兜をやはとめし、重籐作りの弓を持ち、背に矢筒を脊負はれて、名馬の駒に跨りて、須磨浦さしてぞいそがれる。其の日の敵と申するは、武藏國の住人の、熊谷次郎直實は、黑毛の駒に打跨き、鐵鎧で身をかため、其の日のわりと申するは、無官の大夫敦盛と、熊谷次郎直實と、互に駒を引き寄せて、お手者にお手者のことなれば、互に鎬を削りようて、暫く戰ひ致せども、何が平家が若武者で、駒の鐙を踏みはづし、熊谷次郎に組みしかれ、熊谷次郎の强勇に、鍬形兜をもぎとられ、六日の夜半の東雲に、御顏を拜し奉り、見れば無官の御大將、やーや昔の御主人と駒を木蔭に熊谷が、さーさーこれへ落ち給へ。今敵逃さうしたけれど、後にひかえし平山が、平山所か武者どころ、敵を組しき其敵を、逃すは熊谷二ごころ、大音聲をはりあげて、熊谷諸共打ち取れと、是非に及ばず敦盛が、熊谷そばへとせりよりて、さーさー熊谷打ち給へ。鬼のやうなる熊谷も、花の蕾の敦盛に、何と及があてられうに、是非に及ばず熊谷も、六日の夜半の東雲に、首やす〳〵と打ち取つて、首實驗にといそがるゝ。

## 子敦盛

○いかにやなうこれ皆樣よ。（ドッコイ、）わたしがこれからやろかいな。（ソラヨーホイ〳〵ヨイヤセ、）なんでやらうかかでやろか。（以下同前）子敦盛でやろかいなー。（以下同前）跡に殘りし玉織は、玉織姫と申するは、十二で緣組いたされて、十四で懷胎身とはなる。よの武士にきらはれて、みやこのかたへと送られる。さても都と申するは、都で一條は今出川、二條は堀川ほどすぎて、三條は室町四條積、ほどよく五條につかれては、お臺さまのことなれば、はしのらんかに腰かけて、暫く御身をやすまるゝ。橋の見物いたされて、そこで御臺の思ふには、昔は平家の御代なれど、今はげんじのみよとなり、平家の一家一門を芽だつ枝葉もからさんと、きびしき吟味の其の中を、かくれつしのんで來たなれど、生れてはれする身ではなし。いつそ冥途におもむこか。西に向ひて手を合し、南無阿



彌陀佛や彌陀佛と、口には稱名目になみだ、胸に六字をたゝみこみ、下の靑溝打ち眺め、早飛び込まんとしたれども、とよまてしばしわが心、わが身のはつるはそれやよけれど、おなかにやどりしこのやゝは、つま敦盛より預り子、せめてこの子がたんじやうすれや、もしもこの子が男なら、つまのかたきをうつであろ。思ひ直してお御臺は、早くそのばを立退いて、都の町へと身を忍び、旅立こしらへいたさるゝ。白きぎやはんに白手おひ、首に三衣の袋かけ、胸に四寸の札ばさみ、お手には金剛の杖をつき、白菅笠で身をやつし、旅立ごしらへ出來たなら、都の町を立退いて、西國三十三番の、先づ一番の打ち初め、紀州で名高き紀三井寺、二番は同じく粉川寺、以下西國三十三番の札所を、順次參拜し……。（以下文句詳ならざれば略す。）

## 目蓮

○釋迦の御弟子の目蓮が、恒沙の川へ修行に出て、見返し地藏に逢ひました。其時目蓮申すには、いかになうこれ地藏さん。私こそと申するは、母に別れて六年め、母の行方が分りません。どうぞ敎へて下さんせ。夫れ聞くよりも地藏さんは、汝の母と申するは、娑婆に生存へ居りたとき、搗屋商買してからに、賣桝拵へて人を騙して居つたから、夫れが罪になつてから、無間地獄へ落ち込んで、苦しみ受けて居るわいの。尋ねて行けよ目蓮よ。夫れ聞くよりも目蓮は、早く御寺へ歸られて、師匠に其譯話されて、無間地獄を尋ね行く。死出の山路を只獨、暗闇峠を通られて、三途の大河を渡られて、閻魔の廳庭行たなれば、閻魔大王が見るよりも、汝が來る場でないがいの。早く後へ立ち歸れ。夫れ聞くよりも目蓮が、私こそと申するは、南天竺に於いてから、釋迦の御弟子の目蓮ぢや。母の行方が分らいで、無間地獄へ行きまする。無間地獄の道行きを、敎へてください。大王さん。夫れ聞くよりも大王は、赤鬼靑鬼呼んでから、彼の御僧と申するは、無間地獄へ行くものぢや。早く導きしてやれよ。目蓮鬼に連れられて、無間地獄へ參られる。無間地獄に著くなれば、目蓮鬼に語るには、いかになうこれ鬼ども

よ。少し賴みがござんする。母に逢ひに來たからに、逢はしてください賴みます。夫れ聞くよりも赤鬼が、鐵の棒を振り上げて、釜の中へと差込んで、目蓮母を引き掛けて、早く側へと差出す。夫れ見るよりも目蓮は、夫れなる方が母さんか。聞くより母が語るには、其處へ來たのは目蓮か。よこそ尋ねて來てくれた。汝が爲めに此の母は、無間地獄へ落ちてから、苦しみ受けて居るわいの。汝出家の身ぢやからに、元の御寺へ歸られて、師匠にこの譯話して、恒沙の川に於てから、施餓鬼の經文賴むぞよ。目蓮其場を立ち退いて、元の御寺へ歸られて、師匠に其譯話されて、七月十日を中にして、千人御弟子を呼び寄せて、恒沙の川に於いてから、施餓鬼の經文讀みました。其經文の功力にて、一切地獄の罪人が、地獄の苦患を遁れて、早く天上へ生れ行く。目蓮それをよろこんで、丸盆叩いて踊られる。今に生靈さん祭るのは、地獄遁れた謂はれなり。

## 三つ拍子踊

○伊勢のお庭で扇子を拾うて、ほんと蹴り上げて手に取りて、開いて見れば若松の、千兩箱を重ね積み、かくれしつほー倉の鍵、三羽の鶴が舞ひ舞ふ。扇子目出度い末、チリガン、末繁昌。

○安藝の宮島廻れば七里、七里七浦七惠美須。宮島さんの境内が、日本一ではないかいな。一の鳥居が沖中で、一の御門に船がつく。船には艪がつく、廻廊の下へ潮が著く。千疊敷を廻るとき、鹿やお猿が、チリガン、袖につく。

## 坊盡

○桃すくあの西王母、ためしに鯛つる太公望、浮かんだ船に黑ん坊、金比羅さんには金光坊、あきばさんが村雲坊、殿の茶汲むさいおー坊、熊谷入道蓮生坊、八栗のお山に正天坊、支那の辨髪ちやん〳〵坊、宗高入道宗林坊、盆に堀出す若ほんぼ、道の端行くようたんぼ、若ても杖つくざつとう坊、一寸も聞こえぬかなつんぼ、さてもはづかしことながら、わしのからだが一寸坊、この坊目出度く取りおさへ、お庭目出度や末繁昌。



## 餅搗歌

○いやねれたく、うんとせの國からかゝよんで、もろつたおかゝが、へちやもくれ。

○となりに餅つく杵の音、ほしげがあつても、くれげがない。

○となりに餅つくきねの音、ほしげがないのに、くれげがある。

○ヨイササ〳〵ヨイヤササヨイササ、中見て底搗け。はたこすれ、ヨイヤサヽ、力をいれて。ヨイサササ。

## 舟歌

○峯に舞鶴谷に龜、千代が重ねて舞ひ遊ぶ。

○國も豐になりにけり、うれしめでたや、枝もさかえる葉もしげる。

○いつきて見てもかはらぬものは二葉の松にさゝのは、五葉はめでたやわかまつさまよ。

○七つなれなれ、なれなれなすび。おいつゝはよめに、おふたつは物だねに。

## 大漁歌

○先正月のはつゆめに、杯臺をゆめに見た。臺のまはりに松植ゑて、松の小枝にたかとめて、たかに小鳥をなやまして、お客御馳走でとりざかな。

○目出度き物とていものつる、親つる子つる孫子つる、孫のはしまで富貴繁昌。

○目出度きものとて鯛の魚、大鯛かけ鯛しめこ鯛、わたしやおまへさんにしんくしたい。

## 絲引歌

○絲のきれるのはかぼそのからぢやー、かぼそなほさな、またきれるー。アビーンビーン。

○さまが一つひきやーわしやはだなかよー、さまが寢る時やー泣いてひくー。アビーンビーン。

香川縣　餅搗歌　舟歌　大漁歌　絲引歌

# 愛媛縣

## 船乘初歌

船の乘り初めは、陰暦正月二日の早朝、船頭を初め、船子共船に乘り移りて、其年の廻航多きを祈る儀式なり。艫師(水先)と稱する者艫に立ち、船頭舳に在りて、祝賀の言葉を交換す。

○(表師)舳に申し〳〵、舳によう御坐いますか。(船頭)よう御坐います。(表師)今日は天氣日和相目もよし。皆流船達も拵へて卷く(出帆)さうに御坐ります。我れ〳〵も拵へて卷かうでは御座いませんか。(船頭)よう御坐いませう。(表師)由良の港を卷き出せば、取梶(左舷)に見えるが辨財天、面梶(右舷)に見えるが船越八幡宮、中の御前(社)を眞向うとして、舳の欄干に松植ゑて、松の嵐を帆に受けて、帆は法華經八の卷、水縄手縄は琴の絲、黃金のせみに挾まして、千里が灘も一渡り、向うに見えるは蓬萊



の山、蓬萊の山を少し取梶に見て、寶が島に乘りつけて、大判小判を積み込んで、舳に大黑おもてに蛭子、七福神を上乘として、早く上下を致さうでは御坐いませんか。(船頭)よう御坐いませう。さらば錨に掛ります。ヤンダエー、ヤンダエー、ヤンダエー。(水夫一同)ヤンダエー〳〵、〳〵。(表師)とーり梶。(船頭)面梶(船頭)もー梶(表師)今の梶ようそろふ(眞梶)(船頭)ようそろふ。(表師)乘つた。(釣を船へ取り入れたる言葉)トン〳〵〳〵(舳へ宜しと知らす合圖に叩く音)。

次に掲ぐるは、本村の船の他國の港に碇泊せる時、正月の禮を他國の船と往復して述ぶる言葉なり。禮に行く船は傳馬舟に船頭乘り込み、提灯を點して船の側に至る。禮を受くる船は同じく提灯を船の窓より差し出して、禮受をするなり。

○「物まう。「どーれ。「南海道は四國島、豫州松山松平隱岐守、虎福山は龜居の城下、御高は十五萬石、和氣郡興居島村、寺は石鐵山觀音寺、庄屋は石崎又左衞門、小富士山の麓由良は諸廻船、大港某の持船、船頭某水師共何人乘り、當年の御禮は端船から申し入れます。

○「夫れは早々と御禮忝う御坐います。船は狹くとも、先づ一寸お乘り下さいませ。物見の前には青疊敷きならべ、白木三寶に大判小判を積み重ね、ちやん〳〵茶鍋に茶を沸し、大福で祝ひませう。

(溫泉郡)

## 正月巡回

○西の宮の戎三郎は、御誕生なされた〳〵〳〵。なされた時はいつよととへば、正月三日、寅の一天、まだ卯の刻になるやならずで、御誕生なされた〳〵〳〵。なされた時は鯛のさしみで、數の子の肴で五六杯ひつかけた。引受けさしうけ、こんが重なれや目元ちら〳〵、足元ひよろ〳〵、むなもとたつくりしよ、だつくり〳〵だつくりしよ。釣竿かたいで、濱邊つだひは、よかろか。しやんたら〳〵〳〵〳〵、金のつりざを五色の絲で、大だひ小鯛つりそろへて、御舟にのつて、もとの御殿におかへりあらば、天下泰平五こくじやう成就〳〵、治まる御代こそめでたけれ。

○おくさん御しやめんなさいませ。初の宮のお多福女郎でございます。戎さんや大黑さんのおことづけ、春は早々福山から一分小判は降つてくる、奥さんは箒で持つてはきよせ、旦那樣はめつたむしやうにはかりこむ。これもふつきのさう、福には何もおかまひなさるな。隣の七兵衞樣處で、とうしみのしたしもの、石のこんこで輕石のにぎりめし、よばれてさんじました。麥よし米よし實もよしおほうー。

(宇摩郡)

## 萬歲歌

○ねーと、サーノサーノエー、ねんない夫婦はむつまじく、中よくくらすはふくのかみ、ヤレほうねんかいな。豐年ぢや。うしと、サーノサーノエー、うんづくものとはいふものゝー、かせぐに追ひつくびんぼなし。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。とらと、サーノサーノエー、となりのたからをまねかれて、わが家へたからを招かんせー、ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。うーと、サーノサーノエー、うつゝで浮世をくらすのは、十七八からはたちまで。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。たつと、サーノサーノエー、やれたつそら

たついまもたつ。國々までもかせぎたつ。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。みーと、サーノサーノエー、みなさんよりての夜ばなしは、にはかにこれから米さがる。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。うまと、サーノサーノエー、うんまい、うき世とかはるなら、五穀はこれからゆたかなる。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。ひつじと、サーノサーノエー、ひつじの何時や油斷なく、こゝろを豐にもたさんせー。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。さると、サーノサーノエー、さつても親への孝行は、むすこの子ならもたさんせー。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。とりと、サーノサーノエー、やれとるそれやとる、今もとる、伊勢宮河原でこりをとる。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。いぬと、サーノサーノエー、いぬくいところへ奉公も、つとめれや其身のためとなる。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。るーと、サーノサーノエー、いよ〳〵五こくは豐年ぢや。國々までもゆたかなる。ヤレ豐年かいな。豐年ぢや。

○さて目出たいな松山の、こほりとけなん山越の、じせい櫻もさきそめて、かをりも吉田のさし桃や、見渡す伊豫の小富士山、浪に浮ぶやかざ早の、腰折山や善應寺、扨太山寺のおん寺は、眞野の長者が建てたまふ。扨又伊臺のおん寺は、うすゞみ櫻これ名所。古跡といひし江戸山の、櫻とて今も猶枝葉榮えし松の色、佐々木の宮や保免名も、天滿の勅使橋、こゝに合出と殘されて、建立ありしおん寺は、玉の御殿の金蓮寺、光りを殘す燈籠の、松の榮えぞ目出度けれ。扨兵庫の賑ひは、花は櫻木人は武士、何野の城跡よしや。事の文字をのこせし義安寺の、右手の流れ川爰に、螢の名所あり。湯月の御社打ち過ぎて、所さき谷春は又、櫻の林今こゝに、紅葉の秋にことならず。彼のもろこしの菊の水、病を治する効能は、ほとりに立つておく玉の石。これぞ神代のしるしかや。誠に目出度うさふらひける。

（松山市）

## 柱揃へ

○一本の柱には、一天が世界いな治る御代のしるしにて、二本の柱にはにつこり笑ろたら、おゐべつさん若ゐべす、三本の柱にはさこんがうこんぢや、四本の柱には四をしがまほめぢや、五本の柱には五よーましましよ、六本の柱にはろびやうしそろへて、七本の柱には七福人とこい。八本の柱には八つむね造りせう、九本の柱には九よーが皿ぢや、十本の柱には十が福十ぢや。

（溫泉郡）

## 眞鍬歌

○おもーぢー、ひよせにー、まはれーやよー、おもぢーはせに、いそいでーまはれやーよー。

附言　この地方にてはあとよりつかふもの（追）、牛を右に向くるとき「ひよせ」と云ひてつなをひき、左に向けんとするときは「はせ」といつてつなをうつなり。これを「おるけ」とも云ふ。

このうたは五六匹の牛を一時に水田に入れて、まぐはをつかふときにうたはる。

（喜多郡）

## 田植歌

○おーさんばいーさまーあり。さらりーとさーさでーよー、さらりーとさーさで、おーろーしやれー。



○おさんばいのかみは、あらたなかみぢやよ。
○わかとの樣のこしかけのこー松。
○おさんばいさまはさゝでおろされ、さらりーとさゝでおろされ。
○いさん寺のをとめはどこいてもようしれるなう。白手ぬぐひのほうかむり。
○日の暮れ〳〵に駒をどこいつないだ。うねたに越えて、とな草につないだ。
○おさんばいの神は新（あらた）な神で、馬からおりて、笠をとろ〳〵や。
○朝つほに入るな〳〵と、夜中に殿御がさゝへた。（朝）
○日の暮れ〳〵に駒を何處へつなぐ。エーうね谷越えてとーなん（子）草につないだ。（夕）
○十七からつれた女房を、磯打つ浪に取られた。
○朝市に笠が立つろに、殿御の市で、かさかはう。
○かはいしやうぶよ、水を忍んで、柳は水のせき草。
○奥山の草かりばんこ。栗に花が咲いたかなう。咲いたもなう〳〵、奥にはとうから咲いたもなう。

（溫泉郡）

○若殿樣の腰かけの小松、枝も榮え大きうトなれ小松。
○苗持ち一の大役、晩には竹の子の味噌汁。
○苗たもれ、手苗たもれや。其間に腰をのさうな。
○三ばい酒によーたか。ひじり。一夜はなさけ、よはぬぞ、ひじり。
○娘起きよや、嫁女やおどろけ、御飯は棚に、箸は中棚に、お手水の、みづはお椽のさきに。（朝）
○ひるびるのやさいには、あぢやさばを、買はんか。にーたり、燒いたり、たべてみて、あぢがよか、かはうよな。（午前）
○さんばいざけに、ようたか。ひじり。一夜はなーさけ、よはんぜ、ひじり。（午後）
○ひのくれぐれに、こまをどこいつないだー。うねたね越谷（なぐさ）えて、こぐさはら（又とー）につないだ。（夕）
○親が親なり、世が世であれば、ひとのしたばはさせはせん。
○よしのこがきた、あのうねこえて、よしのこがさて四十四人。



○わたしのとゝさん、とんとこまちよ。ひのみやぐらのねずのばん。
○踊り踊りたがるは「ヨホゝイ」まちばのこども、かさのしめをもしめもせず。「ソラヨイトコヨイトコナンノキタエー。」
○おんどだすこが橋からこけた。「ヨホゝイ」橋のしたから泣きおんどー「ソラヨイトコヨイトコナンノキタエー。」
○若とのさんの腰かけの小松、枝もさかえ小松。
○しろ引くとは、しろに追はれて、とがない牛をたーたいた。
○起きよ嫁女よ、おどろけ娘。朝日はまどに、お手水の水はお椽のはなに。
○ひぐらせどりが、かさのふちまはる。とまりたうて、まふか、あがりたうてまふかー。（喜多郡）
○ちよ〳〵となくはひよこよ。なかぬはみやまのおほしどり。
○苗持はいつも大役、晩には筍の味噌汁。味噌汁はいつもたべます。

○ひのくれぐ〳〵に、だれが駒つないだ。駒が勇みて花がちる。
○わかずをとめご、つぼにかきこみ、あげさげみれば、おもーいちやならぬ。
○うゑまねれ、つぼにいるなと、よひから殿御の敎へ。
○今朝汲んだ御茶と水には黃金のたまがうきをる。
○ひぐらせの鳥はかさのふちをまはれ。あがりとて舞ふか、さがりとて舞ふか。
○あのとのゝうしろすがたは、ぼたんの花よ。枝がふた枝、ひとえだは咲いてしをれて、まだひとえだはさきはけ。
○五月にはくみのよりやひ、さんかたびらは花ぞめ、花ぞめはぬれていろよい、おかたはてなれてたじよい。
○ふとれやく〳〵、枝もさかえ小松、わか殿さまに腰掛けの松。
○ひのくれぐ〳〵にどこい駒つないだ。うね越え谷こえ、となくさにつないだ。
○はたかれというたら、二町も三町もはたかれ。
○すごもれというたら、なたねほどにすほもれ。



○さんばいはあらたがみぞな、駒からおりて笠とれ。
○さんばいはさまのよのぞな、さらりとさけておろせよ。
○しろひきはしろに追はれて、かきなる蹴をかついだ。（上浮穴郡）
○山田のいねは畦によれかゝるよー、十七八は、殿によれかゝるよー。

右は凡そ四十年以來流行し、一枚の田をうゑ終るまで、同一の歌を繰り返し歌ひ、主として山田の田植に歌ふ。

○苗代のーしろーへー鏡をとんとおとし、それとろ〳〵ーとしよほぬれーたー。

右は苗代の田うゑに歌ふ。

○奥山のなぎの葉は、昨日がりか今日がりか。昨日刈りや柴まいて、今日刈り面白や。

右は普通午後四時頃までに歌ふ。（南宇和郡）

○朝聲に聲をならさう。ならさぬ聲はね聲なり。よいね聲ね聲だうり、ねてよぶ聲はね聲なり。聲なくは誰ゆかさ

う。こがねにまさりのわが聲。
○ねてもねさどい寢顏のよい子、誰の娘ぞ名をなのれ。
○名のれやはづかし、名のりやなならず、朝日長者の昔のひめ。
○よい處、すゞみどころ、これへ御堂たてうぞ。御堂〳〵よいみだう、木からからか、番匠からか。きる木は春日のもみの木。
○よい處、すゞみ處、これへ御堂たてうぞ、きりけづり、木口そろへ、何なる丈夫にたてさそう、飛驒がたくみのたけ田の番匠、番匠からかや、木からかや、きれども〳〵もみの木よ。
○日はなんどき。八つのさがり。わがゆく先ははるゞ〳〵と、ちら〳〵と、はーれやせき山を、ほそのでやどとらう。宿とりて、小歌うたはう。
○朝からうたうたりや、とやの鷄。夜深なとのゐとのゐのおこは。
○まだけさは、霧の最中、そろ〳〵飛べや、石橋を。石橋は今朝の烟。



○上馬同士が來たけな。馬同士は、どれも馬よ。どの馬同士の事やら、いけば左よ、戻れば右よ。
○朝日の木の二十一、廿一はみめがよい、こうばい手綱落したか、又忘れたか。忘れもせぬ、落しもせぬ。晩にもこうとて置いたり。
○朝起きて艣をふりかたき、戸島の沖に鯖釣らう。釣る鯖は目につかば磯つるお方、目につく。目につかばうけて見よ。
○廿一が來たけな、朝日かまへの廿一が。どの廿一のことやら。
○日も廻る、露も落ちる我とのは小草山へ。小草で刈りでがなからう。かまきれよ。よれや小草、平袖で露をはらふ、だんびら笠で日をせく。
○かみ方のむこが、くだる。むこばかり、かささすか、船子は、かさは、さゝぬが。
○我むこは、しるしがござる。肌に、花染の肌つけ、かいらけさしたは我むこよ。
○十七が麥をつく。搗く麥が六斗六升、合せる水が五斗五升、白をしとめ、やぐらをしとめ、つかば麥もはけうぞ。
○今朝市に笠屋が出つらう。笠きずに、田へは立たれぬ。とのごを質に笠買ふ。すけ笠は十八文、おんとの笠は百二十、しろがね絲で縫うたる笠は、しめ緒はしんくしら絲合うたかよ、おんとの笠よ。
○かもはしは、城のふもと、弟子孃は物に上手、けさ卷き上のほそ布は、けん八布で織れぬ。梭もぢれへもぢれ。梭子より前で、へのしをかく、梭子竹に、へもちそへて、とのごに一つうたれしや。うつとのごにはうらみはない。うらみはちゝご母さまに。よんべ、くらさに、むかへられ、今朝のあかりに送られ、おいさがし人めのわるさ。
○あれからこれまで續いたる、西行殿の御座船は、沖に居る、大黑殿を落したか。大黑殿は落しもせぬと乘たる。
○ひる市に立つはつほよ。夜市にたつは、さいばらよ。さいばらは、とのゝまね、さしたり、さしたり刀、親重代の守り刀、きかたな(木刀)も刀の内か。つかなどはあられこづか、つばなどは、ぎんのいつば、さやなどは鮫鞘、さけ緒はうんこの白絲、天竺の花なへじりの花よかれ、くれなるよかれ、さけ緒を染めて、さけさそう。なんかくだされ、結びあけよう。田どろで色がもどらうか。
○これよい處、すゞみ處、これこゝで御堂建てよで木はまた、春日のもみの木なれど神の木、きりけづり、木口そろへて、大工のからか番匠のからか番匠などは、すさき番匠、墨さしは、しやくなんそー、墨つほは柳のもく、つほ絲は下りのまいと、さては見事や御堂なり。
○そこ飛ぶ鳥、伊勢の鳥か、熊野の鳥か。世は彌勒世の中は七年よかれ。京かみ方は、よぜんと見えまする。木には錢なる笹に實なる。こそ竹とは今年子竹、これこきばしと定めたり。葉ごしの稻をさらゝと一本に六斗六升、一把二千石八俵。其米を酒に作り、それ節酒と定めたり。壷そこのよい酒を一もる長者もらいで。
○娘をたもれや、我ひめにいま。まだひめは、ほそない、やりはせうが、三年まちたらやりはせう。先づさん日、日柄を見て今日は日わるし、さゝなんく日。
○をの道の伯母御の方や、ほそぬの帷子へて來た。其の布をおろせや、さらせ、播磨の丞。よさの紺屋どの。これ

染めた。染めてたもれ。染めを何と好むぞ。かたすそは金のひかり、腰には、しよもん、しよもんのから杉から松、一の小枝性ある鳥が砂かける。

○その鳥がたとや立とや、しらげのよねもの、其米を酒に作り、御飲酒ときくをちらせ、妹むこに飲ませで。

○もり山は、けんそな山、三ころころと、三ころびころび、練木で芋が盛られうか。ころんで芋がもれぬ。たんこが島までころんだ。杓子をさよ手に、さゝよ手に。

○鎌倉のちやをとる、みめよい、小女郎が茶をひく。挽く茶より廻れや臼をひく目につく。目につかばうけて見よ。五貫七とられたか。しちならば七とはなく質札のうはがき。

○大寺の門のかけがね、かけてもからのかけがね。かけてのものゝち、わかとの不淨の狐にとられたか。高野の聖が川へながれ、先づ一番に笈が流れ、二番にかねとしもくとたん平笠で浮き〳〵と、さぞや弟子こもこがれた。

○日暮れてはつほね淋し。つぼねにはよめのかざり、花さいて實なれ、さんしよう。

○ようこそ心を置かれて、寢やには太刀と刀と、太刀をば鞘へ納めたり。

○かいだるしろを、殘さすな。千秋樂と命をのべ、萬歳樂と謠ひをさめ。

○日も廻る、露も落ちる。振袖で露拂ひ、たん平笠で月をせかう。

○晝市に、立つがつぼ、夜市に立つがさい原よ、さい原よ。

○殿の眞似せう。さしたる〳〵刀をさしたさむらひの婿ほしい。表に塀を塗りすゑてこゝ善い處、涼み處。

○ヤレコノ、コノ田の、やーしーろーはーめーでーたいーやしろー。

○我殿子は十七よ。十七が麥をつく。つく麥は四斗八升。

○これこんやさん。これこように、そめてたもや。

○稻こき場所と定めたよ。こく稻は一把二把、千石八俵。

○かいたるしろを殘すなよ。千秋樂には命をのべ、萬歳樂には歌ひ納め。

○あすはーおしよやのねーやさおほ田が、（ハーヨイ〳〵）はだつし手苗もらうや、若のしゆに。

○モーホーエ、やあーれそーれや、そーればよー。



○モーホーエ、やあーれ、そーれや、東のすまが、高いぞよー。

○こなたの社内めでたい社、巽に米倉、衣裳倉、乾に金藏寶庫、鶴と龜とが舞をまふ。

○土佐のかづら橋こもの江の如く、風が吹けや又ゆら〳〵と。

○せくな、せかるな、浮世の事は。命ながくばめぐりあふ。

○歌うたれや、ごぜの鳥、呼ぶ子にとのごをたゝしたぞ。あけばや鳥もうたふぞよ。

（北宇和郡）

## 雨乞踊歌

○なにをさ、ねがふぞ、ヤーヨーホ、ヤーエー、「ハヨイ〳〵ホーエアラヨイトヤーホ、イヨイヨイ、「なにをさ、ねがふぞ、エーホ、にのかさをヨーさげて。「ハヨホ、イヤヨーホ、ヤレヨーホー、「なにも、ハリヤヨイトコヨイ〳〵、願はぬーヨー、「ヨーホ、ヨーエー、「あめねーがふぞエー、「ヤレホ、ソラヨーなにもヨー、「ヨイ〳〵ヨイーねがはぬあめねがふー。ヨーイエ、「ハヨイヨイヨイホ、ヤーエー。

○あめがよふろどて、ヤーヨーホ、ヤーエー、「ハヨイヨイホーエアラヨイトヤーホ、イヨイ〳〵、「あめがふろどて、エーホ、にしからよー、くもる、「ハヨホ、イヤヨーホ、ヤレヨーホー、「むすめハリヤ、ヨイトコヨイ〳〵、さろどてーよー、「ヨーホ、ヨーエー、「むこがーこんえー、「ヤレホ、ソラヨー、「むすめよー、「ヨイ〳〵ヨイー、さろどてむこがこんー。ヨーイエ。「ハヨイヨイヨイホ、ヤーエー。

○いづしよやまほど、ヤーヨーホ、ヤーエー、「ハヨイヨイホーエアラヨイ〳〵トヤーホ、イヨイヨイ、「いづしやまほど、エーホ、、たかいやまよーないが、「ハヨホ、イヤヨーホ、ヤレヨーホー、「きりが、ハリヤヨイトコヨイヨイ、まきますーよー、「ヨーホ、ヨーエー、「しほーぎりが、エー、「ヤレホ、ソラヨー、「きりが、ヨーヨイ〳〵ヨイー、「まきますしほぎりがー。ヨーイエ、「ハヨイ〳〵ヨイホ、ヤーエー。

○まきそで、まーきそーで、きーりがよー、たーかいやー

ま、にしをぎりがよ。

○谷の水はよ、出るこた出たがよ、岩にせかれて落ちやはぬ。

○まつやまを越後と思た。植ゑておいたよ五葉の松。

○袖をふらねば雨がない。ふらねばぞ、ヤヨーホイヨイ〳〵、ふらねばー、ろくしやくー（六尺）そでをよー、やれ袖をふらねば、アー雨がよなーい。ヤレコレハサー。

○黒いのは、黒いのは、西のよ、西の黒いのは、雨ぢやもの。ヤレ、コレハサ。

○安藝の宮島、ヨホホー、千疊敷、おひろ間に一人よ。思ひまはせば伽がほし。（喜多郡）

## 五つ拍子

○小田の金平樣は、ヨレ、天狗のさまよ。どこもなれよた。ヨイトコ、ヤレコレハサ。

右の歌は小田の金平、天狗の蟬に化けて、蜘蛛の巣にかゝりたるを助けたるに、其禮として、天狗は日時を期し、雨をふらせたるに起ると云ふ。（喜多郡）

## 盆踊歌

○なかのやーまーよー、ひとりよぞーこーせばー、おーやーにやーぜひないー、つーまーこーひーしー。ハーリヤ・リヤーノーエー。

○東の山から月が出た。月かと思うて、出てみれば、月ではなうて牛若丸の間の駒。……牛若樣の刀は、何よとこしらへた。二尺七寸浪のへら、三尺さげ緒にとりかとほしてうはのやざしとさゝれた。牛若樣の御門のかがりを眺むれば、柱は六十六所ぬりかくし、そめかへし、たるきばなへは黄金をうちて、屋根は檜はだのーせぶき。牛若丸の馬やのかゝりを見てやれば、七間馬やに七疋つないで飼ひある、七里の番所に金をまく。

○さぬきしらかたお屏風のうらに、さてもきめうなおぢぞがすわる。ヨーイ〳〵ヨーイトセ。（宇摩郡）

○サーヨーエーヨーサー、私もやーりませうか、作がやけるで、雨乞をー氏神樣に願ひ、雨を、サーエーサー、貰はにやエー作がやけます。雨を下され、氏神樣よ。（伊豫郡）

○いもは琉球こゝらでそだち、神や佛のひきやはせなれば、人は日本へおわたりなさる。二月三月ぬくみのころに、さらり〳〵とみぞかきうゑて、さゑんじりへとふせつけられて、みふしよふしにきりたくられて、雨のなこどで、嫁入りさせて、ころは八月社日の頃に、金のみつごではやほりださる。せなにおはれてわがやへかへり、水をとりよせ行水させて、五升だきにつめこめられて、ぐつり〳〵といでころされて、のどのぢごくへおとされました。

○盆が來たとて麥に米まぜて、ヨイ〳〵、あひにあづきをちら〳〵と。ヤートセーヤートセー。きよねん盆まで踊りもしたが、ヨイ〳〵、ことしそはきで、ヤレ水もらふ。ヤートセーヤートセー。（西宇和郡）

○浮世〳〵と皆おつしやれど、しやばの有樣無常の事は、よその身の上他人とばかり、思ひ來る日はおろかないたり、昨日今日まで花嫁むこと、人に見られし、柳の腰も、遂にかゞたるおしろの腰よ、かつてしたいに浪いたゞけば、さしもつやある綠の黑髮も、いつの間にやら霜降りかゝり、おいのしらがとなりはてまする。姿かたちはおとらうけれど、いつも十五や十六七の、若い心はうせさりもせず、秋の長き夜また春の日も、あるやないやに飲みふけかゝる、ほんに佛の御恩の程も。（以下略す）

○櫻木そのした、こすゑでさむ空に、そらにしらねの雪が降る。ヤーさくら踊りを、踊らうよ。

○これのおせどにいでみれば、鶴と龜とが晝寢して、せみを枕によねがふる。せみをまくらによねがふる。

○これのお庭に井戸ほりて、アイヤ水もでもせぬみつみする。白銀のあけぶしやくての、アイヤ、くめば黄金のゑにしゆまず、アイヤくめば黄金のゑにしゆまず。

○蜘蛛のえにあれをるこまをつなぐとも、ハンヤ、ふたみちかけるとのはいや。

○墨すりて、ながるゝ水に繪をかくとも、ハンヤ、ふたみちかけるとのはいや。

○なにとしてしほ干にたてたるほそのとを、ハンヤ、あけ

よとたゝくは、沖の白波、ハンヤ、あけよとたゝくはおきの白なみ。ハンヤ、ソレヤヨイヤヤツサイ。

○はやとして、すそをにゑらせいでるつき、ハンヤ、いつまたいでとはいまのはやりと、ハンヤ、ソレヤヨイヤヤツサイ、もちつきてすそをにゑらせゑにかいた、いままたわがてにかけてとるべし。ハンヤ、いままたわがてにかけてとるべし。ハンヤ、ソラヤヨイヤヤツサイ。ハンヤ、東山小指かきわけいづる月、ハンヤ、いつまでとはいまのはやり、ハンヤ、ソレヤヨイヤヤツサイ、我戀の枕の下のみだれ髪、人こそ知らねかわくまもなし。

○我戀の潮干に見ゆる沖の磯、人こそ知らぬかわくまもなし。

○我戀の細谷川の丸木橋、ふみかへされて落葉もろともに。

○我戀の深山の奥のほとゝぎす、人こそしらぬなかぬ日もない。

○我戀の枯木の枝のたまり水、つき星ながめ知る人もなし。

○そり橋の上に登りて下見れば、つなぎ並べて四國船かや。

四國なら贈ひやうしを揃へてだす時は、綾や錦を矢帆にかけて、矢帆にあげたる綾錦、我にくれたら國の土産に。

○すみせんの大和麓でかくせども、日には見たれどはなにかゞせん。

○たぬーきのー、ヨーエへへ、かーはをーヨーエへへ、ヤレきやふにせうーと、ヨーヤレオーおしやる。ナーイヤ、毛にけーがーもぢれーてーノエ、ヨーホイ、ヨーホエヨイ、しやんと、ヨーあゆまれな。ノーイヨエ。

○養の川原の石遊び、一つや二つや三つや四つ、十にも足らぬをさな子が眞砂をよせて墓をくむ。

○國のはじまりや、やまとの國よ、やまと山城山崎三左、親の貧するそのぜひなさに、四百兩にて米屋へ賣られ、米屋ごりやうへ賣られしからは、三左商賣何ぞと問へば、三左商賣馬ひきとなる。馬に鞍置きいさみをかざり、雨の降る夜もさて風の夜も、馬の手綱で月日を送る。

○伊勢衆のくせにや、のぼると、おつしやる。のぼらばのぼれ、たらの木に、しやんとのぼれ。

○まづ正月のせつのゆめ、伊勢のごむーよを、夢に見た、此子をまうけた夢を見た。四萬四方にくらをたて、錢と米とをつむとみ、此子にゆづりた夢を見た。ゆめにおとりは。

○あーだけの、枝ないたけにのぼれとは、ハンヤインヤヨホノ、ハンヤニタシチ、かけるとは、エーヘンヤ、ハンヤインヤヨホノハンエ、ハンヤ、すみすりてながれる水に繪をかけと。ハンヤインヤ、ヨホノ。

○けふは日がらもよき程に、ゑびすいさめてまゐらそや。やがてゑびすのいさみある、「アンヤ」勇みある、「オホセヨ」萬にみちたる漁あるぞ。さぞやたけきるさゝがある、うをおほそおでて、すだけきる、「アンヤ」すたけきる。「オホセヨ」そのうちをせんか萬かに賣りあげて、いまでも此浦さへある。

（北宇和郡）

## 一の谷

○西が三十三が國、東三十三が國、合して六十六か國、西なる大將は無官の大夫敦盛卿、東の國での旗頭、九郎判官義經卿、西と東の合戰に、敦盛卿はうちとられ。敦盛さまの御臺は、十二で嫁入なされつらう。十四で懐胎身となりて、知らずが里へおくられて、一條通りや二條通りや、三條通りや四條通りや、五條ある橋の眞中で、橋欄干に腰をかけ、はるか向うを眺むれど、なにこそ目につく島もない。向うに見えるが辨財天、平家を守る神なれば、なぜに平家を守らんぞ。そこで自害と思へども、やれまてしばし我が心、お腹にやどりしみどり子は、あかりにむきくる御子ぢやに、くらき暗夜に迷はして、心をしづめて宿をとる。宿で御産の紐をとき、すぐに安產つかまつる。稚を抱上げ見たまへば、玉を見るよな男の子。父敦盛が世に居らば、うれし籠よのおよろこび、うれし籠よはまだおろか、表玄關かざるのは、具足かぶとを飾りたて、具足かぶとはまだおろか、門に駒をばひき並べ、そこで御亭主語るには、そのこを御捨てなされませ。そのこをすてぬと今宵から、一夜の宿もござらんと、いへば姫君かたるには、すてといはゞ捨やんしよ。加茂が明神ばゞがさき、さがり松なるそのしたに、すてゝおきますばかりなり。昨夜うまれたこの稚子に、いひつけするはむりなれど、稚よ能くきけこれやわかよ。もしや

其方の運が吉うて、大名方にと拾はれば、江戸の邸が大切ぞよ。もしやそなたが運が凶て、百姓どもにひろはれば、境をせゝるなせゝられな。

（越智郡）

## 敦盛

○花にせいちやう、月満々と、おぐり平家の、はなとりもけば、しをればなかな、平家の花は、強い源氏の嵐にもまれ、あとにあはれや敦盛さまは、こがね青葉の笛とり忘れ、かゝる處は、武藏の國の、次郎や直實、一寸かけ來り、手ものと〳〵で、早や立ち合うて、どちがどうやら、勝負がつかぬ。兩方互に太刀なげすてる。なける早いか、はや組み合うて、運の盡きかな、敦盛樣は、次郎や直實にはや組み敷かれ、かぶとひきもぎ、その顏みれば、見ればみるほど我子の小次郎、こなを現せ、こりや若君よ。我こそ參議基盛の末子無官の太夫敦盛よ。

（南宇和郡）

## 八島合戰

○此間布令出す下野の國、九郎判官義經公の、一の手下に與市と云うて、身軀は小軀で御座候へど、積る御年十九の時に、弓に名人それとも聞ゆ。流石弓にも名人なれば與市々々と御殿へ呼ばれ、與市暫らく御殿へ上る。表玄關に兩手をついて、御用如何と伺ひけれは、與市呼んだは餘の義でないが、四國讃岐の八島の沖で、武藏坊なる辨慶などが、伊勢の勢力勵しむけれど、これを一矢によう射取らんと、彼れを一矢に射取りだなれば、弓の天下を許してやらん。そこで與市も頭を下げて、はいと答へて御殿を下がる。與市其の日の入り裝束は、赤い緋威鎧を着し、赤いちやきんにしたゝるべしは、弓は重籐切斑の矢なり。五人張りにて矢十五本、小野の駒にとゆらりと乘りて、讃岐八島へ心を急ぐ。最早程なく八島の沖よ。小松原にて波打ち見れば、風は烈しく波高ければ、扇的をも矢に定まらず。そこで與市も心願込める。八幡八幡那須明神に、波を沈めて下されかしと、神の勢力波靜まれば、そこで與市も矢に定まりて、要ところを萬里と落す。沖の平家がひびらではやす、陸で源氏がふなばたたゝく。やんよ〳〵とはやしをあげる。

（北宇和郡）



## 蝦屋甚九

○國は長崎えびやのじんく、親の代から小間物賣りよ。今は小間物うりやをやめて、大阪通ひのいとまごたてよ。船はこくたんうたのり新造、綾やにしきを下荷に積んでこひの卷もの上荷にはねて、さーさやりませう下の關灘を、白帆まきあげせひぐちしめて、はりま灘をばめいしよで走る。こゝはどこぢやと港を問へば、大阪港と皆々云うた。けふもいれたや大阪の川へ、いかりばやにといかりをはねて、傳馬おろしてともづなといて、をかへあがりて問屋をさだめ、問屋をさだめば荷物をあげる。みせをかざれば荷物もかざる。今日は吉日日もよいけれど、こゝできりましよはちくの竹を、本は尺八中横笛、うらはにしきのおんかけざわ。

（北宇和郡）

## 亥子歌

○亥の子〳〵、こいさ（今宵）のゐの子、亥の子餅ついて祝はんものは、鬼か蛇か、つのゝはえた子生め。



○おゐの子樣と曰ふ人は、一に俵をふまへて、二ににつこり笑うて、三に酒造つて、四つ世の中よいやうに、五ついつもの如くなり。六つ無病息災に、七つ何事ないやうに、八つ屋敷をつきひろめ、九つ米倉たてならべ、十でとんとをさまつた。

○銀の銚子に銀盃で、飲めや大黑おさへや惠美須、中で酌取る福の神。今年や豐年穗がさし丸、道の小草に金がなる。

（伊豫郡）

○祝ひませう今晩の、おゐのこは、一にたーらふんまいて、二でにつこりわーて、三でささよ造つて、四つよの中よいやうと、五ついつもの如くなり。六つむりやう息災に、七つなりごとないやうに、八つ屋敷をひろめたて、九つ小藏たてならべ、十でこーさ、をさまつた。エン〳〵エ。

○めでたいな〳〵、めでたいものがぶちほなら、福の神があつまつて、こゝを長者といひまぜう。それが、よかろとみないうて、きんぐいようしを、かたぎこみ、西の倉は米ぐら、ひがしのくらも米ぐら、なかのくらはかねぐ

ら、こゝを長者といひませうや。エン〳〵エ。

○こんばんの亥の子は、祝はん者は鬼もけ、蛇もけ、つのもはえた子もけ。（西宇和郡）

○一つ拾ろたる桃太郎、二つ二つとなき國、三はみんなとうまれきて、四つよつぼどちからもち、五つ犬、猿、雉子をつれ、六つ昔の鬼が島、七つなんなく、鬼どもを、八つやたらに、切りすてゝ、九つこれをたひらけて、十でとつたる、寶物、いち〳〵この屋へをさめおく。

○御山陰（大江山陰）生野がさとよ、酒呑童子のなき物語り、吾も昔は色はる（色有）さとよ。しよくにもたれて心を盡す。一字教へれや千字もさとる、二字と教へれや萬字もさとる。そこで和尚の御耳に入りて、あまり者ぢやと其寺出され、陰をかくして深山が里よ。岩のからといこもらせたまひ、まえよ〳〵と人取りなさる。（毎夜）そこでらえこー（輕光）むほんを企み、毒の酒ぢやと早作り込み、鬼に飲ませば千人力よ。敵に飲ませば萬人力よ。そこで五人が心を合せ、一に金時二に渡邊よ、三に貞光四に季武よ。五ではらえこー（光）御山伏（やまぶし）よ。くびにけさかけ手にほらもちて、鬼は内（設）にかなう御免なれ。（設）

○こゝは御城下のおらわら在所、まちとさきよれや、小松原ござる。小松小枝に小鳥が一羽、あいつさしてやれと竿さしなほし、竿は短し、小鳥は高し。かしやのかゝへたれよ。八萬千里たれぬいて、江戸でくさかつて、信濃でひきついた。

○一つ拾た豆に、あとにあつたることなし。二つふんだる豆に土のつかんことなし。三つ味噌豆に臼杵のあたらん事なし。四つよつたる豆にばずのあつたる事なし。五ついつたる豆におひにきれん事なし。六つむきたる豆に皮のあつたる事なし。七つなつたる豆にさやのつかん事なし。八つやきたる豆に土灰のつかん事なし。九つ買うたる豆に柳のすまにあたらん事なし。十で飛んだる豆にそこら近所にあつたる事なし。（北宇和郡）

## 地搗歌

○めでたいことが鶴と龜ぢや（合唱）「ヤンサモヤンサ」、上で鶴が舞をまうて、（合唱）「ヤンサモヤンサ、」下では龜が水あそびぢや、もーとゐのつんなもせー。（合唱）「サーエンヤハレハイサーノーシテコイ。」

○やんさ〳〵のお聲がそろたなら、もとゐのつなもせ、（合唱）「ソラエンヤ、エンヤトサンサノエ。」

○私がこれから音頭を取ります、皆さん宜しう賴みませう。（合唱）「ヤーンサーモヤーンサー、ハリハイサモシテコイ。」

○東の山からお日さんが出たぞへ。お日さんが入るまで搗きませう。（合唱同上、以下皆同）輕いよ〳〵、これは輕いよ。どうしてこんなにかるいのか。（合唱）輕いよ〳〵、これは輕いよ。反古籠ではあるまいか。（合唱）輕いよ〳〵、片手でお搗きよ。烏や雀が笑ふぞえ。（合唱）

○私が好きのは入れるのぢや。（合唱）何をこれから入れませうか。（合唱）冬は炬燵に火を入れ、（合唱）酒屋はこつそり水を入れ、（合唱）旨い餅には餡をいれ、（合唱）はげたお椀に味噌を入れ、（合唱）千兩箱は倉に入れ、（合唱）握飯には鹽を入れ、（合唱）お猫のごきには骨を入れ。（合唱）

○丸い玉子も切りよで角ぞ。（合唱）「ヤンサモヤンサ、」ものもいひ樣で角も立つ。（合唱同上、以下同）道中くも助はさくらの蕾ぞ。（合唱）今日もさけ明日も酒、（合唱）おしめさんとめ著た心。（合唱）うちの姉さんはたを織る。となりのおばさんひーを借せ。西のおばさんをさをかせ。前の兄さんにはたかつた。（合唱）つく〳〵、なにがつく。二合半飯が底につく。（合唱）つく〳〵、何がつく。お寺のぼんさん鐘をつく。（合唱）（松山市）

○先づ今日の御祝ひに、床に祭りし掛物を、三寶にする御酒を上げ、盃の臺のへりに松を植ゑて、一の枝にと金がなる。又とそなへし二の枝に、あやにしきや米がなる。三とそなへる枝に、鶴と龜とが舞ふ。芽出度い事ではないかいな。

○天智天皇秋の田の、刈り干す稻のばんをすれば、ぬれん内こそ露厭へ。ぬれて其後厭やせん。目出度い事をやらうかや。鶴と思うたら、龜か出て來て舞を舞ふ。

○今年豐年どし穗に穗が咲いて、道の小草に米がなる。道

の小草に米がなるならば、山の木にも金がなる。

○ねざゝに露と書いてある。ねざゝに露の讀み替へは、さはれば落ちよと書いてある。板間にあられと書いてある。板間にあられの讀み替へは、ころげれや音と讀み替へる。之れもそろひの龜の子音頭。（溫泉郡）

○ヨーイーヨイトコ、ヨーイヤナー、おやどーもとは屋根の一棟では鶴が一緣起の舞をまふー、お庭でーおかーめがーまひをまふー、まひをさめるぞやなー福の神ぞや。ヨイトコセー。

○ヨーひさせば光かゞやく、朝日させばごてんかゞやく、長者のやしき、東にえびすの金の倉、西に大黑米の倉、南にびしやもん酒の倉、北にしよー〳〵さかな倉、まひをさめるぞの、福の神。（上浮穴郡）

○こゝのヨー、御家はヨー、目出度い御家、サンヨ〳〵〳〵〳〵、こがねきりまど、ヤンレ、ぜにすだれ。ヤートコセーノヨーイヤナ、ハレワイナ、コレワイナ、サヽナンデモセー。

○こゝらの御庭をヨー、ほめうなら、サンヨ〳〵〳〵〳〵、ぐるりが高うて、ヤンレ、なかくほで、金銀こがねがまひこむで。ヤートコセーノヨーイヤナ、ハレワイナ、コレワイナ、サヽナンデモセー、ハリヤヨーイヨーイヨイトセー。

○目出度いものは何ぢやいな。ソーレー、目出度いものは破れ蚊や。ソーヨー、つるかと思へば蚊めがはひこむ。エーエラエー、ソリヤエー、ヤラエーヤラエーヤラエー、ハリヤヨーイヨーイトセー。

○こゝの屋敷はよいやしき、兩方が高うて中くほで、ソーレ、後が大きな金山で、ソーレ、一分小判が流れ込む。エーヤラエー、ソリヤエーヤラエーヤラエー、ハリヤヨーイヨイヨーイトセー。

○こゝの御客をほめうなら、ソーレ、大黑柱が銀柱、ソーレ、小黑柱が金柱、ソーレ、うわぐのさし口赤銅で、ソーレ、金銀赤銅のはりわけぢや。エーヤラエー。

○トコヨーホイヨーホイ、ヨイヤナー、うれしー、ヨーホイ・めでたーの、ヨーホイ、さまは枝が榮えれや、エーヤーソー、葉も茂る。エーヤーエー、エーヤラ〳〵〳〵エーエーノサンサノエーサンヨイ〳〵〳〵。（西宇和郡）

○目出度いこのたの、御ふしんに、地形地固め地搗あり。巽のあがり乾のさがり、四面のお屋敷に地搗について、えのきのゆらいを申し奉る。いぬゐの隅の福榎、本白かねに、なか黃金、一の枝には金がなる、二ばんの枝には米がなる。その木の梢に何が住む。孔雀のとりが稻穗をくはへてきり〳〵〳〵と舞ひくだりまする。エンヤンサモヤンサー。（伊豫郡）

○とろりよー、ホーエ、とろりやー、ヤート、エヨイ〳〵、車ねのよいくろま、アヽヨイナ〳〵、どこの大工が、コレヤ、さしたやら。ヨーイセ〳〵ヨイヤナ、ハレワイナ、コレワイナ、サヽナンデモセ。（南宇和郡）

## 大漁歌

愛媛縣　大漁歌　機織歌

○じよーさじよーさーはーどこでもはーやーるー。いよの一今治やー二度はーやーるー。（はやし）オーサヤツタガ、トヾイタカ。トヾイタ、トヾイタ、モロテタイテクテ、ウマカツタナ。（はやし）ゲンカイマジニシ、マンマトモ、ホアシソロヘテヤルトキニヤ、ウチノニヨウボコモオモヤセヌ。ヤーレソンナモンヂヤ〳〵。（越智郡）

○やんらーめでたいなー、ごよーはー、（合唱）「ウォーイー、」めでたのーの、エーソレ、わーかよー、（合唱）「枝えだ、エーサーヨー、」のーエーコーノー、（合唱）「葉はーもエー。」やんらめでたいなー、住吉の破風に雀すゞめがー巢をくみてーさぞや雀は住みよからう。うれーしーめでたのー、エーソレ、わかーよー、（合唱）「えだー。エーサーヨーノーエーコーノー。」（南宇和郡）

## 機織歌

○桃の花散り、櫻も散つて、夏の來るのはもう間もないよ。織らねばならん旦那の單衣。キツコバツタリコ〳〵。

○物を思うてはたおりをれば、ほつと一ほけ鼻に入る。おつと、ひをり障子を明けれや、二合半飯が底につく。

○はたを織る〳〵道の人みれば、お手はお留守で縞おりちがへ、となりのおばさんそこに立つて見より、わしの顔みてへら〳〵笑ふ。笑ふおばさんあなうとましや、道のあの人は早影見えん。

（松山市）

## 伊勢音頭

### 第一段

○をーどーろ、をーどらう、いざーをーどーらう。おーいーせーえーだーのー、かーみーいくあー、もーくーり、こーくーりをーたーいーらけてー、かーみよーきーみよとーくーにーぐにをー、ちーさーとのすゑーまーでー、ゆーたかなりー。「ソーラ、」まーゑーり、けーかうーの、めでたさやー。「アヽヒンヨー」おーいーせをーどりよー、おーいせーをーどりーをーどりてなぐさみ見れーばー、「ヤーアー、」くーにも、ゆたかにー、「ヒンヨー、」ちーよーも、榮（さか）える、めでたさーやー。「ヒンヨー、」おーいーせ、をーどりのー。

### 第二段

○あーまの、いはーとのー、かーみーかーぐらー、つーきーに、ろーくーどのー、かーぐらよりー、せんくよりー、まんくよりー、だい〳〵かぐらよりー、「ソーラ、」まーゑーり、けーかうーの、めでたさやー。「アヽヒンヨー、」おーいーせをーどりよー、おーいーせをーどりー、をどりて、なぐさみみれーばー、「ヤーアー、」くーにーも、豐（ゆたか）にー、ちーよーもー、榮（さか）えるめでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせ、をーどりのー、めでたさやー。

### 第三段

○ひー東がーしは、關東かんとー奥おーくー、まーでーもー老によー若にやくーなんによーをーかえてー、さーかひ、ささーひ男女とまでも、「ソーラ、」まーゑーり、けーかうーのめでたさやー。「アヽヒンヨー、」おーいーせ、をーどりよー、おーいーせをーどりー、をーどりて、なぐさみ見れーばー、



「ヤーアー、」くーにもゆたかにー、ちーよーもー榮（さか）えるめでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせをーどりのー。めでたさやー。

### 第四段

○みーなーみはー、紀州きしうー、くーまーの熊野のーきしうーくーまーのーのひとーまでーもー、「ソーラ、」まーゑーりけーかうーのめでたさやー。「アヽヒンヨー、」おーいーせをーどりよー、おーいーせをーどりーをーどりて、なぐさみ見れーばー、「ヤーアー、」くーにもゆたかにー、ちーよーもー榮（さか）える、めでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせをーどりのーめでたさやー。

### 第五段

○にーしーは住吉（すみよし）てんのー天王寺じー、しこくつくしーの四國筑紫ー、ひー人とーまーでーもー、「ソーラ、」まーゑーりー、けーかうーの、めでたさやー。「アヽヒンヨー、」おーいーせをーどりよー、おーいーせをーどりーをーどりてなぐさみ見れー



ばー、「ヤーアー、」くーにもゆたかにー、ちーよーもー榮（さか）えるめでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせをーどりのーめでたさやー。

### 第六段

○きーたーはー、北越前えちぜんー能登（のと）やー、加賀越後かがーえちごー、信濃（しなの）のひー人とーまーでーもー、「ソーラ、」まーゑーりけーかうーのめでたさやー。「アヽヒンヨー、」おいーせーをーどりよー、おーいーせをーどりーをーどりて、なぐさみ見れーばー、「ヤーアー、」くーにも豐（ゆた）かにー、ちーよーもーさかえるめでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせをーどりのーめでたさやー。

### 第七段

○ちーはやふるー、こーへーひーしやくはー奉たてまーつるー。「アヽ、」こー心ころのーまーまーに、ねがひーこむー。アヽ、そーしは、ちーとせをーたーもーつなりー。をー喜どりー、よろこー人ぶひーとーまーでーもー、「ソーラ、」ま

ーゐーり、げーかうーの、めでたさやー。「ア、ヒンヨー、」おーいせーをーどりよー、おーいーせをーどりーをーどりてなぐさみ見れーばーやー、くーにも豐かにー、ちーよーもー榮えるめでたさーやー、「ヒンヨー、」おーいーせをーどりのーめでたさやー。

備考　歌謠中「ー」は節廻にして音を長く引く印、「ソーラ」「ヤーアー」「アヽヒンヨー」等は歌の合なり。これは農家に行はるゝ唱歌にして作祈禱或は惡疫を掃除し、或は戰捷を神に祈る抔に用ふるなり。我三浦地方にて作祈禱は、例年二月八月の兩月の十一日、大神宮の社前にて行ふ。

（北宇和郡）

## 伊豫節

○伊豫の松山名物名所、三津の朝市道後の湯、音に名高い五色ざうめん、十六日の初櫻、吉田さし桃小かきつばた、高井の里のていれぎや、むらさきゐどの片目ぶな、うすゞみ櫻やひのかぶら、チョイト、伊豫がすり。

○山はやま〳〵山多けれど、伊豫の松山たばこ山、あひの山にはおすぎおたまに、まんきんたんや、あさま山、こぶやかんばんふじの山、いも山せ山、よしの山、いなり山、お山、花山、ちやりで、おく山、大ぜきの、チョイト、ひでの山。

○竹に節あり枝にも小ぶし、はうたいよぶしたけづくし、ぬしは若竹、ひごろかんちく、ぐちをいふのがをなごだけ、まうそうはちくの竹なれば、ぎりをたてぬく男竹、雪折れざゝやしろーちく、せめてねだけは、たなばたの、チョイト、一夜だけ。

○堺住吉そりはし渡る、おくの天神五大力、おもとやしろやしんめいあなから大神さんをふしをがむ。たんじよせきには石をうけ、あかまいだれが出てまねく。ごろ〳〵せんべ竹うま麥わらざいくのつなぎぶり、チョイト、かはしやんせ。

（松山市）

○伊豫の松山名物名所、三津の朝市道後の湯、音に名高い五色素麵、エーン、十六日の初櫻、吉田さし桃小かきつばた、高井の里の手入木や、紫井戸の片目鮒、薄墨櫻や





緋の蕪、チョイト、伊豫絣。

○伊豫の松山煙草山、あひの山にはお杉お玉や、まんきんたんや淺間山、こぶやかんばんふじの山、妹山脊山吉野山、稻荷山、お山花山ちやりでおく山、大關の秀の山。

○伊豫の風早北條の名所、鹿島かんどやちきりこがしま、岡には惠良高縄山、立岩川には嫁が石、少し下りて大浦山、大浦の濱に出て、波鼻の岬から沖見れば、安居の島。

（溫泉郡）

○阿波の德島十郎兵衛むすめ、年は九つ名はおつる、せなにおひづる、手には杖と笠、順禮に御報謝というてまはる。廻る姿をちよいと見て、さつてもしをらし順禮の兒、どれ〳〵報謝進ぜませう。定めて連れしゆは親御連。いゝえ、わしひとり。

○竹に節あり枝には小節、はうた伊豫ぶし竹づくし、主は若竹、日頃寒竹ぐちをいふのも男竹、孟宗竹の竹までも、意地を立てぬく女竹、雪折笹に寒竹、せめてねざけの七夕の、ちよつと一夜竹。

（宇摩郡）

○伊豫の大洲で名高いものが、龍護和尚に銀田さん、圓外俳諧碁に福壽、かぢやの三線に仁井の筆太夫、丹波屋馬は小林、岩井相馬の唐團扇、四國頭取宮の森、江戸で出世が磯の森、のらの八。

○竹に雀は中よけれども、末は敵のゐさし竿、ふくら雀は雪折れ笹に群雀、舌切雀が昔話し、お宿はどこかは知らねども、ちゆう〳〵とまる小雀を、笹のあいきやういたしませう。まーとまらんせ。

（喜多郡）

## よいやな

○こよひ別れて、いつの夜にあはうぞ、おそし六月宮島えにち、それにはかならず出合ひませう。ヨイヤナー。

○ねたら夢でも見よかと思うて枕とりよせねてまで見たが、ゆめにも見やせぬあだ枕ー。ヨイヤナー。

○わたしやこの町のかさやでござる。はればたべます、はらねばたべん。どうでもかさやはちしや男。ヨイヤナー。

（越智郡）

# 福岡縣

## 千歳ろー萬歳ろー

正月元日より數日間、少きは三四人、多きは十數人の兒童、此の歌を一齊に唱へて、各戸に錢を乞ひ、之を集めて一の繪馬を購ひ、神社に奉納し、餘金を以つて飲食す。博多古來の習慣なりしが、數年前より全く廢止せり。

○せん歳ろー萬歳ろー、まー一番のお舟には、お船頭殿を置きやれよ。金魚丸といふ舟は、おもつてかざつて、やり立てて、榊を上げてしめを張る。しめかけ柱おし立てて、綾錦の帆を立てて、積んだる寶は何々か。かくれ簑かくれ笠、打出の小槌、大判小判、中のばんにまめつて、らいしんは倉三つ、さらいしんは倉四つ、合せて七つの倉倉に、錢も金もわつくわつくわつくわく、年の數は十三文、錢やんなさい。



○今年も滿作、らいしんも滿作、滿作年が續いて續いて、朝から晩まで働いて、背門や背門松、門や門松、お祝ひの松、年の數は十三文、錢やんなさい。（福岡市）

## 松囃子

保元の頃平重盛博多を領せしが、市民其恩惠に報いんため、初めて松囃子を行ふと云ふ。黑田氏の治世、歳の正月十五日、此の謠を唱へて市中を練り行きしが、現今尙其形式を存す。

### 稚子舞歌

○唐衣すそのが原の姫子松、〳〵、ひけば千歳も我袖に、籠るぞ春ぞめでたき、この御代の春ぞめでたき。梅が枝も梅が枝も花咲きてこそ匂ひけれ。思へば春ぞたぐひなき。梅をいざやかざさん此花をかざせ人々。（あげ羽）君が代にかげをならべて、老松や梅も名高き立枝かな。松を祝ひし例には、幾萬代の朽せぬ黃金の箱崎の神ごころ、又は春たつ千代の門松、子の日の小松行末も、久しき色も變らぬ春毎に、これも相生の梅の花、かかる色香も昔より、めでたし人に齡もあまねく國々も、なびき從ふ君が代の、蔭に榮ゆる春こそめでたけれ。

### 稚子行歌

○抑も稚子と申するは、七福神の其中に、辨財天と申すなり。いとも畏き裝ひは、國を守りの御姿、戴き給ふ天冠は、壽光を加護の光りなり。光り光りて明けき、抱き給ふ御琵琶は、月日の惠み曇りなく、福德圓滿一定の、其嬉しさをかけ鳴らす。妙なることの音曲は、福神達も一同に、笑壺に入らせ給ふなり。御代を守りの誓にて、天女と顯しましまして、大津の町や薹津潟、荒津の波も靜にて、榮え榮えの幾千代が、千代を重ねの千代の松、盡きせぬ御代の松ばやし、入船出船は幾萬艘、唐船も君が代の動かぬためし祝ふなる。碇を卸しおろして、ただ萬歳を唱ふなる、エーサラエーの囃子には、鶴も豐かに舞ひ納め、龜も遊びの音樂は、殿も榮えまーします、國も榮えまします。マーシマーシマシマシ。

### 福神行歌

○福の神やー先立つて三寶荒神さしかけて、白毛の樣にはまーしまーしまし、友と榮えまーしまーし、おふみかこみかこみどの樣には、ひよつとすれや、誰やらさいとう芽出たう、かはりけり。

### 換歌

○ひとつき山にふたつきやー、年のかずかんぬれば、三百六十五かん日、正月の月やー又おとふ月とも祝うて、鶴龜にごまんざいは、年の始めのとしをとこ、前に來ればさだまりて、さいとう目出たうかはりけり。

○一本柱を結ひたてて、二本の柱は日光さつこふ、三本柱をさしからふ。四本の柱は四天王、五本の柱はごんげん堂、六本の柱はろくじが地藏といひたて、七本柱は七かの藥師、八本柱は長谷の觀音、九本の柱は熊野の權現、十本の柱は十字がせいしたまはつて、さて又せいじ觀音の、地藏ほさつのお船のみさきにつき立て、左かぢ右か

ぢ右のかぢおつとつて、たからが島にこぎよせて、さても目出度い御世なれば、君萬歳と祝ふなり。（福岡市）

## 萬歳

萬歳は陰暦正月、各戸に至り、座上に舞ひて祝するものにして、頭に烏帽子を頂き、神官の略服様の服装を著、手に扇を携ふ。他の一人鼓をうちて之を囃す。

○一々億々千秋御萬歳樂と譽め奉る。白米が俵五萬の、いーろー、飯の山を押戴いて春景の面白や。誠に目出度う候ひける。年の始めの年男、れいしようこうは、頭に冠召され、ちゞみの刀を腰に指し、ゆづり葉を口にくはへ、五葉の松を手に持ちて、さて南殿につい立つて、源氏が門を押し開き、……（此處不明）……候も誠に目出たう候ひける。法華經は一部八卷、文字の並びが六萬九千三百八十、其中般若經と呼ばれたる。佛法福の止りとは、こなたなる御祝殿の御坐敷を譽め奉つて、先づ御祝ひには萬歳、々々々々萬歳樂、萬歳樂よと舞うたる、其舞常なる舞にて候はず。昔は後白河法皇の御時なぎやうやなぎやうや



太政大臣、數多の公卿衆が春日の社に集りなさるりや、天下が太平國家が安堵で、鶴とよ〳〵つつ立てあがれば、是亦目出度し。浮世の寶を逐一申せば、一には御命、二に又福德、三には幸ひ、四に又御家の御繁昌の寶を申せば、祖父さんが寶よ、祖母さんが寶よ、ほんこそ寶よ、孃こそ寶よ。商賣人の寶を一々申せばちきりに分銅矢立てに帳面。武士の寶を一々申せば、弓矢に鐵砲刀や薙刀。百姓の寶を一々申せば、牛こそ寶よ馬こそ寶よ。鋤、鍬、まうがも是亦寶よ。牛では何處牛、五島や平戸の天つき地飴が、鼻の先きよ怒らせ尾を又まきあげ、當年始まる明き方のかたから、もーんもーんと舞ひ込みや是又目出たし。馬では何處馬、日向や薩摩のあらゆる名馬が、大判小判をどつしやり脊負ひて、ひーんひーんとほけつて舞ひ込みや、尙又目出たし。鋤では何處鋤、大藏新地の猫鋤はい鋤、しろ鋤なんどで、さきでは何さき豐後の鶴崎、筑前鐘崎箱崎、御宮の馬場さき、御寺の門さき、さきのしよう集めて、本まではめこみ、鋤いたりかいたり、其又鋤き手は誰々、かき手は誰々。柿の本しぶ四郎、いろりのひいとぎ、鍋の中しやく四郎、戸尻の横槌、橋の下どん九郎、烏の黑助、鼠の忠助、松の木やに右衞門、熱燗太郎平、冷酒仁助、赤面しる平、丸倉金藏、穴の中久四郎、其手は九左衞門なんどが、八ツ手のまうがをしつかり搆へて、右これや左これや、行かんかせらんか。こんがきや夜も晝も、豆のしよう食ひたがつて、人の事あ言ひたがつて、糯の米はかみたがつて、年寄りや尻から煙の出るほど、煙草どものみたがり、白鷺や下の田に下りたがり、鎌どま逃げたがる。何とかかんとか、其又植ゑ手は誰々。命の長いが於鶴に於龜に、於千代に於萬に、於春や於秋や、なんどが、尻をばやつこらさと腰までからけて、旦那殿の御覽じる手前も搆はず、山田も迫田もやれちよぼ〳〵、ちよぼりと植ゑたる其田の實入のよさ、が、一町で一萬、二町で二萬の秋あけなされば、大福長者と諸人に仰がれ、鶴の代千年龜の代萬年、福の神やきり〳〵舞ひ込み、御家は繁昌〳〵目出たや。（企救郡）

## やつとなんこ

福岡縣　やつとなんこ　はつちよぎこ　千代萬歳十二段

是も初春に毎戸に至り、少女に異様の服を着せて踊らせ、他の一人傍に立ちて唄ふ。極めて卑野のものなれども、近年は殆んど跡を絶てり。

○ヤツトナンコガ、ヨーイヨサー、ことしやエー滿作穗に穗がさいた。（企救郡）

## はつちよぎこ

是も初春に來りしが近年は絶えて見ず。後ろ鉢巻し、襷をかけ、兩手に錫杖の如き鳴り物を握りたる男、戸口より躍り込み、活潑に踊る。他の一人太鼓を打ちて唄へば、其間々に踊子は次の囃を唄ふ。

○段々畑のやせ南瓜、なるこた知らんではひまはる、つみ切つて血を出せ、もみ切つて血を出せ。（企救郡）

## 千代萬歳十二段

初段

○一々おく〳〵彌勒のお世、三夜のあかつき、谷の眞砂が峯に登りて、大盤石は岩をかたらひ、古今やをにやら青空を、びらりしやらりと飛ぶは寶の千代五萬歳樂と譽め奉る。しらげはたはら五萬の治郎、飯の山を押戴いて春景が面白や。

二　段

○誠に目出度う候ひける。年の初の年男は、れいせうこうは、玉の冠をめされて、らいしやはたちをはつて、がくやはちゝみの刀を腰にさいて、ゆづり葉をくはへて、五葉の松を手にもつて、さてなんでつい立つて、源氏が門を押開き、おし拜んで候も、誠に目出度う候ひける。

三　段

○幸や改まる年立ち歸る朝には、水も若やぎ木の根も榮えとふみ式々の、お祝ひの物とほめて悦び候も、誠に目出度う候ひける。

四　段

○さんせふやうの東には、富のほふがさ榮えて、其日の神を尋ぬれば、長白が浮木にのつて、うこんの波がさか登り、霞に橋の渡すらむ。あんまの川原にどんふくら、うつ波が高うして、白龍水がながれた幸や。寶の君の御祝ひの、久しかるべきためしには、池の波の立ちやうは、夜打つ波のこんこう長しや、ひる打つ波は相生こふと、ふんとふらくに重つて、とふまんか、川柳川原風にひゞいて、こしみの根をしらふれば、波に相生打ちたりけり。扨青王が、松根をばしらべたり。深き處に船置いて、淺い瀬に橋有りて、橋の本の菖蒲は、夏になつてひらいて、水を揚げるは水車、玉を見するはみよ作り、扨令月が宿れば、長お子に歸り流の久しきは、君の御代にことならん。誠に目出度う候ひける。

五　段

○あら目出度や、そてんのおんとの作りの有りやうは、りうふりがつのうへに、こんがう山が石をならべ、しゆみせんざんが柱を立て、屏風松の繪がめでて、花がはやし君がつまを、命もながむれば、かたに金物鋲とうちて、ばんしやうがいたおろし、六波羅密ともかんついて、初ひてかんばしく候も、誠に目出度う候ひける。





六　段

○さて又げんぶが北に當つて、よふこう山福壽の山が高うして、梢を傳ふ猿猿や、谷の水は酒の泉、空をはしるは小男鹿の聲、萬歳とはふしかせ、あめは土を潤ひて、風は枝をならさいで、神明八丁十六丁、ほりかを、ほつてついぢをつき、宮殿廊下を立てならべ、四尺内裡内侍して、東門開きの東さむらひ、月見でん花見でん車屋すめのおさとふに、まはりのかかりに切立ての、ゆふべに成つて靜まりくるも、誠に目出度う候ひける。

七　段

○あら目出度や此處はかう處の處で、福壽がとまり末世末代、難なき處に候へば、空より七福ふり下り、地より草木をそふしよふし、昔聖德太子は妙法蓮華の車に召されて、りやうしやせんより我朝に、とんで渡らせ給ひしは、羊車、牛車、やうしや、ごーしや、牛車鹿車の車に召されて、はくひやうとふし引いて、地をば金剛力しやと引きたひらけ候も、誠に目出度う候ひける。

八　段

○東は御ざんしや、南に下れや門しや、西は大德北は金剛座門しや、子丑寅は多もん天、巳はしよく天、未申はそうもく天、戌亥はきこく天、天には日月下にはけんらうずいじん地神は、丁度守らせしんごんせふしめ候も、誠に目出度う候ひける。

九　段

○池の中の島々に、植ゑたる木の名はなに〳〵、金鳥とは土椿、南天菊とは令やふ菊川原しやうぶ〳〵、松にかゝるは藤の花、水に浮草かもめ草、孔雀ほうわう峯の土、佛緣草とさよづるを、佛法草と斷りけるも、誠に目出度う候ひける。

十　段

○ふんどうさんは來らいで、こんがらどうじはきたらいで、せいたか殿はふつとして、廿八もんにやもりける物は、なーに〳〵、法華經一部八百卷、廿八法もふじの、よふじの中にも般若經も讀み奉る。

抑も昔さぬきの國四國田中村といふ所に、しんたん長者一人侍り。その長者殿の戌亥の角に、千石作るさしつほ

あり。その中に三つ又のえのみの木有り。又は三本の竹くもをかすみとおひしけりしが、長者どのこれはふしぎと思ひ、ある夕漸くおそなへければ、空より雪しもふり下り、其にほひのかんたつのごと、したみる姓をあつめ其あじはひをみたまへば、あまくありからくあり。これはみづのえ酉の年にでたるもの故、水をへんとしてさんずるにとりとかく、さけとよむ。三木ともなづけさゝとも名づけ、松尾ごんげんを初として、日本六十よしうの神々にほかゐ奉る。幸々拂ひ給ふ、清め奉る、上はほんぬ天下は帝釋閻魔王〳〵、五道の冥がん南海下界の内には、伊勢は神明天照皇太神宮、天の岩戸にこもらせ給へば、日本はくれのやみとならしめ給ひける。

十一段

○いざなみいざなぎこきの尊と、夫(たれ)をかなしみ天に向ひ、夜にかはり日にかはり、ばん〳〵やくにかはり、守らせ給ひければ、日天月天、空より鬼神はふり下り、赤きは人界、黑きは三界、白きはけんぞくけだものとも、名を付けたる。三本の御へい、天の岩戸に納め給へば、大神宮も夫を悅び、少しは御戸を開かせ給へば、誠に目出度う候ひける。

それより末社が立始めて、内宮の御宮四十末社、外ぐうの御宮八十末社、合せて百二十末社の御神とよ。中にも尊き荒御神とよばはり給ふ。雨の宮風の宮月よめ日よめ北にさいふ、高田の權現、鈴鹿の權現、加賀の白山敷地(勸)の天神、門司に下りて一社の大こん宮、三吉津の宮迄(か)んじやう(請)申す。

十二段

○四國のそうびやうさぬきの金比羅宮、あきの國には宮島、周防の國ではといし八幡、長門の國にはなれ合觀音、備後備中、備前の國ゆうが三社の大權現、萩に稻荷や長府に一の宮二の宮、并に神功皇后、關に龜山かんじやう(請)申す。誠に目出度う候ひける。

九州の地に伴つては、日本のそうびやう宇佐八幡、并に大貞八幡、菰の社、彦山は三社大權現、くほては二社權現、一社は籠り水とかや、最早(もし)兎角寺山倉持山、八山一社の大てんぐう、椎田につなしき天滿宮、さつまにきりしま祇園の社、筑前の國ちびごんげん并になら山大權現、南無さいふはじざい天神、箱崎八幡海八幡、肥後の國では清正公、鹿大明神、阿蘇は十二大明神、川上では姫大明神、筑後の國ではかうら(高良)八幡、豐後の國ではゆす(柞)原八幡。日向の國では生目八幡、并にうどが岩屋と申する社は、うがやふきあへずの尊おんけいには火事をのがれ、亂けつには惡事をのがれ、夜の驚きひるのさわぎ、盜賊盜難七つの災難がふりやくるとも、此御神のくりきを以て、ま方千里が外に拂ひのけ、刀はさやに納まりければ、誠に目出度う候ひける。

（築上郡）

## 田打男

襷をかけ鍬を持ちたる子供を踊らしむる物貰ひの歌なり。

○今年(ことし)や滿作、出雲の國から、田打ち男が參つた。參つた御序に、さらばあなたの御田植、田植さなほり何を肴に致しませう。一味噌、二味噌、三ぴら大根、四ら豆腐、五豆、六一、七ちやら、八つちやら蓮(はす)の實、九り午蒡に、十蒟蒻、之れを揃へて精進物ぢやなりますまいと、裏のまんがり〳〵ひゆう七(ない)まがつた瓢簞堀を、千ほいて見たれば、鰌やどんぼや、鯰、取り分け、どんぼが多うござる。どんぼのかばやきや、お女中方には好物もん。

○ことしや滿作、出雲の國から、田打ち男が參つた。參つた御序に、さらばこなたのおん田植、西の畝町がおー千町、東の畝町がおー萬町、中のよい處が三段三畝の大畝町に。のー苗代田しろだをとりまして、目出度いお年の始めから、御新年の御祝ひ。

（三井郡）

## 獅子廻し

新平民獅子を廻し、太鼓を叩いて貰ひに來る。

○さて獅子なんどゝ申するは、此界にても始まらず、唐天竺にも始まらず。めん瀧をん瀧、さんない瀧、中に住んたが獅子となる。唐天竺にては、七帝の御大將の獨り姫の婚に化けたり、まもなく二人の和子を設け、七歳九歳の春の頃、花園山に登らせけり。……櫓に登り表の方を見て見れは、胴の長さは一丈餘り、まなこのあたり

を見て見れば、八寸鏡二挺並べたる如くなり。口より火焔を吹く如く、十二の角をはりあげたり。あら恐ろしや母上さま、我父上は獅子化物と化けてござる。黒金御門をはつしと打てば、獅子はかつぱと驚き、黒雲まきよせ逃げんとすれば、天のしやぐまが首打ち落す。胴は天の河に流れ行く。むこ歯三枚盗み取つたるが五穀の種、首は三國界なる、彦山權現に收まり候。二月十五日は御田がはじまり、種蒔なんどゝ申するは、此獅子なり。（三井郡）

## 狐廻し

狐を作り貰ひに來る。

○來た〳〵〳〵飛んで來た。來たというてもお客ちやごんせん、飛脚ちやごんせん。京都下りのお稲荷樣の御利生は、千兩萬兩のお金は來るとも、四百四病の病と惡魔はこんといふたら、いつちご、こん〳〵。（三井郡）

## 舞々

俗にめい〳〵と云ふ。鼓を叩いて貰ひに來る。



○田螺（たのし）どのゞ〳〵、あすは、春田に遊びませう。いやで候。昨年の春もさう云うてだまされた。鳶と烏と梟奴（ふくろめ）とあつちや、かいころばつからかいて（蹴轉ばす事）、かいこづく、此方こつちや、かいころばつからかいて、かいこづく、其疵が〳〵雨さよふれば、うづきます、其疵藥を云ふならば、山の峠の法螺の貝、海のど底の丹波栗、虱のあばら骨一夜作りのから酒と、煎じ合せて妙藥なり。（三井郡）

## 長者の君

### 倉祝の一流れ

正月に、新平民大鼓を叩いて貰ひに來る。

○年改る初には、白銀の年玉、齒朶もろもくには、もろへんじ、當年正月春來れば、水で若やく木の芽も蕾むたづの葉、鶯の初音をゆだねて、のをもんなー（此の言不明）この面白くも候てん。（以上序）北方天に造りし倉は、虛空藏の銀の庫、東方天に造りし倉は、大豆小豆の御倉なり、南方天に造りし倉は、大黒天なる錢倉なり、西方天に造りし倉は、辨財天なる米倉なり。四方や四面に倉を建て、中に泉かめんでたさよ。酒と造りし泉とたたへ、七つの泉がたゝへたり。酌めどもれど盡きもせねば、長者樣とは御祝ひ申す。（三井郡）

## 猿廻し

○お猿が山行は、熊本の爺さん痂瘡のお拂ひ、五穀長者お俵こかし。（三井郡）

## 田植歌

○あーら目出度や、ことしの稻は八穗で八石、九石にならばとのの世ざかり。

○おかたみもちげな顏そごそごと、小市やほしそに。

○わがとな山田のをどし、我殿は蚊やら蜂やらー我殿なさすな。

右三章は糸田村泌泉ノ金村神社御田祭（舊暦正月十五日）に歌ふものなり。傳へ言ふ、糸田村は昔時（千年前）水田なく、土民稻を作るに由なく、廣漠不毛の地たりしが、金丸某鋒を以て深く地に突き込みしに、清水滾々として噴出し、夫よりさしもの原野沃壤の水田と化し、米穀豐熟するに至りしを以て金村神社に祠り、毎年時を違へず祭祀を嚴にして其恩に報ゆと。（田川郡）

## 盆踊歌

○盆來れやうれし、正月來れやうれし。うれしの花はどこに咲く、どこにさく。山にも咲かぬ、川にも咲かぬ。石山寺の門に咲く。

○あら美しの、つまぐろの花よ。一枝折りて、たもとに入れて、一枝折りて、ふつくらに入れて、亦來る盆に水祭る、水祭る。

○今年の盆は、盆とばしおまぬ。紺屋が燒けて、かたいたが燒けて、盆かたびらも白できる、白である。白でも着まい、淺黃でも着まい。今こそ流行るべにかたびら。

○紺屋の裏にきりぎりすがないた、紺屋の嫁になろと云うてないた。紺屋の嫁になそこたなそが、墨すれ、ごすれ、ごの豆はかれ。あひだにや形もつけ習へ、つけ習へ。

○盆々とてもけふあすばかり、あすから場合の萎れ草、萎れ草。萎れた花をやぐらにかけて、上から見れば牡丹の

花よ、下から見れば八重櫻、八重櫻。　（宗像郡）

○關の御茶漬出がけに一寸あがれ。人の惡いが門司田の浦よ。大里長濱會根刈田、行事大橋や極樂世界、うはさばかりで行て見りや地獄、椎田烏に八屋の鳶、小祝堂から目をぬかれ、中津吉吾さんから又もだまされた。

○蘆屋道滿大內鏡、狐かりうど致した時に、惡に門から身を狩り出され、保名樣から身を助けられ、保名樣には御恩が御座る。御恩ほどきに女房となりて、女房なりしが先づ七年よ。間に童子と云ふ子が出來た。子から寢姿見居けられて、どーせ此屋に住ひが出來ぬ。母が見たくば信太にござれ。母は信太の森に住む。　（築上郡）

○ひよ〳〵と鳴くがをしどり、小池に往むがをしどり。

○五文さしぐしはな紙一帖、アラーヨイマカーヨイ、こひがかなはにやそんそりゆーもどせ。アラーヨイマカーヨイ。

○空の星の數かぞへて見れば、九千九つ、百七つ。（田川郡）



○今の世までも盆踊りとて、傳へ殘りし其もといへば、お釋迦如來の慈悲心深き、數多の亡者が地獄に落ちて、苦げん受くるを是御覽じて、苦げんをまぬき喜ばせんと、地獄の門の戸開かせ給ひ、數多の亡者を呼び出しあれば、それを預る獄卒共が、お釋迦如來に申せしやうは、これは私預り物よ、早く地獄に御返しなされ。閻魔大王の叱りを受ける。えよう〳〵とのゝしりければ。お釋迦如來は方便手だて、二百餘人のお弟子を呼びて、鐘や太鼓を打ちならしてぞ、地獄踊りを致せとあるに、皆のお弟子が御受けを申し、直に踊ぞ始まりにける。阿難尊者に目蓮尊者、うら盆經の音頭があれば、われもおれもと皆踊り出て、餘り音頭の面白ければ、尊者〳〵と受聲上ぐる。踊る手づまにちよつとさと手打ち、後の受聲にやあとせいよいな、是はいよ〳〵あと榮ゆると、かいた文字で目出たきはやし。餘り踊りの面白いゆゑ、これに見惚れて獄卒ども、我を忘れて皆踊り出る。今は地獄にせめ人もなし。數多の亡者は悅び踊り、地獄のがれて極樂となり。こんな目出度い踊りになるは、是ぞ佛の追善供養、こんないはれのある其故に、末の世までも盆踊りとて、勇み進んで踊りしものぞ。　（三潴郡）

## かりとつばめ

○かりと燕はどちらがかはい。やゝを育つる燕がかはい。はなをみすつるかりがねならば、文のたよりもまた賴もしさうかいな。エーソーヂャイナ。

○梅と櫻はどちらがかはい。只實結びしお梅がかはい、仇にさくらはあらしにもまれ、曇る心も亦賴もしさうかいな。エーソーヂャイナ。

○戀の源尋ねて見れば、神の昔の二柱、君おのころしまにましましてより、賤が伏屋のわれ〳〵までも、恥かしや。エーソーヂャイナ。

○東名所は名もなつかしく、春の初めはうめわかまうで、都鳥浮くあの隅田川、戀風そよそよ吉原櫻なびきそめ。エーソーヂャイナ。

○思ひ深草少將さまは、小野の小町の色香にまよひ、百夜誓ひて通ひし內に、露と消えしまたどうよくさうかいな。エーソーヂャイナ。

○花匂ふ山の端出づる月影に、光るの君にいつあひ染めて、思ひ明石の浦波に、立ちおくれつゝ見る目かる、あまのみながら戀ひ忍ぶ。

○梅薰る東や春の軒の端に、早くもなれて鳴く鶯の、初音しをらし娘氣の、たけの思ひを一すぢに、まつのよはひを契りけり。

○戀のたね誰いつの世にまきそめて、なさけのみばえけふ咲き染めて、いとしかはいの花盛り、男盛りや色盛り、遊びこうじてするとなる。

○豐年は民も榮ゆる萬代に、七福神の舞ひすがたこそ、惠比須大黑始めには、鯛つりこんぶまきずるめ、末は鶴龜五葉の松。

○秋の夜のいとゞ月かげさやけきて、露にわが身を世にうつせぐさ、姿うつろふ鏡草、わけてやさしきひめつゝじ、

きみに思ひの深見草。

○千代八千代御代も榮ゆる常盤木の、松の葉色はなほことほきて、茂れる枝のそのなかに、鶴のつがひのすごもりや、きみがよはひはながからん。

○吳竹のよごとに千代のかずこもり、色付く稻も初雁の聲、行方思ひの花すゝき、民も豐に天つ空、祝ひ壽き天が下。

○年毎に榮えて村の賑ひの、三味の音たかもよもすゞしさに、踊りめぐるや盆の月、稻も白露引き受けて、弓張る實のりゆたかなり。

○なんのいんぐわで百姓習うた。夏は田の草、秋や夜臼なー、秋や夜うす、田の草、秋や夜臼。　（鞍手郡）

## いろは口說

○イヤーくには、オホーホーイ、ハー國は日本日向の國よー、こけつ和尙の造りし功德口說カ、四十八字のいろはの功德、幼なき子を愛して通せ。老はうやまひ無禮をするな。腹が立つても皆まで云ふな。憎み受くるも我心から。譽めてもらふと高慢するな。遠慮ないもの一人もないよ。隣り近所に不都合するな。近き中にも又垣をせよ。理屈あるとも皆まで言ふな。主に於ては大事が起る。流浪人をばいたはるやうに、親に對して不孝をするな。若き間の其道々を、家業大事と心に掛けよ。善きも惡しきも人事云ふな。例令高きも又卑きも、禮義正しく浮世を渡れ。そこつものよと言はれぬ樣に、常の身持を大切に持ちやれ。寢ても覺めても只正直に、何がないとて世を恨みるな。樂な暮しは一人もないよ。報い報うて貧窮となる。歌で必ず身を亡ぼすな。今の難義は思へばいとゞ、後の親をば又本とせよ。終り果てねば我身がしれぬ。國に於ては大事が起る。役をするとも驕らぬ樣に、眼くらみて貪慾すれば、劍の地獄は此世に落ちる。富强千歲と備はるやうに、心靜めて詫するやうに、榮燿過ぎては貧窮となる。手前好いとて自慢なするな。惡しき事なら誰でも言ふさ。酒を飲むとき過さぬやうに、きりやうよいとて自慢をするな。夢に苦勞は貧するものよ。目にも出すな、色にも出すな。耳に聞いても聞棄てにせよ。次第〳〵に顯れまする。緣のなきもの一人もないよ。一人行く道冥土の道よ。物の憐れを思へばいとゞ、世上あるけば宿屋が大事。すくのすかんのと人事云ふな。上下段段に皆押し並べ。　（三潴郡）



○いとけなきをば愛して通せ。老はうやまひ無禮をするな。腹は立つとも皆までいふな。憎みうけるも我心から。褒めてもらはゞ高慢するな。距てないとて遠慮に思へ。隣り近所に不通をするな。近い中には又垣もいへ。利口者ぢやと高慢するな。主のある人不義共するな。るらうするのも我心から。親に不孝の妻なら去れよ。わかい時には身を謹めよ。可愛子供にや又旅もさせ。慾にきりある我慾をするな。たかい低いの差別をするな。禮儀作法をよくわきまへて、そさうした時はよくあやまれや。辛らい務めもしのんで通しや。願ひ通りに事成就する。ならぬ者ぢやと言はれぬ樣に、樂がしたけれや辛抱なさい。昔がたきの人にはしたへ。浮いて繁るは水草ばかり。いやな事とて色には出すな。後は其身の樂しみとなる。親の意見を忘れぬ樣に、國のおきてをよく守りつゝ、屋敷堺をきびしく守れ。貧し暮しも心を富ませ。けしの種子でもぬすみはするな。富者貧者は時世と時節。心よく持ち油斷をせねば、えらい人にも成られる浮世。照らす鏡の曇らぬ樣に、惡しき友達遠ざけて行け。咲いた櫻に駒繫かれぬ。貴顯方とてへつらひするな。由緒ある人粗略にするな。愛づる心は下目につかへ。身分相應儉約せよや。死後の笑ひを受けてはならぬ。會者定離と心をかけて、貧も富貴も世を怨むるな。もとの赤子が裸と思ひ、世間世上を下から眺め、進みゆく氣をこだてにとれば、人の開くる寶の文と、末の世までもかたみに殘す。じやうが文せしいろはの口說。　（京都郡）

## 那須與市口說

○手柄づくしは那須野の國よ、那須の與市といふ侍は、男小兵で御座候へど、積る御年の今十九歲、殘し置かれし處をきけば、お國讃岐の屋島が浦の、源氏平氏の御戰に、平家方なる沖なる船に、九郎判官之れ御覽なれ。あれは

源氏に試みのまと、あれを一矢に射落すなれば、弓の天下を許してやろと、あれを射おとす人とてもなし。與市ならでは射落しやすまい。與市御用と御前に召され、與市御用ときくより早く、茶色袴のもゝだちよ取りて、御用如何にと伺ひあれば、與市あれ見よ沖なる船に、まとに扇が立ておいてある。あれは源氏の試みのまと、あれを一矢に射落すなれば、弓の天下を許してやらう。那須の國どま當座の褒美、君の發命一と間に下り、一間くだりて仕度にかゝる。下にきるのが下ねり小袖、中にめすのが萬年ぐさり、帶は流行の京博多織、駒はどこよと尋ねてきけば、駒は奥州かんとう育ち、あけて六歳鹿毛なる駒よ。金のふくりん鏡鞍おいて、淺黄手綱を七へにとりて、急ぎ〳〵て屋島が浦の、小松小かげに駒引き留め、遙か向うを透かしてみれば、其の日屋島が大西陰で、波が高うて風烈しうて、そこで與市が氣聲をかけて、此處にまします明神さまよ、南無や鞍馬の大天狗樣、弓も刀もあげますからは、暫し留まれ波風二つ、神の力か波風靜か、中をねらふか要をねろか。中は日の丸大紋扇、要處を射てたべしやんせ。ひとつ放てば扇の要、扇はちり〳〵海にとおつる。沖の平家は船ばりたゝく、陸の源氏は御旗を立てゝ、したり〳〵と褒めあふ聲に、弓は袋に刀は鞘に、納めおきます、鞍馬の山に。　（京都郡）



## 後生くどき

○命あるうちようきゝなされ。老少不定の身を持ちながら、花見月見は樂しみならず。逃げよう道ない、未來の道は。ほんにうつかりしてゐられんと、へんじのぶれは永劫のそんよ。兎角我身の後生をおもや、智惠もいらねば學問いらず。りこう發明やくにはたゝぬ。ぬけた者程ぬかさぬ御慈悲、流轉〳〵とまよひし道を、己が願業はけむに足らず。わしは本願信ずるばかり。若い妻子を捨てよぢやないが、よくも捨てよと言ふのぢやないが、たつた如來の仰せを聞けば、れんげ世界に生るゝ人は、僧侶姥婦うばかゝへだてはないが、常に本願信ずる計り、ねてもさめてもなむあみだぶつ。永い迷も此しやばかぎり、樂婆有德でうとくで暮した迚も、むざんなるかなみのりを聞かにや、うゐの都に行く事出來ぬ。今も無常の風吹きくれば、野邊の煙りとなり果てぬるぞ。思ひ見なされはかないものぞ。くをんごふ久遠劫より作りしつみも、やまひなほるも信心一つ、まこと他力の信心得れば、けしの種ほど疑うちやならぬ。佛に我身の罪とがまかせ、こんなつまらぬいたづらものが、廻心懺悔しんくわいのみのりによりて、てんがはれての極樂まゐり、あきれ果てたる果報ぢやないか。さればまことの信心得れば、昨日今日までこのはなさして、行くに極まる我身の上が、あこちかへばちかうたものか。彌陀に我身の罪とがまかせ、自由自在の淨土のさいど、緣にひかるゝご法ぢやないか。人をうらみに思はぬやうに、まふけだすのもひんくの人も、せめて國恩報ぜぬ人は、少しや報ずる思ひになりて、京も田舍も皆おしなべて。上の規則をいよ〳〵守れ。　（田川郡）

## 風流歌

秋稻の收穫の後、豐熟祈禱の餘興に用ゐらる。

### 太鼓歌

福岡縣　風流歌

○金神のまします酒に、はやよえて、ヤー錦をはへて。
○うれしきかなや。いざさらば、この松蔭に立ち居して、風まうて吹く寅の年、神のつけをぞ待ち居たる、神のつけをぞ待ち居たる。
○みわたせば長生れんの木をならべ、年はゆけどもおいせざる門の松、ヤー白とうの鶴と龜とは天上に舞ひ遊ぶ、ヤー此身を守るものみちきたり。
○一天四海なみをうち、治め給へば國も動かぬあら金の、土の車の我等まで、みちせばからん、君のおんみかげの國なれや。
○みよしのゝ千もとの花の種とりて、ヤーあらし山、あらたなる神や遊ぶぞうれしき。
○おいせぬや、藥の名をも菊の酒、ヤーあらしやあそぶぞうれしき。　（三潴郡）

### 奴人丈幣振口

○江戸橋京橋日本橋、日本橋から足揃へ、あとを見返しよし原の、吹きくる風のなつかしや。波も靜に品川や、軒

端ならぶる神奈川や、こゝならよらしやれお江戸樣、お茶もちやん〳〵わいてゐる。江尻のうらの朝ぼらけ、晩のとまりは小倉ゆき、あすはするがでおつたてろー。かちでわたるはさつさつ川、かはづなくなら小田原や、その名も高く藤澤の、うゐりようみせや菊畠、のぼれば箱根のおひるぞや。麓に下れば伊豆の國、三島の里の神垣や、……頼むはなさけありがたや、とけてふきだす袋井の、さむる鳴海の花しぼり、かたからす其色絞り、買うてくだんせお江戸樣。

○花のお江戸はかしまたち、品川大木戸藤の濱、八つ山崎や川崎や、越えて戸塚にとまるなり。あくれば藤澤遊行寺の、お寺は大磯とらが石、少將坂を越えゆけば、鴫立澤や西行の、よにみしあとを打ちすてゝ、小田原うゐろさま〴〵に、せりふで上る曾我兄弟、宮居で昔思ひ出す、箱根權現これかよと、賽の河原の地藏さん、故郷戀しと塔を組む。えい〳〵のぼる峠越え、下れば三島權現の、道中安心息災に、祈りて伊豆の宿々を、振りて富士川船渡り、由井蒲原や田子の浦、三國一の富士の山、沖の白



波立田山、こゝを見上げて清願寺、見下す三保の松原を、眺めは月のさすた山、富士淺間を廻りきて、宇津谷の山の遠山宮、蔦の細道たどりゆく、富士へ度々袖をひく、程なく之ぞ大井川、さつさと越して金谷の宿、小夜の中山せい願寺、八町鐘や夜鳴石、道坂こしてヤツシツシ、天龍川を打ちわたり、遠州濱松舞坂より、艪拍子そろへて荒磯を、急けば程なく吉田の宿、赤前垂れや、玉襷、膾もるやらお茶を汲む。……池鯉鮒鳴海熱田の宮や、七里の渡り帆をあげて、桑名につけば參宮人、ばはつく中を押し分けて、關の地藏を伏しをがみ、音はきくさや鈴鹿山、瀨田の長橋踏みならし、琵琶湖の海づら八景の、大津の宿につきにけり五十三次殘りなし。

句の終りに、「イヤー、ナニガサテサー、アーヨーイハサー」と「アーソレハイサーソラサノサ」とを交互に唱ふ。

（三潴郡）

## 節季候

乞食の物品金錢を乞ふとき唱ふるもの、以下數節皆同じ。大抵節季正月に限る。

○そら又御祝ひ目出度いちがはん。こつちのとん樣お馬が御好きで、お長屋三十六軒よーやる。あの間の隅から此間の隅まで、ざらりやざつとつながせ、そこそこ賜へばお馬の別當にや、でこ内でこ助とべんの休三はかたやはやまやぬるまがわつたるほーねり、びんつけびんたにべつたりぬり付け、後は秋月元結でちつくり豆をりゆうたか、おうばさんの……堅糟大根のほやほや煮えたと食うたか、お馬はどんばうふとさに、一どきかけだす。ひーん。

○目出たいなー、目出度いなー、大黑さんな一が大黑二が布袋、三で三人御兄弟やー、四つは萬の世に猩々、五ついつもの若惠比須、六つは福錄清淨天、七つ何事聞く人は、吉祥辨ずる辨財天、目出たいなー大黑。

○目出たいなー大黑さんがあなたの御家に舞ひ込んで、舞ひ込んだ。チヨイトナ、チヨイトナー。

○親も代々子も代々、孫ん子末代孫子の末まで、ほだいほだい福ほどつさり。

○紀州はなぎさの郡たかがうら、淡島大明神樣第六番目の乙姫樣、腰から下の病なら、直してやらうとの御請願、男女の隔てなし。

○西のせまちがだいせんじよー、東のせまちがだいせんじよー、中のせまちが三反七畝、七畝所に隱居家立てて、祖父と祖父との別れ家立てて。ヤツコラマカセノヨーイヤマカセ。

（福岡市）

乞食四ツ竹を握りて、門に立ち、別に小さき子供を踊らしめ、左の歌を謠うて貰ひに來る。

○アラ目出度いな〳〵、お家繁昌と祝ひませう。（踊子）アーチヨイトナー〳〵。

○アラ目出度いな。大黑が、あなたのおへや（室）に舞ひ込んだ。（踊子）アーチヨイトナー〳〵。

（三井郡）

## 地搗歌

○其名しれたる下野の國、那須の與市がほまれの次第、なりは小兵で御座候へど、つもる御年十九歳にて、矢をば一手に名を萬天と、傳へ殘せし處はいづく、四國讃岐の

○八島がうらよ。平氏源氏の御戰に、平氏方なる沖なる船に、まとに扇をたてたる後は、九郎判官み給ふより、やがて與市を御前にめされ、與市お前へ相つめければ、汝招くも餘の儀でないぞ。沖に立てたるあの扇をば、あれをあのまゝ立て置くならば、源氏末代耻辱となるぞ。矢頃遠くもはやいり落せ。かしこまつたと御受を申す。與市御前をはや罷り立つ。宿にかへりて其日を祝ふ。與市其日のいで裝束は、かちん赤地の錦をめされ、白絲をどしの鎧を着し、五枚かぶとに鍬がたうたせ、弓は重籐きりふの矢をば、五人ばりには矢は十五束、お首かたずとえりかき合せ、青い馬にとゆらりとのりて、しんづそろりと歩ませ給ひ、小松原よりなみうちぎはも、風ははけしく浪あらやかに、的の扇も定まらざれば、與市氏神那須明神と、南無八幡なす明神と、力合せて心願こむれや、神は正直頭に宿る。風は荒せど浪治まれば、的の扇も定まりければ、與市しばしと的をばねらみ、要のきはをふつと、いりて落すが要のきは、沖の平氏は船はりたゝく、くがの源氏はえびらを鳴らす。與市手柄と皆ほめにける。

（浮羽郡）

六三二

## 石搗歌

○こちのうらにーはー、めうがとーふきーと、ハーめうがとふきーと、めうがさかゆーれやふきはんじやう。ヘーショー、ヘーショーヘーションガエー。

○あしがとのごさんなー支那朝鮮にはー、支那朝鮮に、今はいくさのたたかひー。ヘーショー、ヘーショー、ヘーショー、ヘーションガエ。

○思ひ廻せーばてる日がくもーる、ハーてる日がくもーる、さゆる月夜が雨とーなーる。

（絲島郡）

## 漁人歌（十日蛭子）

○正月二日の初夢に、木更木山の楠を、背板五枚にわきおろし、新艘造りて今おろし、如何なる大工が造りしぞ。柱は鐵の延金に、せびには黄金を加へさせ、帆はほー法華經の卷物で、みなはて繩は琴の絲、艪梶や天の羽衣で、ともの矢倉に松植ゑて、松の嵐を帆に受けて、千里の灘も一日和、船頭くやむな（こぼすな）舵手の衆せくな。一度は寶に乘りあぐる。思ふ寶をざんぶと積んで、今は吉井の川口に、寶入船錨をおろし、ションガイナ、これもまたいちぢやないかいな。今年や○○（魚名）が大捕れせう。アイヤオイ。

○こちの座敷は祝ひの座敷、床にかけたる懸繪には、梅の木三本かいてある。つがひの鶯とんで來て、金銀食ひ寄せ巣を作り、十二の卵を產み揃へ、十二一度に目をひらき、親諸共に起つ時は、金の銚子が七銚子、又白銀の杯を、飲んぢや大黑歌へや惠比須、中のお酌は辨財天、お家繁昌と祝うてたつ、之れも亦いちぢやいな。今年やつの（魚名）が大捕れせう。アイヤオイ。

魚名は其日の收穫物を當てはむ。

（絲島郡）

## はんや歌

### 思ひます

○ハンヤ、思ひます、誰れ故か〳〵。

○ハンヤ、をり〳〵によそ心、あるふり見れば、添ひねながら心おんともなや。

○ハンヤ、思ひますは、誰れ故か〳〵。

### 松にも

○ハンヤ、松にも風はおとづるゝ〳〵、ハンヤ、いかにやなまち人の、心はくれなゐの、うつろひやすきうらめしや。

○ハンヤ、松にも風はおとづるゝ〳〵、ハンヤ、いかにやな、まちてぬるよの鳥の音は、いづれもあかぬうらめしや〳〵。

○ハンヤ、くもればあたりも見えぬうらめしや〳〵。君があたりの風ならば、つらかろし、そではぬるとも、そではしぼるとも、をしからじ。

○ハンヤ、くもればあたりも見えぬうらめしや。君があたりに立ちそひて、つゝめども君に情をかはしたや。

### せめて見る目

○ハンヤ、せめて見る目はうら〳〵と、なさけなや我に心

をおく人の、みればよそにもうちとけて、うらみくつわきりぎりす。

○ハンヤ、せめて見る目はうら〳〵と、おもひをも色に見せばや。くれなゐのよそにちりてはなにかせん、我身一つはいかにせん。

○ハンヤ、忍べどあはぬ心はくやし。かきやる文にもたゞいだづらに、みわけてやらぬことくやし〳〵。

○ハンヤ、忍べどあはぬ心はくやし〳〵。きよたき川もあめふれば、水にごる、うき世にすまばにごれ君。

## 人めが戀

○ハンヤ、ひと目がこひのなかがき〳〵、あはでうき名のたつた川〳〵、わたらでぬる、わがたもと、いかにせん〳〵。

○ハンヤ、ひとめが戀のなかがき、あけて浮名のたつた川、わたらでぬる、我たもと、いかにせん〳〵。

○ハンヤ、ひとめが戀のなかがき〳〵、こゑふりたて、すゞ蟲の、音づればかり松蟲の、いかにせん〳〵。

## 思ひしのばれ

○ハンヤ、しのびしのばれてよをあかす。まつよひにふけてゆく鐘のこゑきけば、あはで別れの鳥がなく〳〵。

○ハンヤ、しのびしのばれて、深山の奥のほと、ぎす、君をうらみて夜をあかす〳〵。

○ヤーラ、うつ、なや、やるせなや、くれなゐにこぐほどそめておもへども、君の心はうらめしや。

○ヤーラ、うつ、なや、やるせなや〳〵、我が君とかたりなぐさむあけぼのに、とりのこゑごゑうらめしや。

## 變る心

○ハンヤ、かはる心はたれゆゑか〳〵。わがなは水ももらさぬなかなれど、たれゆゑ心がかはるらん〳〵。

○ハンヤ、かはる心はたれゆゑか。わがなかはあいもちたてひひもせで、つきよはなどよみたばかり〳〵。

## みるたび



○ハンヤ、見るたびごとに戀ぞます。はづかしや、さぞやたびねのものさびし。いまはさかりのしほすぎて、秋の野原のきりぎりす。

○ハンヤ、見るたびごとに戀ぞます。このほどはさぞやたびねのものさびし。とりもうらむな、うらむまじ。そのいにしへを思へ君。

## 君が心

○ハンヤ、君が心はわすられず〳〵。むかへこやまの鹿だにも、つまをもとめて夜をあかす。

○ハンヤ、君が心は忘られじ。ござれわたらう、松島に。さきとばかりはみはならじ。

## 忍ぶ心

○ハンヤ、しのぶ心はあぢきなや〳〵。月さへかくすねやのうち〳〵。

○ハンヤ、しのぶ心はあぢきなや〳〵。つれなの君は見えもせず。

## その里

○ハンヤ、其里人のつらうても〳〵、かの月にふかれしすがたは、よそに君みえて、うきよにまさる〳〵。

○ハンヤ、其さと人のつらうても〳〵、かの松にはふかれしすがたは、よそに君みえて、うきよにまさる。

## 月さへ

○ハンヤ、月さへかんかくせ浮雲（うきくも）、君待ちて松の柳の下にたつ。ハンヤ、其おもかげのみえぬほどかくせんや、ヤヤうきぐも。

○ハンヤ、十五夜の月は山べにさえかゝる。ハンヤ、われはつまどにいそぎける。ハンヤ、そのおもかげの見えぬほど。

○ハンヤ、月さへかくせむやうきぐも。なか〳〵にとけぬなさけのいつはりを、ハンヤ、別れて後のものおもひ。

○ハンヤ、君は河風われは船々、ハンヤおもひますよーの、こがれこそすれ。ハンヤ、船の内でも上ろはよう、ハンヤ、苫をしきねになう、かぢをまくらに、ハンヤ、かをとめともはさくら花、ハンヤ、ふりとこゝろはあをやぎのいと、ハンヤ、われはゆかばやせきこえて、あとに思ひはつゆものこさじ、ハンヤ、ふみはやりたしせんかたなや〳〵、あとにおもひはつゆものこさじ。

○ハンヤ、とりてくやしき此文を、みれば名のたつせんかたなや。

## 秋の野

○イヨ、秋の野に妻こひはねる鹿のねに、よこぶえによるおとのねにしむ。イヨ、こぬ人を今か今かとまつかけの、イヨ、まつよのまくらそばだてゝ、きけばおどろくかねの聲、しらでわかなにおほゆる、ハンヤ、君ゆゑに思ひ入り江のみをつくし、なみだにそでやくちやはてなむ。

## しだれ柳

○ハンヤ、しだれ柳にはるせやめん、いとゞ御心の亂るゝ、ほら〳〵ほろ〳〵と。いんいづるたかなみたかは村雨。

○ハンヤ、しだれ柳に春せめん、せまいせうじに文をえて見れば、名のたつたまづさよ。はら〳〵ほろ〳〵と、出づるたかなみたかはむらさめ。

## 待ちふかす

○ハンヤ、まちふかす〳〵、みやこ出でゝはよしのゝ山、うきよ忘るゝ花盛り、ヒフヒヤンチヤラロ、ハンヤ、まちふかす〳〵。いせのようらにふくふえはみやぎえするものかもかねに、ヒフヒヤンチヤラロ、ハンヤ、待ちくらす〳〵。なにをうらむる葛のはの、見よや招く尾花のやさしさや。ヒフヒヤンチヤラロ。

## しちく竹

○しちく竹、イヨしちく竹、かやはなきをひとつ、あやゝにしきのかけざをに、しちく竹はなさをひとつきなもらさぬかこかきよ。



## 春のけしき

○ハンヤ、春のけしきはおもしろや。ハンヤ、花にきてもおもはするうぐひすの、宿はいづくかおもしろや。

○ハンヤ、春のけしきは面白や。おきなめしをかのかはべやどにきて、やどはいづくかおもしろや。

## 戀をするが

○ハンヨ、戀をするがのふじのねの、けむりくらべのあさまだけ、チヤ、うらめしやさてもさても、さのみにものなおもやせん。

○ハンヨ、戀をするがのふじのねの、イヨ、おもひたえつゝねむる夜の、ゆめをたのめし、チヤラ、うらめしや、まくらにうときゆめよ。さのみにものなおもやせん。

○ハンヤ、戀をするかのふじのねの、すゑもとゞかぬちぎりこそ、ヒヨン、うき名たつべしものいかに。

## 月はまづ

福岡縣　はんや歌

○ハンヤ、月はまづ峯のすゝきにてらすより、枕におつる山水の、こゑやさき。イヤ、かくあらばちぎるまいものなか〳〵に、またはもうへのつゆのはをうへやさき。より人のゆくてにひかされて、あかしの浦にすまひこそすれ。

## 八調子

○ハンヤ、見たいものや、日にいちど。けふの日もはや見でくらす〳〵。イヤ、君にをだまき麻の絲、心あはせてよるばかり。イヤ、なか〳〵しよかけたうらみもうそ、にしひがし〳〵。イヤ、けさの夜あけの雲見れば、われもあのむきちり〳〵と〳〵。

## 六調子

○うぐひすが花のほすだにひるねして、おどろくたびに花がちる〳〵。アレハヨイ〳〵コレハヨイ、ソレハヨイハツク〳〵イチチヤン〳〵ノヨイイヨ、こひしさにこなたの空を眺むれば、ゆくれば涙なる〳〵。イヨ、十五夜の

月の入るまで待ちつれど、つれない君はまだ見えぬ〳〵。

## 豐後國

○ハンヤ、豐後の國の習ひには、かさにほひのとめやる。ハンヤ、豐後踊りをひとりひそかにおようたびのこのしのび東のわかまはる。ハンヤ、豐後踊りを一踊り。

○ハンヤ、ぶんごの國のならひには、人のしろしのお手を引く。ハンヤ、ぶんごのをどりはひとをどり。

○ハンヤ、ぶんごの國のならひには、せきや〳〵でおびをとく。ハンヤ、ぶんごのをどりをひとをどり。

## 花四せつ

○ハンヤ、春は花さく、この里に。ハンヤ、立ちも退かれぬ花のもと。ハンヤ、夏はすゞしき木のもとに、ハンヤ、立ちものかれぬ木のもとに。ハンヤ、秋はさやけきお月樣〳〵、ハンヤ、こゝろさえねばやみでそよ。ハンヤ、冬は雪見の富士の山、ハンヤ、袖にふる雪しみ〴〵と。

## 君はきせる

○ハンヤ、君はきせるよみは煙草、ハンヤ、今は人べつたばこめす。ハンヤ、藥とも毒ともしれぬかるもぐさ、ハンヤ、のどに烟のよく絶えぬ。

○ハンヤ、身はこゝに、心は江戸に通へども、ハンヤ、富士を眺めて日をくらす。ハンヤ、身はこれに、心は武藏のはるかにて、ハンヤ、何をするがのみのをはり。

## 君ゆゑ

○ハンヤ、君ゆゑにこそ身はほるれ〳〵。ハンヤ、君と我との言の葉を、神や知るらむたのもしや。ハンヤ、やるせなや〳〵。

○ハンヤ、君ゆゑにこそ身はほるれ〳〵。ハンヤ、今は月の夜やみでそよ。人目しげきのかどたちいでゝ、そよ〳〵。ハンヤ、やるせなき。

## 月のくれ

○月のくれ、ハンヤ、月のくれ、オントまゝよ。ハンヤ、まつよのまんまぐれそばたてゝ、ヤヨ、聞けば驚くわらかねの聲。しらでわが身のふけゆく。ハンヤウラ〳〵、ハンヤヒフヒヤンチヤロ、ハンヤミヤラニチヨンオルロハンヤ、月のくれ月のくれ、オントまゝよ。ハンヤ、今は月の夜すだれの内のゆかしさよ。ヒヨ、たつたのけんけむりたちそひて、しらでわれのみこがるゝ、ハンヤ、しらでわが身のこがるゝ。

## 長者四せつ

○ハンヤ、長者さま〴〵おほけれど、ハンヤ、みなみつ長者と申するは、いとな長者でおはします。ハンヤ、大ぢに黃金をゆりはめて、ハンヤ、白銀はやしを七はやし、こがねの御藏が七みくら、ハンヤ、四方に四せつをあらはせり。ハンヤ、東をはるかにながむれば、春の景色とうち見えて、日月はんじやうかゞやかに、誠の春とは見えにけり〳〵。ハンヤ、南をはるかにながむれば、夏のけしきとうち見えて、池水までもぬるうして、みいとのかまどをみがきたて、誠の夏は見えにけり〳〵。ハンヤ、西をはるかに眺むれば、秋の景色とうち見えて、十二のほさつをまゐらする。誠の秋とは見えにけり〳〵。ハンヤ、北を遙に眺むれば、冬の景色とうちみえて、白かねついぢをおつきやる。ついぢのうへにまつ植ゑて、松に白ゆきふりかゝる。ハンヤ、誠に冬のけしきとは見えにけり〳〵。

## ちよ女

○肥前の國の内山は、さえた在所でなけれども、目につく千代女は只ひとり。うしろは牡丹に前は梅、裾にちらしが花づくし、千代女のめしたるかたびらは、ヤーラ千代女みやげは何々か。もと結ひ十八花ふうぞ、髪のかみまで切り添へて、夫れで千代女のお手切らず。あすは千代女の船が出る。暇乞ひには出たれども、あまり涙に茂くして、やり目やり目のいとまごひ、目やりきまりの暇乞ひ。

○ハンヤ、肥後の國、ヤーラ、白がねの門の扉を押し開き、ヤーラ、見事の柄の小姓かな。とはさむらひを見てやれ

ば、うつぼ千こう弓千挺、見事の柄の小姓かな。なかさむらひを見てやれば、飾りたてたる槍の五萬ほ。五萬ほのやりのかずさへあらば、くま八つ城はこれの小姓かな。みまやの體を見てやれば、飾りたてたるめいを七ひき、七ひきの中に立ちたる黑のつる、せぜうまゐれとまへかきぞする〳〵。

## 四國舟

○ハンヤ、四國の船々沖をば漕がで渚こぐ。靜におせや、仲乘りの船頭どの。足がしどろで、ろか〳〵ろのろでおうされぬ。ハンヤ、さかひ船々おきをば漕がで渚こぐ、靜におせよ、仲乘りの船頭どの。足がしどろでろかろで〳〵おーされぬ。

## わく絲

○ハンヤ、我に物をや思はする。わくの絲いつくる〳〵と、ハンヤ、まちつれど、まだ目に見えぬ。うらめしの我身や。

○ハンヤ、我に物をや思はする。櫻をないつよ〳〵と、ハンヤ、待ちつれど、まだ目に見えぬ、うらめしの我身や。

## 松の風

○ハンヤ、松の風にゆめさませ。夢にさへ見ぬ人になげくなよ。ハンヤ、松の風に夢さます、ながらへて思ふ人に添はれんな、ヒヨ、なか〳〵に身も消えよ消えよ。

## たちは習へ

○ハンヤ、太刀は習へども、物の言はれぬ。ふじや淺間のけふりとも、たちゆけど君ゆゑならば惜しからぬ。

○ハンヤ、たちは習へども、物の言はれぬ。津の國の浪花の煙とともに、せにふして、かへるあしたの袖。

## つゆの間

○ハンヤ、露のまよ、たなびけ君。つらき心を振りすてゝ、ハンヤ、引かば靡け、君くる頃は、ハンヤ、露のまよ、たなびけ君。引けば靡けよ絲すゝき、ハンヤ、枯穗になれば



## 吉井冷泉歌

○一つなほれば廣がる噂、(詞)「一方ならぬ神明の御利生厚き黃金湯の」、きかぬ病はなき故に、人は日に日に、ヤーレコラ、貴船森。

○二つふしぎの病がなほる。(詞)「夫婦のなかに子がなくば、早ばやごんせ、ふたり連れ」。すぐれぬお方も浴る内に、工合吉井の、ヤーレコラ、中村に。

○三つ三つ子のたいどく類や、(詞)「分けてのほり目斬りきづも、不思議の現があるほどに、」來て見なさんせ湯の場所は、海と山とを、ヤレコラ、右左。

○四つよこく(他國)に噂がありて、(詞)「深き病の人々は、尋ねきぶねの黃金湯に、」入りて癒りて嬉しさに、心浮き嶽、ヤーレコラ、氣はとんぼう。

○五つ妹脊の仲睦しう、(詞)「親子まめにと思ふなら、保養にごんせ中村に、」めでたき黃金の湯をかかり、命長きが、ヤーレコラ、怡土の濱。

○六つ昔の言ひ習はせと、(詞)「今度夢想のわりふ故、堀り出したる黃金湯は、」其名も高き浮嶽の、麓の吉井、ヤーレコラ、中村に。

○七つ泣く〳〵來る病人も、(詞)「風呂は打たせや湯壺にて、」つめて入りあひ居る時は、如何に難儀をする人も、やがて笑顏の、ヤーレコラ、吉井村。

○八つ宿も新たに出來て、(詞)「旅籠木賃はお氣まかせ、それでお金がきぶねもり、」黃金花さく山吹の、色をふき出す、ヤーレコラ、其の湯に。

○九つ苦をおこして見れば、(詞)「下はかゞやく黃金石、吹き出す其湯は萬病の、」なほる病のかずかずは、怡土の濱邊の、ヤーコラ、砂の數。

○十尊き我が日の本の、(詞)「榮え治まるしるしには、こゝに噴き出す黃金湯の、」汲めども盡きぬ幸ひを、分けて貰ひに、ヤーレコラ、木船森。

(系嶋郡)

## やつちよこ節替歌

筑前の儒者龜井家の塾生が戯作に係るものにして、現今之を唱ふるもの殆んど稀なり。蓋し七八十年前のも

のならんか。歌は左傳の人物を詠ぜり。

○晉侯有莘の墟に登り曰く、少長有レ禮可レ用也、七百乘、ヤツチョコ、韞韝鞅韠ちや。

○衞の野人に食を乞ふ。重耳、天の賜と載せて戴く塊を、ヤツチョコ、舅犯ぢや。

○吾が墓には檟を樹へよ。檟の木、檟の木太ると國の亡ぶる、一時ぢや。ヤツチョコ、忠臣ぢや。（伍子胥）

○武夫が力めて原に拘へ婦人、婦人誓にして國に免すと唾はく。ヤツチョコ、軍實墜いた。（先軫）

○鎧ぬぎすて註をする、左傳。師やめても武斷心はまだやまぬ。ヤツチョコ、傳癖ぢや。（杜豫）

○是は左傳の作り替へ、歌のー、歌の文句は七つ讀せにや解りやせぬ、ヤツチョコ、解りやせぬ。

## えんとこ節替歌

○彼の山に髣髴乎たるは、月か星か螢か。月なーらば拜しませうか。螢火なーらば、掌とこ焉たり焉たり焉。

## 姉さんまちまち替歌

○足下に待す待す蚊帳外、蚊に食せられ、五更の鐘の報ずるまで、僕不レ關焉。

○足下と知らずに閉戸した。憐すべし屋露點々身を汚す、余不レ知矣。

（福岡市）



# 大分縣

## 萬歳樂

○一々億々彌勒の出世、三夜の曉、濱のまさごが峯に登りて、大磐石岩をかたい故郷、やはねをや寶の君千代迄、千秋萬歳とほめたてまつる。白ぎがたーろー五萬の城しいの山をおし頂き、伏し拜んで候も誠に目出たう候ひける。春景は面白や。年の始めの年男、ゆづり葉をくはへて、五葉の松を手に持つて、らいしやーは太刀を佩いて、がくやのはちゞみの刀を腰にさいて、さて南殿についたつて、源氏が門を推し開き、おし拜んで候も、誠に目出たう候ひける。法華經は一部八卷、二十八法文字の並びは、六萬九千三百八十餘字が中にも、さてこそ御祝、殿の御屋敷をほめ奉つて、御祝には萬歳〳〵〳〵〳〵〳〵樂よと、舞つたる其舞なる。昔は後白川法皇の御時、座上や宰相大臣、春日の社に集り給ひて、萬歳だぶりかぶりなされて、南殿何んでが小坪につる〳〵つゝ立ち給へば、是れ又目出たし。（萬歳）扨又浮世の寶を申せば、一には御命、二に又福德、三には幸ひ、世に又御繁昌の寶は、金銀ぜにかね、田地田畑、御武家の寶は、武具馬具弓矢に鐵鉋、御百姓の寶は田畑牛馬なんどよ。（萬歳）馬ではどこ馬、日向や薩摩の名馬が、あき方のかたより耳をば振り立て、鼻をばいからし、ひん〳〵ひーんと御坐れば、猶又目出たし。（萬歳）牛では何處牛、五島か平戸の名牛、角をばふりたて、もん〳〵もーんと御坐れば、又々目出たし。（萬歳）一家の寶は祖父こそ寶よ、祖母こそ寶よ、父こそ寶よ、母こそ寶よ、坊こそ寶よ、孃こそ寶よ、孫こそ寶よ。一番かはいゝかゝこそ寶よ。其歳御家に難なくひがなく、恙なければ、猶また目出たし。（萬歳）さきではどこ〳〵〳〵、頭ではけさき、羽織でぶつさき、刀できつさき、御槍の穂のさき、國で申せば肥前の長崎、豐後の鶴崎、薩摩でほけさき、高田のまつさき、鋤さき鍬さき、御家の坪さき庭さき。野菜にとつては大根に人參、牛蒡にわけぎにちもとに蒟蒻、おりが樣なぼぼんの

ぼうぶら壽命の長いが、お萬にお千に太郎ぐ（ぐは、が の意）か、次郎ぐか、、春尻のおりがか、、なんどがようこれや、をかしや。尻をばからけて、山田も迫田もちよぼちよぼちよほりと植ゑたる、其の田の實入りのよいこと、一町で一萬、二町で二萬の、秋上げなさるゝ大福長者と、諸人に仰がれ、鶴は千年、龜は萬年、祝うて早稻植ゑ、やれやれ目出たし、今年の稻はやへ穗が八石、むけ四郎どん、もーよかろ權平どん、もーいーかや、日よりやいー手は揃ふなり、五丁八反六畝六歩、おまんがまつほり迄、ちよほちよほ、植ゑて仕舞うた。（下毛郡）

## 大神樂

○謹上再拜々々と祓ひ淸め奉る、上はほんでん下は帝釋閻魔法王、五道の冥官なん界、下界の內には伊勢は神明天照皇太神宮、天の岩戸にこもらせ給へば、日本な常夜の闇とならしめ給ふ。伊弉諾伊裝册尊之を悲しみ、天に向ひ地に向ひ、日に代り夜に代り、萬々役々に守らせ給へば、辰の一天空より貴人な天下り、御幣三本さし卸し、白き御幣は神と名をつけ、赤きは人界、黑きは三界、き中ぞ眷族、けだものと名をつけ、三本の御幣を岩戸の前に納め給ひ、三日三夜七日七夜の御神樂を、岩戸の前にてあげさせ給へば、日本はあきらかにならしめ給ふ。それより末社が立ち始まりて、內宮の御宮四十末社、外宮の末社八十末社、合せて百二十末社、中にも貴き荒御神と祝はれ給ふ、雨の宮風の宮、月よみ日よみ、北にさいほう高野の權現、磯部の權現、川島とさがりては、竹生島の辨財天、愛宕に鞍馬の大天狗、坂本山では伊王權現、祇園牛頭天王、九州の地に渡りては、日本第一宇佐八幡、幷に大貞八幡薦社、彦山三社大權現、求菩提は二社權現、一社はこもり水とかや、松野檜原等覺寺山、椎田に綱敷天滿宮、門司にくだりてはめかりの明神、筑前の國では香椎八幡、宇美八幡、沖のをんごー鹿大明神、宰府は自在天滿宮、薩摩の國では霧島法華崎山、日向の國では生目八幡、鵜戸が岩屋と申するは、鷓鴣草葺不合尊、幷に天の岩戸は太神宮の御本社なり。荒神高神一社も殘らず、今月今日只今此處に勸請申し奉り、てんけいには火事を



逃れ、ばんがいには惡事を逃れ、火難水難盜賊盜難、やもーやく難、七つの災難が降り來るとも、この神々の御方便の功力を以て、多方千里が外に拂ひのけ、御家繁昌春の御祈禱。（下毛郡）

## 田植歌

○千代萩のたけなはごてんのにんかずは、鶴千代、千松、政岡おきのゐかこまち、やしをのね、さかいごぜん。（人數）

○とこの間に生けし花をばごらんじよ。たとへ根もとれきらるとも、たがひの心に水をあげ、花が咲くではないかいな。

草取、臼挽、粉挽等にもうたはる。（宇佐郡）

## 盆踊歌

○先の大夫さんな京都な江戸な。ヤレショ、江戸ぢや見なれぬ、京都ではない。ハーヤソレサ。

○娘島田にや蝶々（てふ〳〵）がとまる。ドツコイ〳〵、とまるはずぢやも花ぢやもの。ソレソレー、ヤートヤンソレサ。



○猿丸大夫は、ヨツショイ〳〵、奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の、サヨイヨイヨイヨイヨイヨナー、サトツチン、チンリン、トツチン、チンリン、さるまる大夫は、チリリン、奥山の紅葉ふみわけ鳴く鹿の、アラヨイ……ヨイヤナ。

○東山からさえ出づる月は、ヤレサンサ、車の火の如し。東山から〳〵さえでる月は、アーヤレサンサク、車のわの如く。コチャ〳〵、みるがほんくるまの、サンササンサ、くるまのわの如く。

○エーヘーわしはさいきのざるぼーせがれ、ざるはぼけざる、さかなはくされ、ヨヤヨイ、ざるはぼけざる、さかなはくされ、エヘヘー、ざるはぼけざる、さかなはくされ、ヘー、ざるはぼけざる、さかなはくされ。ハーヨイトマカセノヨヤヨイ。

○あねのみやきぬ、妹のしのぶ、中に立ちたる志賀團七。サマヨイサノサ、ヨヤサノサ。

○うすにな、ドツコイ、おこめをいーれ、サマヨヤサノヨイ〳〵、ごーしりーな、ドツコイ、からざが、サマヨヤ

サノヨイ〳〵、こーざれゆくえー。

○さまよーあれ見よ御嶽に、ヨイトナー〳〵、みかん賣子があさまー火をまとほす。ヤーソレヤーソレサ。

○あれせにやならぬ。せにやならぬ、ヨイ〳〵、一つののこのせんたくを。ソレ〳〵、ヤートヤンソレサ。

○はやのかんべが、し、打ちにや、みのきてかさきててつほを持ち、一谷越ゆれどし、や居らぬ、二谷越ゆれどし、や居らぬ、三國峠といふ峠、あれに見ゆるはししかいな。はやごかへして二つ玉、二つ玉にて打ち止めな。火なはの火をふり、いで見れば、し、と思へば旅の客、きつけはないかとふところを、さぐりあてたるしまさいふ、金なら凡そ四五十兩、死したるそちはいらぬ金、はたはなければならぬ金、かしてなーアラくれいーとの、ヤレたたんでーをさめ。キニヤ〳〵、ヤートコセーナンデモセー。

○さーどーで弓ひきや白杵がもとよ。白杵もとなら「さいき」がうらよ。

○イヤ大夫さんちよととめた。ソレ西行法師のほんさんが、四國西國廻るとき、豆腐の四角にけつまづき、こんにやく小骨を足にたて、れんぎでほれどもほれはせず、杓子でこぬれどまだぬけぬ。いろ〳〵お醫者にかけたれど、藥のきゝめのなきために、山で取つた貝がらと、磯邊でとつた松むしと、氷のくろやきとかきまぜて、馬の角にて、エヘンヘン、まずーれや。ハリヤリヤコリヤリヤアレワイセー。

（直入郡）



## 念佛和賛（鹿ヶ谷）

極樂淨土

○極樂淨土に願かけて、助け給へや彌陀如來。

人間和賛

○人間僅か五十年、朝咲く花のあさがほの、露の命を持つ程に、一時の後生を願ふべし。

天竺和賛

○是より空の天竺の、彌陀釋迦川と申せしに、ぐぜいの舟をうかしたて、舟は白銀ろは黄金六字の名號に帆をまいて、觀音勢至がかぢをとり、地藏ほさつがせんどして、西へ西へと急がるゝ。

花田和賛

○そも〳〵都のかたはらに、るゐ子と申せし女人あり。世繼に男子を設けしが、無情の風にさそはれて、時もまたずしやばを立つ。死すれば野原におくりすて、野邊の煙となりぬれば、七日七日が七七日、三十五日も打ち過ぎて、四十九日にあたる日は、あすは花園寺まゐり、寺のごえんに腰をかけ、つく〴〵と花をながむれば、開けし花は散りもせで、つぼみの花の散るを見て、若しや我子もあのとほり、吾子がかはいと思ふなら、地藏ほさつを念ずべし。

（宇佐郡）

## 米屋一米（六拍子）

○國は筑前博多の町に、米屋一米と云ふ町人は、もとは米屋で威勢な暮し、今は世に落ち哀れな事よ。ここに不思議なお六部樣よ。そこで六部が申せし事にや、若し此の家の御亭主樣よ。今宵一夜の宿かしたもれ。そこで一米が申せし事にや、宿を貸すのはいとやすけれど、ごだりませんよお六部樣よ。そこで六部が申せし事にや、亭主悔むな浮世は車、命長くば福にも出逢ふ。負ひのげだんを早取り出でゝ、數多小判を早抽き出でて、米がないなら米買うてござれ。味噌が無いなら味噌買てござれ。今宵一夜は長者の暮し、明けの朝にと早なりぬれば、知らん顔して夫婦の者が、そこで六部が申せし事にや、一米そなたに寶をやろが、寶やるのは外ではないが、寶やるのは打出の小槌、米がないなら米ぢやと打たれ、錢がないなら錢ぢやと打たれ。そこで一米が申せし事にや、六部六部はまま多けれど、こんな六部は今度が始め、そこで六部が申せし事にや、私を唯なる六部と見たか。私は唯なる六部ぢやないぞ。私は高野の弘法大師、いうて六部は消えうせまし た。一米口説は先づこれ迄よ。（宇佐郡）



## 唐芋踊

○これから暫く唐芋やろよ。（囃）「サノサー」。うらべのー唐ーいむ（囃）唐いーむ踊らうえ。（囃）浦邊の唐芋踊や、踊る片手に稗餅こぶる。こぶる稗餅や蟻が運ぶ。餅も運

べば踊も運ぶ、踊も大分(たいぶん)運うだ。　（宇佐郡）

## まつかせ踊

○まかせー、ヨーまかせをー、しばらくーやらうなー、ソレマツカセ〳〵、まかせまかせを、ソーレヤ、しーばらくーやらうなー。ヤートハリハリ、ヤーノエーエー。

○こひしーこがはーの、うの鳥ゆー見(み)やれ、ハソレマツカセマカセ、あゆをくはへて、ソーリヤ、ヤーレ、せーをのーぼる。ヤートハリハリ、ヤーノエーエー。（宇佐郡）

○エー、どなたも、ヨイ〳〵、まつかせをやらうな。ドツコイ〳〵、いやさやらねば、ノヤー、夜が明ける。ヤートハリ〳〵ヤヤノエー。

○今夜行くぞと、ヨイ〳〵、目で知らすれば、ドツコイ〳〵、竹にやつぎほで、ノヤー、木がつかぬ。ヤートハリ〳〵ヤヤノエー。（西國東郡）

## れそ踊

○れそを踊るならしなよく踊れ。サヨイヨイ、れそは、ウンドスコイドスコイ、踊りよい品がよい。レソーヤ、レソーヤト、ヤンソレサ。

○中津こいの丸米屋のおやへ、サヨイヨイ、廣津、ドスコイドスコイ、小川に身をはむる。レソーヤ、レソーヤト、ヤンソレサ。

○私とお前は道ばた小梅、サヨイヨイ、ならぬ、ドスコイドスコイ、さきから人がしる。レソーヤ、レソーヤト、ヤンソレサ。（宇佐郡）

○（音頭）イヤサ、皆さん踊ろぢやないか。コラサノサ（囃）アー、ヨイトコ、ドツコイ、」アーそぢやな、踊ろぢやないか。ソーレーソレーヤートヤンソレサ。（西國東郡）

## 六調子

○（音頭）ヨー、輪にやなれ。片輪にや、（囃）「ヨーヤナ、ヨヤナー、」片輪にやなるな。アーショイ〳〵。（西國東郡）



## 三拍子

○（音頭）エー、かんころ餅受取りました。（囃）「ヨヤセ〳〵。」アー、そぢや〳〵。ソーラヨイヤ。　（西國東郡）

○よんべ山がのをどりを見たら、おほこかたけて鎌腰さいて、踊るかた手に稗餅こぶる、こぶる稗餅ぱら〳〵あゆる。あゆるそばからいやり(蟻)が運ぶ。運ぶいやりは達者ないやり、いやりやなにする雪の下の覺悟。　（速見郡）

## やんそれさ

○（音頭）イヤサ、是からやんそれさをやろではないか。（囃）「オトショイ〳〵。」アーそぢや〳〵、やろではないか。アーヤン、ソレー、ヤンソレサ。　（西國東郡）

## さんごや

○（音頭）エー、さんごーやー、四十目の相撲取樣を見やれや。（囃）アラドスコイ〳〵。　（西國東郡）

## 相撲取踊

○（音頭）エー、豆腐の口說をやるなれば、私程因果な者はない。（囃）「オイ〳〵、」九丁の箱にぞつめられて、上から重石かけられて、一丁二丁と切り賣られ。友達ないかと尋ぬれば、「オイ〳〵、」友等お花とあるけれど、一文二文のつかみ賣り、「オイ〳〵、」親はないかと尋ねれば、親は野山のエー豆の木よー。オショカ、ショカ、ショイ。　（西國東郡）

## それ踊

○これーかーら、しばらーくー、それーを踊らう。（囃）ソレーヤ、ソレーヤ、ヤトヤー、ヤトヤー。

○それをの、踊るなーら品よく踊れ、品のよいのをー嫁にーとらうよ。（囃同上）（入れ子）一寸私(わたし)が一番入れませうか。（囃）「入れませうか、」私の隣の其隣、（囃）「其隣」（凡て囃には終の一句を用ゆ以下同じ）一軒隣の其の側に、やんそれ坊主があつたけな。やんそれ坊主は荒坊主、米の飯を七しようけ、粟の飯を七しようけ、小麥の餅を七しようけ、殘さず餘さずやりつけた。それでも足らぬと云ひまして、八反畑の大根を根

ながら、薬ながら喰つてしもた。鹽氣がほしいと云ふ時は、尾永井の鹽を十五駄、豪家の鹽を十五駄、水がのみたいと云ふ時は彌々（下毛郡山名）の御許につんばつて、乙女の浦を飲み干した。（それ節）これーも七ーつーの、入れ子の内よ。（囃）ソレヤー〳〵、ヤトヤーヤトヤー、わたーしの入れー子ーは、これーでーおーしまーひ、（噺同前）、そろうた〳〵よ踊子がそろうた。（囃）誰れか音頭を賴む。（囃）私の音頭はこれかぎり。（囃）　（宇佐郡）

## いろは口說

○國を申さば日向の國の、古傑和尙の作れしくどき、四十八字のいろはのくどき、いとけなきをば愛して通せ。老は敬へ無禮をするな。腹がたつとも過言をいふな。にくみうくるも我心から、ほめてもらふも自慢をするな。隔てなきをもゐんりよな思へ。隣り近所に不忠をするな。近い中にも亦かきをいよ。理屈あるともみなまぢや云ふな。主によつては大事がござる。流涙るらうものをも愛して通せ。親につねぐ〳〵不孝をするな。若い時分のその道々は、家事大事と心にかけよ。よしもあしきも人事いふな。例へたかきも又卑しきも、禮儀正しく此の世を渡れ。粗略のものぢやといはれぬやうに、常の身持が大事ぢやほどに、ねてもさめてもたゞ正直に、なにがないとて世を恨むるな。樂なくらしはどこでもないぞ。むくい〳〵でひんぷくをする。恨みかひなく此の世を渡れ。今のなんきを思はゞ此に、後の世はまたうとくにくらす、終りはこねば我身はしれぬ。苦勞する身が富貴の本よ。役をするなら正當にさばけ。まなこかすめてどんよくすれば、け人な地獄で此世でおつる。ふしやうふらちのそのあるときは、こゝに一つの恨みがござる。榮耀する身が貧する本よ。手前よいとて人事いふな。あしきことをば眞似にもするな。酒を飲むなら内ばでのみやれ。聞いて樂しめ世界のことを。油斷するのがおちどの本よ。めつたむしやうに我欲をすれば、身をばほろほす人ほろほすよ。眞の心を此世でとれば、榮耀えい花は冥土へござる。日頃心をつくして見れば、ものをいはねば口おほどもの、世界しらねば此世を知らざる奴よ。すいたことをば尋ねて習へ、京も田舍もみなおしなべて、上下貴賤のへだてをするな。いちに神明諸佛を守れ。二世の旅出に赴くならば、三世諸佛の誓をうけて、死出の山路を赴くよりも、五字の如來の悟りをうけて、六字如來の悟をひらけ、しちくじやうぐん極樂世界、はつくとんしのじよげいのみちも、九ほん淨土におめぐりありて、十方世界を難なく通れ。千秋萬歲。　（西國東郡）

## 二つ拍子

○（音頭）昔京都が奈良なる時にや、（踊子）サノサイ、サノサイ、（頭）大政大臣鎌足公よね。ヤーンソレソレ、ヤンソレサ。（頭）蘇我の大臣蝦夷と御坐る。（子）サノサイ、サノサイ、（頭）御名を貰ひしげんじよう太郎、（子）ヤーンソレ、ヤンソレサ、（頭）今の假名はしば六さんと、（子）サノサイ、サノサイ、（頭）それが女房にやおきじというて。（子）ヤーンソレソレ、ヤンソレナ。（以下反復するなり）　（西國東郡）

## 六調子

大分縣　盆踊歌

○（頭）國は奥州巴の橋で、（子）サノヨイ、サノヨイ、（頭）敵打ちたる由來を聞くに、（子）ヨーイソーリヤ、ヨヤヨイ、（頭）頃はかんぽー四年の事よ。（子）サノヨイ、サノヨイ、（頭）南部殿樣御家中に於て、（子）ヨーイソーリヤ、ヨヤヨイ。（以下反復）　（西國東郡）

## しんめい口說

○一つしんめい矢口の渡し、二つふなよのとんべゑこそは、三つみのせの六郎殿よ、四つよしみねうてなをつれて、あちらこちらとかたきの中を、五つ稻荷の社の中に、入れてかこまふ道念坊主、六つ娘のお舟がこゝろ、七つ難なく我君樣よ、八つ矢口の渡しにむかへ、九つ此の川そこに、沈みたまひし兄義興と、十よ頓生菩提のために。　（西國東郡）

## みつぼし踊

○肥後の熊本、ソーリヤヨーイヨ、なんごの手永、ヨイヤセ〳〵、小村申さばソーリヤヨイヨ、杉山村にや、ヨイヤセ〳〵、つかさ千石、ソーリヤヨーイヨ、庄屋がござる。

ヨイヤセ〳〵。庄屋其か名を、ソーリヤヨイヨ　語るぞならば、ヨイヤセ〳〵、伊兵衛惣助、ソーリヤヨーイヨ、はんのじゆ殿と、ヨイヤセ〳〵、小供ばかりが、ソーリヤヨーイヨ、兄弟ござる。ヨイヤセ〳〵、して又、ソーリヤヨーイヨ、うとくにやくらす。ヨイヤセ〳〵。

（西國東郡）

## 牛若丸

○一で白木の御舟作り、二では錦の帆をまき揚げて、三でさづなを手繩にとりて、四では島々早乘り行きて、五では五畿内攝津が浦よ、六で艫舵を一度に揃へ、七で白木の御帆柱よ、八で箱根の權現樣よ、九では鞍馬のゑい山のこと、奥州日の本常盤が前にや、小供ばかりが三人ござる。兄の今若中乙若で、弟牛若年六歳で、明けて七歳鞍馬にや登る。鞍馬登りて權現樣にや。申し聞かんせ權現樣よ。父の敵が討ちたい程にや、弓矢劍術軍の道を、教へ下ぬせ權現樣よ。（下略）

（西國東郡）

## 庭借歌

○東西南北靜まり給へ。抑も今晩の踊りといゝば、先達亡者へ手向の爲、世を去りて、めいどの旅に趣けば、佛果成佛うたがひは無けれども、昔佛ほたいせの其時に、目蓮尊者のおん母君へ、長く無限の苦を受け給ひしが、目蓮尊者の供養に依つて、天上の果を得給ひしと聞く。賤山がつの吾々が、目蓮尊者の古禮を念じ、珍しからぬ、ばんば踊、一踊をどらばと存じ候。御庭の御所望、如何〳〵。

（速見郡）

## 同返歌

○こは事がましき。御仰せにや及ぶべき。誠にしやばの緣早や盡きて、めい土の旅に趣けば、佛果成佛疑ひは無けれども、なき跡の弔ひとして、御踊り催すこと、庭むしは見苦しくは存じ候者、何より安き所望かな。早々庭に渡り候へ。

（速見郡）

## 後生歌

○一つとや、一度は死なねばならぬぞえ。皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。二つとや、二たび歸らぬこのしやばに、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。三つとや、未來の土產に御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。四つとや、えうじやもきじん（幼者貴人）も御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。五つとや、何時まで此の世にをりとても、佛になりたけや御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。六つとや、よ人が無理をいふとても、佛になりたけや御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。七つとや、何ほど此の世にをりとても、一度は死なねばならぬぞへ。皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。八つとや、容赦はないぞへ御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。九つとや、之ほど尊い御念佛。皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。十とや、西はさいはうみだの國、皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。十一とや、西方淨土に赴けば。皆さん後生を願はんせ。なむあみだー。

（速見郡）

## やすなくぞき

大分縣　盆踊歌

○あしや道滿大内鑑（どうまんおうちかがみ）、やすな葛の葉やかんの身なら、惡衞門から身は狩り出され、やすなさんから身は助けられ、ご恩送りに女房となりて、まるく添うたが十年あまり、あひにどう次と云ふ子が出來た。頃は三月上旬頃に、花見頃ぢやと皆さんまゐる。花に心のうつりし折りに、子から姿を見とられました。どうで此の屋に居る事出來ん。早くしのだに歸らにやならん。戀しがるなら尋ねてござれ。ぬしは篠田の森に住む。障子裏にかき置きなさる。之がくぞきの流しでござる。

（北海部郡）

## 比丘尼くぞき

○肥後の熊本竹田の城下、竹田本町山寺ござる、寺の和尚さんにや比丘尼でござる。比丘尼あたまを丸髷結うて、銀の簪持たんきささん。植ゑん茄子（なすび）が千本ござ〳〵。茄子を手なしが掬（むし）ぎとりました。目くらさんから、それみつけられ、いざりさんから追ひつけられた。之がくぞきの流しでござる。

（北海部郡）

大分縣　亥子歌　粉挽歌　石搗歌

## 亥子歌

陰暦十月上の亥の日、子供は藁の束を作り、村落中をばたり〳〵と叩き廻る。其の際に歌はる。

○亥の子の餅搗かんもなー、鬼う生め蛇を生め、角の生えた子を生め。ウンウエー、亥の子さんと云ふ人は、生竹うひき割つて褌にかいて、しきしいで、それでも、お尻は痛まんな。向の山には火があがる。月か螢か山下坊主の寢た五郎(處カ)か。ウンウエー。　（北海部郡）

## 粉挽歌

○一つひよこは、やねんなこ、やねんなこ（中）祝うた。二つ船子は、船そく祝うた。三つみゝづは、土のそく祝うた。四つ嫁女(よめご)は、しうとばそしうとばそ祝うた。五ついなりさま、小豆飯(あづきめし)、あづきめしゆ祝うた。六つむぎめし鳥、むぎめしゆ、麥飯祝うた。七つなりかみさま、どろんばちゆ、どろんばちゆ祝うた。八つやきめしや、なべんそく、なべんそく祝うた。九つでは紺屋(こうや)が、かたいと、かたいと祝うた。十でとのさま、おくらを、おくらを祝うた。



○ごんごせえ〳〵、ソレヤ、一升すれなう、ごんごせえ〳〵、コレヤ〳〵、やー二升すれなう、ごんごせえ〳〵、コレヤ〳〵。

○うすがすりたむので、けんどやをでたら、うまれついたかまんぢゆやに。　（西國東郡）

## やんれしよ節

○とし〳〵、コラセ、寺山御庄屋の娘、ヤツテーサンノ、今日は御出で、日がよい。湯をかけませう。ヤンレショ、ヤンレショ。　（東國東郡）

## 石搗歌

○私しが出しますはゞかりながら、歌の文句はしらねども。一家の始まりや大國柱。一ですわるが大黑樣よ、二ですわるがお蛭子樣よ、三ですわるがゆうろ神樣よ、四ですわるがほてい樣よ、五ですわるが辨天樣よ、六ですわるが福祿樣よ、七ですわるが毘沙門樣よ。國の始りや大和の國よ、町の始りや紀伊紀の町よ、歌の始りや山崎山三、山三馬子ぶしや地は法華經、法華經八卷讀み立てなさる、歌は馬子ぶし山人の歌よ。

## をさめの歌

○今日は御苦勞支への竹よ。次に暇出すどん木でござる。長い今日の日をお苦勞ながら、どうぞどなたも綱主樣よ。千秋萬ぜい思事叶うた。末は鶴龜五葉の松よ。千秋萬歲思事叶うた。歌ををさめる今こゝで。　（下毛郡）

## 木遣歌

○これほどの大木が、若い衆の勢力で飛(と)んできた。てこの手のかい立てで、大木がういてきた。山口のおとめさん目がたい、エンヤラヤラ、ヨイシヨ、ガンショ、ヨイサ、カンサ、エンヤラエー、瓢箪の川流れ、ずら〳〵と其の拍子、も一つだ。　（速見郡）

## 舟歌

○おいせ山から下ながむれば、やながの城下を目の下に、東に見えるは青木山、西に見えるは關の明神、あらたかに中にしよんぼりうしろ山見える。あれはいなばさんやの一のからうやおうみさん、おたてなされた城ぢやもの。

○萬代と君を祝ふの松が枝や、幾代の春を重ぬらん。されば古歌にも住吉の、松と詠ぜし言の葉も、思ひつゞけて眺むれば、きみをいなば神と君との道直に、風ものどけきとよの海、浪のひゞきも靜にて。ヤラン〳〵。（下毛郡）

## ちりりん節　（一名きじのめんどり）

○雉子のめんどりや躑躅がもとで、妻よ戀ひしとほろゝうつ。（囃）よこ町(まち)權太かたちんば、それでもせきだは十五足。チリリン、サトチリリン。　（玖珠郡）

## 都地節

○朽網(くたみ)名物あみだが池に、小かきつばたに、ふきねせり、椎茸つゝじに、しやくなんけ、山の城ではねば柳、一目に見おろす蕎麥の花、嵯峨の天皇御陵の、さつばりおされぬ菊桐の、花の都ぢやないかいな。

○ぼらの肴で飲むさゝは、都ではやる保命酒、鶴のむすんだまさごえん、むすんでとけぬ夫婦縁、こんれいさかづきは松に鶴。

○正月の二日の夜の初夢に、白い鼠が三つづれに、又三つづれに六つづれに、小判くはへてかねはこぶ。

○四海浪風治まる御代は、心しづめて身ををさむれば、國もをさまるときつかぜ。

○縁の初めは出雲の社、年は三五のみだれ髪、そよとふきくる神風は、それはまたどーした縁ぢやいな。

○春永絲のいかのぼり、落つる處が住處なり。りやうの親様大切に、つれそふ人はなほ大事、お村のお若い衆ところほふーたのみます。

（直入郡）

## よいやな節

○朽網名物七里田の湯、かまちゆまくらに前だけながめ、花の七里田ぢやないかいな。ヨイヤナー。

○蝶や花やとそだてたむすめ、こよひあなたにあげますからは、萬事よろしくたのみます。



○蝶や花やとそだてたむすめ、そめてあげます今むらさきに、かはらぬやうにたのみます。

○君のもたしやるきせるのふくろ、うらはもみ、おもてはこいちや、見ればこひます思ひます。

○花になりたや梅の花に、あなた御庭にうゑたてられて、散りて御袖にまかりたい。

○あなたのくろかみ一もとほしや。紙につゝんでわがみにそへて、此の世だいしよのまもりがみ。

○わしは谷川そこいくしみづ、うへにやみえねどながれはつよい。わしの心をくんで知れ。

○宮の拜殿腰うちかけて、たばこすひつけかんじて見れば、どーであなたがよいわいな。

○さてもみごとなまへだけつゝじ、枝はゆかわじ、葉は市村に、花は竹田のぬめりせに。

○田舍ものぢやとおなぶりやするな。籔に花さく田舍も名所、ところ相應の花もさく。

○今夜こなたのお取持ちは、金のしまだい黄金の銚子、下さる御酒は保命酒。

○貰ひうけたる花嫁様は、そーそにしませぬ大事にします。氣づかひなさるな親御様。

○あなた御近處お隣さうな。梅のわか木をうゑおきました。萬事よろしく頼みます。

○臺のまはりにから菊うゑて、それに花さき實のなるまでは、たがひにこゝろをかはすまい。

○梅の若木を植ゑおくからは。もしも若木でちりゆくならば、おさへて下され八重ざくら。

○千秋萬歳思ふこと叶うた。末は鶴龜五葉松。

○いとしかはいと育てた娘、こよひこなたに下さるからは、さぞや御里は淋しからう。

○さても見事な祖母山つゝじ、花は南郷に、葉は熊本に、枝は野しりの川上に。

○君は御嶽の白雪さまよ。わしはそのすそ流の水よ。とけてきなされ流れ合ふ。

○君はきれいなきん裡の牡丹、わしは野菊でおよびはないが、垣ごしながめて日をくらす。

○思ひまするぞ、あなたのことを。山で木の數、かやの數、千里が濱の砂の數。

○砂の數とは愚な事よ。天地では世界の人の數。

○人の數とは愚なことよ。妾が思ふは世界の田のかむ〳〵、稻穗の數思ふ。

○わしは奥山こくぶの梅よ。またはわきでこくばる斗り、花さく春をまたしやんせ。

○思ひそめ川渡らにやならぬ。深い淺いの瀬をふみわけて渡りかゝりてものあんじ。

（直入郡）

## 白熊歌

### 宮の立

○鶴がをかでの、しゝん殿、あまたかぶとのあるなかで、どれ義貞のかぶとやら、かほよが、目きゝではないかいな。ヨイサヨイサコリヤマタドースルナ。國はどこぢやと、こまかに聞けば。

後日本宮の立

○御先おともで、かへります。二番のやつこが、もんでんの、かみをいさめて、かへります。
○音に名高きはまの宮、御出御歸りゆる〳〵と、御供申す眞物は、作るこう作はく迄末の末迄繁昌に、守り下さる有難や。

### 門口の立

○柳ばの流の末はいづくとも、まつもつきせぬ思ひなり。品川近くのおきつさん、花の都は、お江戸ぞえ。
○宵の管絃の笛のとき、のちにぞあれし淺言葉、今生後生の形見かえ、來世では又末長う。
○なみだにひたす袖の海、引くしほ時とひくいきは、知死期ごと見えてたえはてる。熊谷さんはばうぜんと、どちらを見てもつぼみかえ、花の都の春よりも、今玉しか天降る。
○ひなに降りて無きあとを、とふ人もなき須磨の浦、なみ〳〵ならぬ人々の、なりはつる身のいたはしや。
○ひたんの涙にくれけるが、ぜひもなく〳〵玉織が、おんしがいをも取りをさめ、こまをいさめて歸ります。



○かゝみな月とゆふだちは、はりまをここに松のかげ、向うよりくる、小灯ちん、あれば昔のゆみはりで、やかち先さんならまちなされ。ともしび、消さじぬらさじと、かつぱのすそに、おく雨か、しのぎで走る夜の道、勘平立ち寄り火を一つ。
○曉諸方打見れば、紫横雲引き渡り、そのよこぐもの其上に、るいー申す女立ち。
○こくどの事を傳ゆれば、神大切にする人は、ごうん、ちよーちよー繁昌に、基となりとかたりたや。（直入郡）

### 童謠

○山の燒ける彌三郎、田井が迫の彌三郎、道に玉（又珍寶ともいふ）を落して、水汲どんから拾はれて、御地藏さんかと思うて、のつたり、そつたり、拜んだ。

右の童謠は豐後地方に於て古より兒童の歌ふ所なるが、鶴峯戊申翁臼杵小鑑卷の三、田井迫村の條に曰く「昔より臼杵の童謠に田井が迫の彌三郎といへる事あり。由あることなるべし云々」、又春藤倚松氏臼杵小鑑の補に此の童謠を載せたり。

右の意は或夜明るき事あり。彌三郎山を燒くならんと思ひ、立ち出で見れば、山の燒かるるにはあらで、彌三郎の持ちし夜光の玉の光なり。彌三郎玉を持ちて他行の時ふと落したり。家に歸りて見れど見當らず。玉をば水汲の拾ひたるを知らず、その處に地藏立ちたれば、恐らく地藏の拾ひたるならんと思ひ、三拜九拜して返されよと、願ひたりとなり。（大分縣）



## 佐賀縣

### 土龍打歌

○なれ〳〵梨の木、ならずも梨の木、なれとぞいはふ。千なれ萬なる億萬なれよ。よその物ちぎるときや、堀のなきやぢやぼ〳〵、うちの物ちぎるときや、はたけんまんなきやぼて〳〵。十四日んもぐらーうち、おかちんなよんごーでも、ふとかとからおくんさい。（神崎郡）

### 大樽區夏祭歌（其九郎）

○細名山を下る時、豆腐の角にけつまづき、菫蒻小骨が喉に立つ。きねで掘つてもほれはせぬ。向う通るねーさんに、藥をないかと問うたらば、藥はだん〳〵御ざいます。海鼠の白玉に章魚の骨、山に立ちたる蛤と、海にたちたる松茸と、夏降る雪に寒茄子、氷の黑燒火にといて、つけて見なんせよくなほる。（西松浦郡）

## 盆踊歌

○おそよ今來た。えすー早かつた。草鞋解きませうか、すそ湯をやらうか。草鞋やわしが解く、すそ湯はいらず。お燗つけませう。御膳出しませうか、一膳なれど。御膳たぶればあたまへ上る、御茶漬けまゝなら一膳あがろ。おそよ。このまゝ毒ではないか。なんのあなたに毒出しませうか。わたしとあなたは夫婦の中で。　（西松浦郡）

## 盆綱引歌

明治三十二年頃迄、陰暦七月十五日の夜には、松浦村山形部にて、老弱男女を問はず、盆綱引とて歌を歌ひつゝ、綱引をなせり。今其歌を左に記す。

○こゝは石原小石原、かねをのせきだもたまりやせぬ。エートヽ、エーヽトコリヤ、サンヨヽ。

○きんのまきだる、こがねのひしやく、いはひいづみの御酒をくむ。エートヽ、エートヽ、コリヤサンヨヽ。

○さても見事なだるまの松よ、枝はながのに、葉は山形に松の綠は皿山に。エートヽ、エート、コリヤサンヨヽ。



（西松浦郡）

## あら踊

○こーひのーこーころ、おわかれゆーゑそーろの、（ソコイナー）、のーまつぢよーろーの、ふりかーかーる、（ハヨイヽ）ねーても、さーめーてもわーすーれがーたーな。（サイトーヽ）ヨイヽ　ヘーヨエー。

○ふぢーはせーどのあるみはいつまでも（ソツコイナー）、さーけーのすゑーえはことのーも（ヨイヽ）なーごりやわーすーれぬ、ふなばまでも、わすれーがたな。

○さどーと、イヨナンサー、（イヨエーヽソラ）佐渡とわかーさはすぢー向へなう、橋をかけうやら、船のぼしばなう、（アレヤヽヘーヨヽ）橋の、イヨナンサ、（イヨエーヽソラ）橋のー下には鵜の鳥がなう、鮎をくはーへてはにやしやんとのとひあるだんなう。（アラヘーヨヽ）

○ふじーは、イヨナンサー、（イヨエーヽソラ）富士が裾野にやー鶉がふーけるなう。なんとーふけるか立ちよりヽ。

聞けばなう、（アラヘーヨヽ）ごよーは、イヨナンサー、（イヨエーヽソラ）ごよーはめでーたの天下もよけるーなう、ことに我國やーなーほよけるなう。ヒヤールーダンノー、（アレヤヘーヨヽ）。

○ごしやくー、イヨナンサー、（イヨエーヽソラ）五尺手のーごりやなか染めわーけてなう、たれにくりゆやらー、やどに置きやりやなう（木の木ーヒヤルタナンノーアリヤヘーヨヽ）やどーが、トイヨナンサー、（イヨエーエーソラ）やーどがよーけーればなは立たぬなう。（ヒヤールイダンノー、アレヤ、ヘーヨヽ。）　（杵島郡）

## 亥子歌

舊十月初亥日は男兒、第二の亥の日は女兒。

○ヨイトンナヽ、權兵衛さんの餅つきぢや。銚子出すか、餅出すか。一番目にやむすこんこ、二番目にやむすめんこ、そりかるさきやー、でふーでやー、でふーでやー、（拍）ヘートーヘートー。

（西松浦郡）



## 地搗歌

○抑池の始まりは、京奈良の猿澤池が始まりぢやー。猿澤池と申するは、水が三合で鮒が七合、どのよなかんばつも一寸へらずの泉池。　（杵島郡）

## 石搗歌

○壽永の春の屋島潟、きさらぎ荒き浪風や、十八日の夜も長けて、潮にひびきし矢叫びも、やがてぞ絶ゆる敵味方、沖に連なる兵船は、あけはの蝶にくれなるの、旗ひるがへす平家方、長汀曲浦の陸地には、撿非違使九郎判官を大將とする東國武者、笹龍膽を白絹に、そめたる旗のいくながれ、折もこそあれしづヽと、汀の方にこぎよせる、平家の船のたゞひとつ、舳に高くかゝげしは、總紅の軍扇に、旭かたどる金の丸、見るもまばゆき風情なり。陸にひかへし東軍は、大將はじめいぶかしみ、そも何事やなすならんと、船にまなこをうちそゝげば、連ねたてたるたての外に、ほころび出づる早櫻、柳の絹のいくかさね、いともめでたき上臈の、日扇さつとおしひらき、

これ射よがしに差招けば、義經片ほにほゝゑみて、都の人の習ひとて、さしもやさしき望みかな。味方の手練誰ならん。とく射落せと下知のもと、數多の人に推されつつ罷り出でたる大將は、せいは高きにあらねども、年は二十歳のよもこえじ、まなこすゞしく鼻高く、たんかのくちびるがさんの眉、あかぢにしきのひたゝれに、もえぎ威しのよろひきて、あしじろのたちはきたるは、かもめじりとやなづくらん。きりふにたかをはぎなせし、二十四さしの征矢をおひ、重籐の弓の眞中を、とつてこわきにはさみしは、天晴射手とぞ見られける。そもこの人や誰ならん。下野の國の住人にて、那須の助高が一子なる同苗與一宗高なり。大將近く坐をあたへ、あれ射て見よと望まるる。身の面目は更なれど、旭に弓矢射むけんは、いとゞかしこい業ならん。日の丸さけて矢をはなち、武運つたなくはづれなば、身の榮辱は吾れ知らず、我東軍のなをれぞと、しばしたゆらひ居りしかど、いつてつ短慮の源九郎、如何で許させ給ふべき。やむなく御諚かしこしみて、たくましげなる黑馬に、きんぷくりんの鞍おかせ、ゆらりと乘りは乘りつれど、これや生死の海ならん。兩軍かたづをのみながら、眼をそゞく晴の場處、ひとすぢの矢にもゝとせの、命をかくる武士の意地、健氣の覺悟ぞあはれなる。馬を汀にうたせつゝ、やごろはかりてひかゆれば、時に夕陽傾きて、黃金をたゝむ浦波を、たちさわがせる北の風、船もろともに軍扇の或はひくゝ又たかく、定めがたきぞ恨みなる。宗高馬上に目を閉ぢて、方寸の中に祈るやう、南無大悲の觀世音、日光權現那須明神。今の與一をあはれとも、見給ふ慈悲のましまさば、しばしなりとも波風を、しづめたまへと、誠よりなる一心の、天に通じておのづから、風なぎ波もしづまりて、いよけに見ゆる船のまと、そやを抜ぎとりひきつがひ、命をしぼるめでゆんで、ひやうとはなてばかぶらやの、浦にひゞきて鳴く千鳥、扇のかなめはつしりと、花かてふてふかてふてふか花か。扇は空へまひあがり、夕日をうけてひとしほの、ながめばえある有樣に、敵も味方も感にたへ、ふなばたたゝく平家方、箙をならす源氏方、しばしはなりもやまざりし。（佐賀市）





○北山しーぐーれやー曇りーなければー晴れてー行く、ヨイヨーイヨイヨサツサツサ、なーけーれば晴れてゆーく。コラ〳〵からかさ持て來い。降つて見よ。雨はふーるとーも、ふらぬとも、あら恐ろーしやこちの風。くもーりサツサなーけれーば　はれてーゆーく。ヨイヨイヨーイヤナサツサ。（神崎郡）

○サーサー、やりませう、やりかけますぞ。今日は日もよしいしーづき始めー、石をつかねば此の家へはたゝぬー。アラナ、コラナアラヤートサー。國を申さば丹波の國よ、ほたん長者と世に仰がれて、やしき廻りを傳へて聞けば、やしき廻りは八町餘程、むねは八つむね三階作り、女關口には泉水ほらせ、きんぎよぎん魚の鯉鮒浮かし、裏に築山こしらへなさる。つゝじつばきや櫻の類を、植ゑて眺めて相遊びなさる。あによめさんを傳へて聞けば、あに嫁さんな攝津の國よ。裏田千町や前田が千町、二千町なる田を持ちなさる。中嫁さんを傳へて聞けば、大舟千艘に小舟が千隻、二千隻なる船持ちなさる。おと嫁さんを傳へて聞けば、國は京都のかんばく樣よ。なにささきの玉折姫よ。こひといふ字の身のあやまりで、うつろ舟にて流されなさる。（西松浦郡）

○エー抑めいご三界、じよーがく十方今ははやー、ソレハエートンナヤーサラー、エー〳〵ほー本來無東西、ソレハエートンナーヤーサラサー、（句切り毎に、以上の拍子をはさむ。以下之れに倣ふ。）がしよー南北かなもの三返唱ふれば、戒め御祈禱申し上ぐる。抑このどー搗きと申するは、から國にても始まらぬ、此朝にても始まらぬ。天竺國西の宮、役行者と言ふ人が、かうの法衣に九條の加裟、水晶の念珠つまぐりて、深編笠に顏をかくし、あやの脚胖に綿の足袋、六尺二分の杖をつき、お弟子をひとり供につれ、早や日本に渡らせ給ふなり。早や日本になりぬれば。國々處々廻らせ給ふが行者なり。抑この往還と申するは、六尺二分と踏み分けて、片足三尺其の道は、馬行が通る御道なり、片足三尺其道は、諸國の大名の御道

なり、中なる二分の其の道は、諸國神々樣の御道なり。役の行者といふ人が、數多の人夫を引き連れて、山手を指いて急ぎける。早や奥山になりぬれば、大大木をなやまかし、六尺二分とたいどりて、女綱男綱を引きつなけて、數多の人夫に引き渡す。數多の人夫が受け取りて、やさらもさらと引き下す。はや都になりぬれば、數多の番匠に引き渡す。數多の番匠が受け取りて、八角四面と面をうけ、中には四つのちくを植ゑ、上には二本のその笹を つけ、下に十二の綱をつけ、上なる二本のその笹は、摩利支天王のしめの竹と表したり。夫より角取神と申するは、摩利支天の戸帳と表したり。中なる四つの其ちくは、それこそ足と表したり、下なる十二の其の綱は、一いち神々樣が備はらす。一番綱と申するは、聖德太子の備はらる、二番綱と申するは、日天さまが備はらる、三番綱と申するは、三社の權現備はらる、四番綱と申するは、四天王の具はらる、五番綱と申するは權現樣が具はらる、六番綱と申するは、六體地藏が具はらる、七番綱と申するは、七福神が具はらる、八番綱と申するは八天樣が具はらる、九番綱と申するは、熊野權現具はらる、十番綱と申するは、十せつつ金むつむじんが具はらる、十一番のその綱は十一羅漢が具はらる、十二の綱と申するは十二藥師が具はらる。一々神が具はらす、天より惡魔がはへ來ても、何の仔細も候はず。

○屋敷の出端仕る。山崎瀨先で候はず。上より惡事の墨をたほしが、千里の邊にて引き捨て置いて、今こそ屋敷と平ぐる。抑此の屋敷と申するは、南下りの北上り、東下りの西上り、乾の角にかめ七つ、七つの寶を入れ置いて、今こそ屋敷を平けた。

○エー阿波の始まりや淡路が島よ、ヨイ〳〵、阿波の始まりや淡路が島よー。（囃）ヨーイ、ヨイヤサ、アリヤ〳〵、サーサーサ、サーサーサ。

○エー、國の始まりや大和の國よ、ヨイ〳〵、國の始まりや大和の國よー。（囃）

○エー、鐘の始まりや三井寺の鐘、ヨイ〳〵、鐘の始まりや三井寺の鐘ー。（囃）

○エー此度佐賀にて騒動がおきた。ヨイ〳〵、後に殘るはこりやごけばかり。

○エー九百九十と九ごけは居れど、ヨイ〳〵、一人足らずに千ごけや居らぬ。

○ドツコイ、調子をかへかける。ヤーサラサーヤーサラサー、今日やこなたの石搗で、どなたもこなたも賴みますー。ヤーサラサーヤーサラサー。

（粉島郡）

## 大漁歌

○思ふこた、叶うーた、末は鶴龜ごよのまつ。すがたこそ、しまのゐべすに、似たとも、たかさごや、をのへの松に、あみかけて、いわしとるにも、ひまもなし。祝うて、しやはしやよかからうよ。ハーヨカオイ。御利生〳〵でーあしたから、大がち（魚群）やとーらうよ。是も山見さんの、おごりしやうかなー。

（東松浦郡）

## 捕鯨歌

○偖見事な且那樣の組よなー。せみ（鯨）の子持が、よりかゝる、ハーヨイヤサー、よりかゝる。今年や、よりかゝる、せみのこもちがよりかゝる。今宵祝ひて、あすせみかけよ。是も祝ひのごりしやうかなー、ご利生かなー、是もごりしやうかなー、是も祝ひの御利生かなー。

（東松浦郡）

## 釜蓋被せ

該釜蓋被せは、婚禮祝儀の時、花嫁の初めて其の家に入り、臺所より上らんとするところを、側に待ちかまへ居たる花婿の友達、之を引きとめ、其中の一人釜蓋を右に持ち、高く花嫁を覆ひ、左は嫁に觸れ（背或は帶の後部）唱ふる口上なり。

○あれござつたる花嫁樣、お手引きばさんもまちなんせ。しづかにござんせ、よめごさん。私江戸の者、長崎通りがけのものでござんすが、一寸こなたに立寄りましたれば、此家荒神樣より釜ふたかぶせにやとはれまして、私名は何と申すかなれば、ほさぎ又五郎と申します。又五郎は初めてのことなれば、どちら樣にがよめごさんやら、おてひきばさんやら知らねども、櫛笄のまげあんばい、べにおはぐろのつけあんばい、帶はずつかいするたけな

ば、こしのもやうはねずみたけ、道は七ぶみ四ぶ六ぶとふみわけて、お通りなされる御方を、花嫁さんと見受けまして、私釜蓋かぶせるみち知らねども、あさぎでざらいざつとかぶせます。（さて松盡しでほめませう。松盡しでほめようなれば、江戸で番州高砂尾上松、近江八景唐崎の松、桃の川では五葉の松、提げの川では達磨松、藤の川では觀音松、むこさんなよめをまつ、よめさんなへやをまつ、へやをまつて何をまつ、そこまでいはんで吉野松、ま一つたとへて申すかなれば、駒をつなぐはなびき笹、牛をつなぐは柳かぶ、舟をつなぐはかないかり、よめはこなたのごしうと樣に、二つながせます）たとひ石が饅頭にならうとも、ところてんが拍子木にならうとも、赤兒に白髮の生えうとも、枯れ木に花がさすとも、出て行きなさんなよめごさん。こゝはあなたのをり處、もし萬一不緣で出て行きなさるときは、表の口はていすのもの、裏の口はいふまでもなく、部屋のさま（窓のこと）から六寸角のひらものかたげて、人夫そろへて簞笥長持荷はせて、蛇の目の傘さしひろげて、出て行きなさい。それもなりますまい。親に孝行たのみます。鶴は千年龜は萬年、浦島太郎は八千年、東方朔は九千年、此の夜こなたに入りこんだる花嫁樣は、釜蓋かぶつて五百七八十年とは申すれど、千年萬年萬萬年の御逗留。所望となればまだもござんす、ありやんす。こゝの小庭の梅のこぼくにうぐひすが書寢して、今まで少々よつほど（花もさいたれば今さく花がたのしみでございます。）下手のながロ上仕れば、こんやごこんれいお客のさまたけ、きみのめぐみぞありがたき、きみのめぐみぞありがたき。

注意　括孤の中の文句は、釜蓋かぶせる人の思考にて千種萬別なり。又〻後の一行は、參列の友人總て謠曲にて謠ふ。

（西松浦郡）

## 角力歌

○二月初馬旗が立つ、三月三日ひーな立つ、四月八日に甘茶の中に釋迦が立つ、五月五日に幟立つ、六月祇園に山がたつ、七月七日は七夕樣が笹に立つ、八月九月は秋風吹いてほこり立つ、十月出雲に神が立つ、十一月に天長節で國旗立つ、十二月廿九日の其晩に、借錢取りが庭に立つ。其人目がけて腹が立つ。あけて元日には門松がねー。

○一で一のせ日う雇とり、二で二割もさげられて、三で皿山をられたん、四つ他處も同じこと、五つ何時までかうあらうか、六つむりな銀つまり、七つ難儀をして見れば、八つ屋敷を賣拂うて、九つ故郷にをられうか、十東京差してにげて行く。

（西松浦郡）

## 錢太鼓節

○神戸俵ーよ北前圍へよー、今は大阪の川圍ひ。アートサイ〳〵。

右の歌を歌ふときは、竹筒の中に青銅錢を入れ、打ち振りつゝ舞ふ。故に此の名あり。

（西松浦郡）

## またら節

○十七八なるあねさんが、あかねのたすきあかまいだれ、こなを摘むやら洗ふやら。たごがもるやら名を流す。誰を思ひになを流す。ションガイ。

（西松浦郡）

## 紀州まだら

まだら中老以上の男女、酒宴の座に謠の次に歌ふ。

○鶯の〳〵今度初めて伊勢の參宮、伊勢より廣き町なれど一夜の宿を貸しかねて、濱の小松の二の枝に、柴かき寄せて巢をくんで、十二の卵を產みそろへ、十二一しよに目をひらき、親諸共にたつときは、黃金の銚子を取り揃へ、又白銀の盃で、飲めや大黑歌へや惠比須、中の酌取は福の神。ションガイ。

（西松浦郡）

## いもだね

○いもだねの〳〵、もと二千餘の子を育て、ふきたちのべて葉を開き、黃金の露をうけそめて、孫子さかうて末繁昌。ションガイ。

○鶯の〳〵、今度始めて伊勢參宮、伊勢よりひろき町なれど、一夜の宿屋をかしかねて、濱の小松の二の枝に、柴かきよせて巢をこめて、十二卵を產み揃へ、十二一所に

眼を開き親諸共に立つときは、黄金の銚子をとり出し、又白銀の盃を、のめや大黒歌ふや惠比須、中の酌取り福の神。ションガイ。

○昔の人のやさしさに扇のかなめに池をほり、池のみぎはに田を作り一もと刈りては千石、二もと刈りては二千石、三もと四もとの數知れず。穀に積れば富士の山、酒につぶせば泉酒、その酒頂戴する人は、命も長し德もある。とくと參らんせー、御座の客。ションガイ。

○盃の〳〵臺のまはりに松植ゑて、一の枝には金がなる。二とも榮えしその枝に、白銀黄金のよねがなる。三と榮えしその枝に龜が囃して鶴が舞ふ。なんと舞ふぞとたちより見れば、御家御繁昌と舞ひ遊ぶ。ションガイ。

（西松浦郡）

### 地方特有歌

○肥前の國東のはてなる豆津村、船橋ぎはなるお玉茶屋、上をながむれや水天宮、いとも景色がよいところ、アー名所〳〵。

○中津隈えらい處、祇園さんに參詣する。裏は山の中、表はみゆと松たて賣り、米屋があがり坂、いきやたりが池の島。

（三養基郡）

### 岸川節

○きしがは萬五郎さんなー、腰にこんこつさーけてなう、足のといこのふーしやー、垢あかーだーらけーの。サーサ、ゼツテコイ、ゼリマケヤセンタン。

（三養基郡）



# 熊本縣

### 惠美須送歌

大畑町に鎭座の惠美須、毎年舊曆の大晦日に宮を出でて民家に遷座せらる。依つて舊正月三日夜に至り、村中の老若惠美須像を箱に入れ、道々此歌を謠ひて社内に入る。

○花をもとめて小車にのせて、春の山路もエーヨサエーサラノ〳〵と、ひかばなびきやーれ、ノホンホ、ン思ひに亂るゝ。こひしはたれをやつれそふるよの。エ、ーヨサ。

（球磨郡）

### 福よし

○福よし、世よし、年よし。稻くらに、米倉に、寶藏の御倉に、福がとまるとお祝ひなさり。

正月元日より、五日迄の間に穢多の歌ひ來る歌なり。

（熊本市）

熊本縣　惠美須送歌　福よし　田植歌

### 田植歌

○田では田の神、おん山の神、内にはゑべす福や大黒。

○田植上手は眞中程に、植ゑ得えぬ者はもとゝさいほく。

○もとゝさいほくならんだ時は、まはれ田の風そよとふく。そよとふけがな〳〵。

○苗に花咲す、よね花さすか。きり島の松に黄金花さす。

○今日の田植の田の主殿は八つ棟の倉を建てまゐらせ。

○倉はけに又どこには建ちゆろ。いぬゐの角に建て參らせ。

（葦北郡）

○長崎は四方門に四つの辻よー、中は大川。

○去年ならば、今年の稻穗のでこく八石、八石が九石になればよー、八つの倉立つる。

○アーラめれた、ハーヨー、今年のー、ヨーイ、稻穗、イーヨー、八穗で、ソライー、ヤー八石が九石にもなるならば、世を八つのめのくら、八石が九石にもなるならば、世を八つのめのくら。

○こーひふなーは、ハーヨー、よけにはー、よう住まで、

イーヨー、よーしの、ソライーヤーイー、根ーにすーむ（住）ー。

○苗ならば、ハーヨー、苗とは、ヨーイー、おしやーらいで、イーヨー、もみーのー、ソライーヤーイー、あをりほー。

○今日の田ではうたひたうーはなけれども、世をたのせいはひに。

○日は暮れる、かいた田は五反ばり、よーあがれともない。

○八代は城は八つはなけれども、よー名こそ八つ代。

○じはしつじ、はかたのまちは八里半、よーいそげ若殿。

○植ゑた田と子の有る中は、よー末ぞたのもし。

○降る雨はとのごじや（若き時の親友）を、おもはれ、よーせなか（容赦なき事）た、じり。

○今日の田では目につく人はなけれども、よーしろしまかどり、まかどりは馬鍬（まんが）になりともすがりつく、よーだれはなどり。

○今三月（いまみつき）知れたことはなけれども、よー梅のほしさや。

○此ござはなれじよふのござとかよ。よーいでのせきしば。

○若殿に日傘をさしかけて、よーお手の白さや。小骨小骨にさがりたい、手拭（てのごひ）は、よー花の手のごひ。（天草郡）

○日向の沖には横雲のはへた。夕立雲か。

○朝立雲か。あれこそ様ぢよの縁の雲。

○縁とは何か、御縁とは何か。縁とは紬の振合せ。

○物の見事は吉田の城よ。前は大川、うしろは山で、前の大川に小船ば浮きやて、香魚の魚とる、八月香魚を。取りて殿御にくはせたい。

○五尺手拭なか染め分けて、染めも染めかな。イヨ江戸鹿の子。江戸と越後はイヨすぢむく。

○誰にやろかよ。イヨさまにやろ。さまがいやなら、イヨやどにやろ。宿がよければ、イヨ名はたゝぬ。宿と越後は、イヨ筋むかへ、橋をかけませう、イヨ舟橋を。橋の下には、イヨ鵜の鳥が、鮎をくはへて、イヨ羽ねだゝき、橋の上にはお十七八の小稚からげて、イヨこ手まねき。

○ことしやお米が澤山とれた。俵にすればふじの山。

草取、稻刈、白搗、白挽、米蹈、麥打、籾摺、等にも



歌はる。

（下益城郡）

## 草取歌

○小池の眞菰、よしといはるゝ身ではなか。（葦北郡）

○茶の木の下で約束したれや、其茶が枯れて、緣がござらぬ。エー。

○樣に貰うたる晒しの浴衣、竿に干しやるな。竿目がござる。向へ小山のつゝじにほしやれ。風に吹かしゆもに、花風に。

○樣に貰うた八ツ緒のせきだ、いつか日を見ておろそとすれば、心つくしか雨が降る。

○花のせんみつ女にくれたいものは、銀のかみさし、長崎かもじ、入れてゆはせて姿を見れば、立てば芍藥すわれば牡丹、歩む姿は百合の花。エー。

○五尺手のごひ中そめわけて、奈良の小迫におとしたや。それをひらうたものあるならば、腰の朱鞘にかへてとれ。腰の朱鞘がいやならば、五尺手のごひ緣がない。



○佐渡と越後はさしむかひ、橋もかきゆうばい、板橋を。柱千本、桁千本削りそろへて、鉋かうて、鉋も鉋ばい、清鉋を。橋の下には十八が茜鉢卷腕まくり。（球磨郡）

## 雨乞歌

○しまばーらは、イヨ、ちかくーめーいしよーとうち見えし。うしろはー松山、前はうーみ、松のーみどりーにー絲はへてー、引かば、イヨ、ひかばなびけよ島原の松。（八代郡）

○春の初めの梅櫻、花の梢の鶯が、雨を戀しと音を囀る。霞がくれの時鳥、雨を戀しと音を囀る。

○殿の御門に鶏がふける。何とふけるか立ち寄り聞けば、今年や滿作よしほがなびく。

○大阪の仁の十がさいたる刀の鞘が朱鞘で、下ゲ緒が眞紅。

○瀧の下の岩つゝじ見おろして見るばかり。（葦北郡）

## 盆踊歌

○盆の三日にをどらぬものは、腹に三月の子がござる。

○あのや浦島さんな、おかめにうちのり龍宮行き、肌もはなさぬ玉手箱、浪にゆられて浦島妙けんじ。

○樣は、お江戸の日暮し御門、見れば見るほど見とござる。

○さまにもろたや眞紅の襷、かくれや名がたつ、かけねばすたる。どこではれせうかこのたすき。

○さまにもろたやしんくのてまる、打てば名がたつ、打たねばすたる。どこではれせうかこのてまる。（阿蘇郡）

○是れは古神代の昔、うそか誠か話の傳へ、國は播州だいもつの浦、西の宮なる三郎殿は、あれなふしぎは靈氣をうけて、遙か近江の彼の湖に、いんにょあつまりのり入りせしと、竿をおつ取り波路にゆらば、浪は靜かに底清くして、玆にのぞみの釣りばりせんと、來りてつばり忽びなる沈む。金の釣り竿五色の絲で、金魚島鯛釣り上げ給ひ、これを五色の御臺にのせ、君の御前と差上げ給ふ。直に神よりのたまふよりも、よろづ衣服は絹布のずいに、綾や錦や金襴どんす、奥はもよほす三段九こん、御家高砂大島臺に鶴と龜との相生の松、祝ひませうと扇子を持ちて、世にもめで度いためしがござる。いざやこれにて世はまさらじと、御家繁昌と扇子を持ちて。

○尾張大根はゞかりながら、聲はたゝねど口（くち）說いて見ませう。ヨイヤサー〳〵。

（八代郡）



## 牡丹長者

○牡丹長者のいはれを聞けば、家は三階八つ棟作り、前の高石高壁垣で、内の樣子を細かに聞けば、庭に築山泉水堀りて、金魚銀魚の鯉鮒浮かす。それを眺める長者の威勢、弓や刀や槍長刀や、千疊座敷にかざらせ給ふ。赤き錦の幕引きしほり、それを眺める長者の威勢、鷹七つをみゆうと乘馬五匹、若子三人設ける程に、嫁を三人取らねばならぬの。姉嫁殿の最初を聞けば、朝日長者の先づ一人姫、中嫁殿の最初を聞けば、北山長者の先づ一人娘、弟嫁殿の最初を聞けば、元は源氏の公卿（し）衆の娘、少し許の身の誤りで、うつろ舟から島流された。紫檀黑檀唐木をよせて、京の町ぢゆうの大工をよせて、大工十人七日に成就。さても出來たやうつろの舟が、ひどろざまにはちやん等かけて、夜と晝との界が分る。金と銀との千よーつかいて、中に立派な姫君入れて、なんじ難より押し流されて、此處の沖には五日はゆられ、其處の沖には七日はゆられ、流れついたが淡路の島よ。島の太夫の御目にかゝる、うつろ船とは話しにやきけど、ほんに見た事今度が初めよ。拾ひあげてくづしら見れば、中に立派な姫君樣よ。頭に天冠ゆら〳〵さけて、其日〳〵の食事を聞けば、そてつ團子やこくどの菓子よ。菓子の中でも上菓子ばかり。一つあがれば七日の食事、二つあがれば、十四日の食事、其れは立派の食事でござる。國は何處か名はなにがしか。國を申さば耻かしけれど、元は源氏の公卿の娘、少し許の身の誤りで、うつろ船から島流された。あらば太夫も之れ聞くよりも、國に歸るか緣付きするか。うつろ船から流されたから。二度た我家に歸りはならの。御せわながらも緣付きたのむ。おらば太夫もお喜びで、ほたん長者の弟嫁に。

（八代郡）

## 君樣太鼓踊

熊本縣　中原樂歌

○君樣の御門に鶴が巢をかけた。世は萬年と鶴がさへづる。

○君樣の御門の中に松植ゑて、世は末代と鶴がさへづる。

○秋の田の刈穗をあげて一、二、三、世は滿作と鶴がさへづる。

（珠磨郡）

## 中原樂歌

是は鄕社神事の際、庭前に圓陣を作り一齊に唱ふるもの。

○天の岩戸の神かぐら〳〵、月に六度の神樂より、千代萬代の神樂より、御伊勢踊りを踊りて慰めぬれば、國も豐に千代も榮ゆるめでたさや。

○東は關東奥までも、西カ筑紫カ諸國盡しの人迄も、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢踊ををどりて慰めぬれば、國も豐に千代も榮ゆるめでたさや。

○南は岸上天王寺、江國波國の人迄も、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢踊りを踊りて慰めぬれば、國も豐に千代も榮ゆるめでたさや。

○西は住吉天王寺、老若男女に至るまで、まゐり下向のめ

でたさよ。御伊勢踊りををどりて慰めぬれば、國も豐に千代も榮ゆるめでたさや。

○北は越前加賀能登や信濃越後に至るまで、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢をどりを踊りて慰めぬれば、國も豐に千代も榮ゆる目出度さや。（阿蘇郡）

## 籾摺歌

○夜明の烏啼いて戻るがしをらしや。戻るが鳴いて、ないてもどるがしをらしや。

○燒野のきゞす親はなけれど子は育つ。なけれど親は、親はなけれど子はそだつ。

○燒野の蔓うらは枯れても根は殘る。枯れてもうらは、うらは枯れても根は殘る。

○板屋のあられころびかゝるがおもしろや。かゝるがころび、ころびかゝるが面白や。（上益城郡）

○右ばなさんよ。オイニヤ〳〵、がつてんせよ。東山や朝日のぼるごと賴むと云ふばい。そーれがえーぞ。



○左ばなさんよ。オイニヤ〳〵、がつてんせよ、左ばなをらぬかい。がんのぼり立つた。立つたなれや千人でも萬人でも、十五夜お月でやみなし〳〵。止めんちえーぞ。そーれがえーぞ。

○左ばなさんよ。籾ずりなんどは、御寺の小坊主が半鐘つくよに、次第に早めて賴むと云ふばい。そーれがえーぞ。

○右ばなさんよ。おまいたちのてじなに、向うの塘から白齒が手招けやどーかい。行かねばのさんぞ。そーれがえーぞ。

○左ばなさんよ。がつてんせーよ。右の方にどんぶりかゝへが二人居るぞ。なんのわーれや左ばにやすりばちかゝへが三人居るぞ。どつちも千石おつとり前ぞ。そーれがえーぞ。

○右ばなさんよ。かはいや勝五郎車にのせー、初花にや引かせて、箱根にのぼさい。わしにもひかせ。そーれがえーぞ。

○やらうや、やらう左ばなおいにや。

○ちんちく小笹を竹になるにや、十五夜お月でやみてちやなかばい、アヲサテソレ〳〵。

○右ばな〳〵なにかい。（阿蘇郡）

○むかしの人のやさしさは、扇子の要に池を堀り、池の右汀（カ）に田を植ゑて、ひともと刈りては千石の、ふたもとかりては二千石、俵につもれば富士の山、酒に造れば泉酒、其さけ頂戴する人は、命もなーがいけれや、德りもあるとくと、すゝめやお座の客。ションガエ。

○扨正月は祝ひ月、門に立てたる松と竹、其枝々になーふる雪は、松風あられと申します。上から鶴がなー舞ひおりる。下から龜がなー舞ひあがる。どうかするかと立ちより聞けば、御家御繁昌と舞ひ遊ぶ。（下益城郡）

## 米搗歌

○客さー客さはどこさー。客さは肥後さー。肥後さはどこさー。洗馬の川さー。洗馬の川には、蝦さが居るさー。網さを買うて、かぶせて取るさー。煮さー、喰うさー。うまさのさつさー。（菊池郡）

熊本縣　米搗歌　新地歌　地搗歌

## 新地歌

○新地お役人なこのしろの無鹽、燒かにやもたえん夏の魚。そらいかゝほた餅やきなこまめさい。ことし始めてお新地に出たれや、がたのいない道やまだ知らぬ。おどんがえ來て見れ道ばたじやるけん、茶わきやーてまつとる。よらんがなるきや、猫まじやしゆすびん。（熊本市）

○今年始めて御新地に出たら、ぶりの荷ひみちやまだ知らぬ。腰をかゞめて唄でたつ。

○雉子も鳴かずばうたれはしまい。わしがとゝさん口ゆゑに、今は萩原の土堤柱（どてはしら）。（下益城郡）

## 地搗歌

○（音頭）國は河内の、（勢子）ヨーイヨイ、（音頭）延吉長者。（勢子）ヨーイヨイ。（音頭）長者代取りの新德丸よ。（勢子）ソラ、ヤーストコセーノ、ヨーイヨナ、アレワイセー、コレワイセー、コノナンデモセー。（音頭）今は後添ひ、（勢子）

ヨーイヨイ、(音頭)母様繼子は、(勢子)ヨーイヨイ、(音頭)弟梅若生れる時は、(勢子)ソラ、ヤーストコセーノ、ヨーイヨナ、アレワイセー、コレワイセー、コノナンデモセー。(音頭)弟梅若、(勢子)コラサーコラサ、(音頭)產がきつして、(勢子)ヨーイヨイ、(音頭)御願を立てた。(勢子)コラサーコラサ。(音頭)立てた御願はほどかにやならぬ。(勢子)ソラ、ヤーストコセーノ、ヨーイヤナ、アレワイセー、コレワイセー、コノナンデモセー。(玉名郡)

○蓬萊山から鶴が出た。(ソラエート〳〵)扇子をくはへて舞ひ遊ぶ。(エー〳〵エートナハラ、コラハラ、トセー)

○奈須の與一が扇の的よ。(ヨイ〳〵)弓に射られて骨ばら〳〵と。(エー〳〵以下右に同じ)

○けふは日もよし居藏の地搗、そこが大事の大黑柱。

○娘能く聞け今度の嫁(よめ)りや、簞笥七棹長持八掉、夫れに就いたる化粧箱迄も、よめりするから身持が大事、大事〳〵といたさにやならぬ、隣り近所の茶飲みの座でも。

○春は南に桑葉も芽ぐむ。夏は茂りて森となる。森の上から鶴が來る、森の下から龜が出る。鶴は銚子を啣へて下る、龜は盃くはへて上る。鶴と龜とのさんさかもり、中に酌する辨財天、龜がのんでは鶴にぞさすよ、鶴が飲んではこなたの亭主。此盃受けたる人は、末は長者とあふがれなさる。鶴は千年龜は萬年、此方(こなた)亭主は數限りなし。わしが音頭は謠でとめる。飲めや大黑歌へや蛭子。千代八千代にさゞれ石、祝ひ壽きはる。さてもめで度き御家であれば、雨にや漏らぬ盜人入らぬ。倉の建つ時又もやります。エンヨヤー。(上益城郡)

○今日はどーした吉上日か。今日は天赦のよろづよし。こゝの屋數はめれたのやしき、東高うして西低くござる。南地びくて北高うござる。祝ひめでたや若松さまよ。枝も榮ゆれや、これ葉も茂る。石が一番、二番が柱、三に牛なと、四に梁あげて、五にはけたゆき、六あ棟造り、八ツ八棟八方造り。(阿蘇郡)

○一つとせ、一つは延岡元橋の、橋のつもりをいたします。





二つとせ、再びかけの此橋は、今度が始めてで御座る。三つとせ、みんな大工を呼びよせて、橋のつもりをいたします。四つとせ、よくも帳場も石割も、御上の御用と集り。五つとせ、五つの鐘の鳴り出せば、早くも丁場を始めます。六つとせ、無理な事のないやうに、なけつくらべついたします。七つとせ、七つの鐘の鳴り出せば、早くも丁場をひかせます。八つとせ、宿屋に職人集りて、心靜かに休みます。九つとせ、小屋しまうて地ならして、柱の穴までさらへます。十とせ、とんとかけたる此橋は、今度(向)が始めで座ざいます。

○もこにみえるは兵庫の島よ。兵庫いきしま誰が築きとめた。あれはいにすへ(古)平家の武士の、太じよ(政臣)大じの清盛樣の、おづきなされ(御築きなされし)兵庫づき。

○けふは目出度い萬歲舞と、舞をまへ(緒)とのお答へあらば、さらばひとさしまはりてまはうと烏帽子しめよもしつかとしめて、素袍の袖もそれたをやかに、あふぎ手に持ち足ふみ揃へ、紫檀の胴の小鼓は、宿に打ちかけ拍子ぞならし、德若に御萬歲と、かゝるめでたい其折からは、富貴繁昌と御家も榮え、ときはに松とぞ先づをさめおき。ヨーイ〳〵ヨイトサ、ハラリヤ〳〵トセー。

○さらば是から初めて見ます。國を申さば但馬の國よ。こけつ和尙といふほんさんが、人にましたる智惠者の男、四十八字を作りし人よ。一字一字に道理をつけて。

○春はみんなみ木の葉も芽ぐみ、夏は西にてくはきをのぞく、秋は北にて其木も休む。冬は東のうそらつゝじ、みづこそよりもたからなり。めぐり〳〵て又東に、たやのちぎりも野にかたどりて、天の川の其柱だて。

○祝ひ浪風治る御代に、枝もならさず相生の松。

○鶴と龜とに祝ひをこめて、松と竹とによはひをこめて、とゝとかゝとにちぎりをこめて、是は萬歲千秋樂の、末々までもめでたけれ。

○(音頭取)西の方見や。ヨーイ。(勢子)ヨーイ〳〵。(音)わかい衆ーやーたーちもんが、エーヤーサン、あらどこ〳〵。(勢)エーヤーサン、あらどこ〳〵、エーヤーンサンサノエーヤーオイ〳〵、(音)わくどの木昇りや、ヨーイ、(勢)ヨーイヨイ、(音)前足やだきつく、後足やふ

んばる。行きやひよろん〳〵と、エーヤーンサン、どこ〳〵。（勢）エーヤーサンサーン、ドツコイヤーサンサノエーヤーオイ〳〵〳〵、祝ひめれたの若松樣よ。枝も榮ゆれや葉も茂る。

（八代郡）

○上は梵天帝釋天の、ハーヨイ〳〵、今日は日もよし地搗きなさる。ハーヨイ〳〵、ヨイナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。四方の四面にしづ繩張りて、ハーヨイ〳〵、中に芽出度く土搗きなさる。ハーヨイ〳〵、金の櫓に黃金のどづき、ハーヨイ〳〵、綾と錦のより分け手綱、ハーヨイ〳〵、手繩引く人七福神で、おんどするのが大黑蛭子、ハーヨイ〳〵、下のつく石や白銀の石、一分小判の栗石つめて、ハーヨイ〳〵、ヨイナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、立つる柱の謂れを聞けば、ハーヨイ〳〵、一の柱が大黑柱、二なる柱が四天王でござる。ハーヨイ〳〵、ヨイナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、四天王揃うて御家を建てる。扇々と棟にぞ祝ふ。ハーヨイ〳〵。一の扇はてんぢく天に、一の扇は地神に祝う。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

（葦北郡）



○ちゆちゆけ饅頭（蝶々食はせよ）かしゆ、ナニドコイ、菜種の芽かしゆ、やがて大根葉の、コラ芽をくはしゆ。ヨーショーガエー。ハヤレコラ、ヤレコラショ、ハヨイ〳〵〳〵〳〵。

○千魔大振袖、ナニドコイ、裁ちよがござる。袖が三尺、コラ身が五尺。ヨーショーガエー……

○堪四郎殿は、けふの御堂の建立に、八萬餘騎を召し連れて、あることないことくどかねば、へたの素麵つるがぬー。これからだん〳〵くどきませう。

○陸奥のなー〳〵、陸奥の國の助一は、娘三人持たれけり。先づ一番娘御は、里場に婿を取られたり。先づ二番の娘御は、山場に婿を取られたり。先づ三番の娘御は、磯場に婿を取られたり。里場のなー〳〵、婿が來る時は、姑に土產は何々か。大豆五駄に米五駄、背には腐れたあづき餅。山場のなー〳〵山場の婿が來る時は、姑に土產は何々か。薪五駄に炭五駄、背には白髮の生えた古狸。磯場のなー〳〵、磯場の婿が來る時は、姑に土產は何々か。



鰹五駄に鹽五駄、背には腐れた鯛の魚。（球磨郡）

○大黑柱の立つときは、一家親類皆おしよりて、ちゆつ〳〵たんぐり〳〵あわわして。

○そうたいお家とまうせしは、聖德太子の御始め、伊勢天照皇太神宮もおんよりなさる。

○東のすみには瓶七ツ、鶴が千年龜萬年、此の家の亭主は萬劫末代。

○日の本、日の神、福の神、七福神もおんよりなさる。

○白鷺殿がさぎどのが、此年始めて伊勢參宮、伊勢の松の二の枝に、しばかきよせて巢をこめて、十二の卵をうみそろへ、十二一度に飛ぶ時は、長柄の銚子ですのかはらけで、飲めや大黑うたへやゑべす。上座うたへば、下座がまはる。下座うたへば、上座がまはる。七福神の御あいさつ、のめやうたへともりながす。

○六十餘州の神々よせて、大黑蛭子もおんよりなさる。潮の滿つごと金が湧く。

（天草郡）

## 柱建

○エート〳〵、一番柱の其體は男神女神を表じおく。エート〳〵、二番柱の其體は大黑天と祝ひおく。エート〳〵、穀物盡きせぬ神なれば、くーとのげんじと祝ひおく。エート〳〵、三番柱の其體は夫こー（荒カ）神と祝ひおく。エート〳〵、金もつきせぬ神なれば、萬福げんじと祝ひおく。エート〳〵、四番柱の其體は鹽竈大明神と祝ひおく。エート〳〵、鹽氣成就を守りの神よ。エート〳〵。

ヤー五番の柱は牛頭天皇と祝ひます。火ぶせの御祈禱。（ヨイ〳〵ヨイトニヤーアラニヤコラニヤコノヨイトニヤー）六番の柱は六地藏菩薩、祿を授けし守りの神よ。（同上）ヤー七番の柱は七福神と祝ひ置きます。世は又げんじ。（同）ヤー八番の柱は座王權現と祝ひ置きます。世は又げんじ。（同）ヤー九本の柱はしよいごの菩薩祝ひおきます。世は又げんじ。（同）ヤー十番の柱は吾氏神と祝ひおきます。世は又げんじ。（同）ヤー此方屋敷は見事なことよ。東上りて西三さがり。（同）ヤー戌亥大道辰巳に花壇、南は大川北には森で。（同）ヤー屋敷ぶにゆーで榮

ゆるばかり。(同)ヤー木挽棟梁は飛驒の弟子で、大工棟梁は竹田の番匠。(同) ヤー削り上げたる見事な柱。祝ひ目出度の若松樣よ。(同) ヤー枝が榮ゆれば御家も繁昌。(同) ヤー五間柱に十間の家、餘り長ければ長座に及ぶ。(同) ヤー此處は大事な臼持の柱、此坪では一本きりあげて祝ひをこめたけ。エーユヤノサンノエー。　(阿蘇郡)

## 千秋樂

○エート〳〵、つくぞ此石をさめおく。(エート〳〵)一分小判のやどりにて、(同)これほど目出度いことはない。(同)東方朔は八千年、(同) 浦嶋太郎は九千年、(同)鶴千年とをさめ置く、(同)龜萬年とをさめおく。(同)東西〳〵地はしづまりて、をさめ置きます火ぶせの御祈禱、弓は袋に劍は鞘に。　(阿蘇郡)

## 天神七代地神五代の神おろし

○エート〳〵目出度き御代の初まりは、天神七代で世を、其後地神が五代ぞや。エート〳〵。

一代目の天神さんが國とこたちの命さん、(エート〳〵)二代目の天神さんが國さすちの命さん、(同) 三代目の天神さんが、豐國ぬの命さん、(同) 四代目の天神さんが、らいどにの命さん、(同) 五代目の天神さんが、おーとみちの命さん、(同) 六代目の天神さんが、おもたらしの命さん、かしこねの命さん、(同) 七代目の天神さんがいざなぎの命さん、いざなみの命さん。(同)地神五代に移らせ給ふ。(エート〳〵) 一代目の地神さんが伊勢天照太神宮、(同) 二代目の地神さんが、おしほ耳の命さん、(同) 三代目の地神さんが、ににぎの命さん、(同)四代目の地神さんが、彦火々出見の命さん、(同) 五代目の地神さんが、うがや葺不合の命さん。(同)　(阿蘇郡)

## 大切畑堤

○ヤー頃は安政三年の初め、阿蘇の布田なる大切畑堤(ヨイト〳〵、ヨイトニヤー、アラニヤー、コラニヤー、コノヨイトニヤー)。ヤー塘の長さが九十と九間、ヨイ〳〵、長さ高さをつたへて見れば。(同) ヤー塘の高さが三十と





五間、ヨイ〳〵、天と久しき月日は長し。(同)ヤーかきはときはで堤築きとめて、ヨイ〳〵、ゆくぞすたれし其水とめて、(同) ヤー千里かゝゆる其水すその、ヨイ〳〵、遠く戸嶋の其そらまでも、(同)ヤー千丈萬丈田が出來まする。ヨイ〳〵。ひらき此田の米なる時は。(同) ヤー榮え榮ゆる此布田の里。ヨイ〳〵。布田の里には倉建てならべ。(同)ヤー祝ひめでたの若松樣よ。ヨイ〳〵。枝も榮ゆれば御家も繁昌。(同)ヤー餘り長ければ長座に及ぶ。ヨイ〳〵。(同)。　(阿蘇郡)

## 那須の與市

○ヤー那須の與市といふ士は、ヨイ〳〵、つもる御年十九年にて、(ヨイト〳〵、アラニヤ、コラニヤ、コノヨーイトニヤー)、ヤーせいは小兵で御座候へど、弓の引手ぢや日本一ぞ。(同)ヤー源氏平家の御戰に、雪にふりつゝ下野の國、源氏陸から平氏は灘に、なだの平氏が沖なる船に、的に扇を上げたるしるし、九郎判官やれごらんあれ。灘の平氏が沖なる船に、的に扇を上げたるしるし、與市一矢に射落すならば、敵や味方に見物させよと、此世からなる唐天までも、有名の大名を取らせんものと、與市〳〵と御前にまねく。與市陣屋を今たちのいて、君の御前に兩手をつかへ、御用如何にとうかゞひ見れば、汝招くは餘の義でないが、灘の平家が沖なる船に、的に扇をあげたるしるし、汝一矢に射落すならば、此世からなるから天までも、有名の大名をとらせんものと、かしこまつたと兩手をついて、與市御前を今立ちのいて、吾家さしてぞ今立ち歸る。與市其日の出立見れば、黑革をどしの鎧を着し、五枚重ねの兜をかぶり、弓は重籐きりふの矢なり。與市急いで駒屋へついて、駒は奥州坂東そだち、あけ六年には尻黑の駒、妙珍ぎたひの轡をかませ、綾と錦とよりわけ手綱、五ツよりては三よりはもどす、手綱かいくりゆらりとのりて、しんづ〳〵とのり出し給ふ。急けや程なく濱邊について、向う遙かに眺めてみれば、其日に限りて八嶋が浦は、吹く風烈しく波高ければ、扇の的はかすかに見える。與市其日にとなへる神は、南無や八幡大菩薩さま、うがひ手水で我身を淨め、拍子ボンボと

今打ちならす。神の功力はあらたなことで、風も治り波をだゝねば、扇の的はさらりと見える。與市今ぞと心のうちに、弓は重籐きりふの矢とり、うらはりもとはり中きりちがへ、切つて離せば見事なことよ、扇の要にはつしとーぬき、扇の一くわんちら〳〵落ちる。陸の源氏は横手をならす、灘の平氏は船板叩く、やんや〳〵と一度にほめる。

（阿蘇郡）

## 柱　建

○今日は目出度い彼の福日よ。地をば固めて末代迄も、こんな土搗在郷にや稀れか。金の土搗黄金の櫓、四方に立てたる眞鍮の矢來、男綱女綱は五色を着けて、手綱取る衆は七福神よ。一分小判な黒石積んで、上に積む石や白銀御石、此家造らす大工衆は、ひだのたくみか竹田のばんか、それに增したる棟梁が立てた。こんな御家數々建てたなら、水に流れず火難に逢はず、風で仆れず盜人入らず、萬劫末代榮うるばかり、此家に白き雀が舞ひこんだ。萬の寶を家に持ち納め。

（八代郡）

## 彌市くどき

○彌市だまして東京に上し、後に母様たくみがござる。お醫者様にぞちよこ〳〵まゐる、申しこれ〳〵お醫者様よ。毒の藥は有るまいものか。毒の藥は有ることあれど、毒の藥は錢高うござる。百兩ばかり出さねばならぬ。錢の百兩はたゞより安い。そこでお醫者は理につめられて、金の威光でばゝ様に渡す。婆様手に取りたもとに納め、内に歸りて園爐裏の掃除、鑵子磨いて上茶を沸かす。嫁女茶を飲め、茶菓子を取れと、今日のかゝさん機嫌のよさは、いつもないこと晝茶を沸かし、人にやいばずに私を呼んで、右の茶菓子を一箸三箸、何が毒かよ身に染み渡る。疊三枚黒血を吐くが、さても逢ひたさ兩親様に、まだも逢ひたき我夫彌市。そこで彌市に御告げがござる。申しこれ〳〵九人の同行衆、今日は内には無常がござる。急げや程なく七日にやもどる。内に戻りて母さんにたづね、申し母さまおさんなどちに。あれは此頃四五日後に、えらい頓病で死んだでござる。そこで彌市も目に血の涙、



おさん墓所と手向をなさる。おさん墓所に線香を上げて、おさん頓病ちやなぜ身は捨てた。我も頓病ちや身は捨てないが、あなた母様邪見なものよ。毒の藥でもり殺されて、親でなければ仕様もあるが、親であるなら手向や出來ぬ。金子羽二重きよも〳〵どんす、それに着いたる長崎かもじ、買うて來たれど役にもたゝぬ。隣り近所にや朋輩ないか。一の朋輩二の朋輩、三の朋輩と早うち呼んで。

（八代郡）

## 柱　立

○今度普請の材木を見れば、紫檀黑檀唐木をよせて、それを切り組む大工を見れば、飛驒の工匠や竹田の番匠、飛驒の匠が握りしかねは、四角四面のかねなれど、四角四面にうらがねとりて、竹田番匠に半分くれて、すみきかくるかうらかね次第、鋸のきり屑のそのかず〳〵も、飛驒の匠がしらんなすまぬ。千代に八千代にさゝれ石の、巖となりて苔のむすまで。

（下益城郡）

## 石棒祝

○さらばこれから石棒を祝ふ。金の石棒、黄金の金輪、綾と錦のよりわけ手綱、四本の唐又は四天王でござる。四天王とてたとへに竹ぞ、上のまるいわは日月とたとへ、綱をひく人は天王様の姿、ほんでんにぎりて音頭をとれば、音頭とる人は帝釋天の姿。

（下益城郡）

## 石童丸

○あはれなるかな石童丸は、父の行方を尋ねん爲に、母は麓の高野が茶屋に、預けおかれしおん身は一人、九百九十の御寺々を、尋ね廻れど行方も知れず。その日一夜はお寺にやどり、明日は早天無明が橋で、親と子との奇縁はふしぎ、親と子と又行きあひけれど、親は子を又つゆ知らずして、子は又親とて尙知らずして、物が問ひたい御僧様よ。今は道心御ましまさば、教へ下され御僧様よ。愚か云ふぞい都のお童兒、そんな尋ねぢや分ることかたし。道のちがひに高札建てゝ、書いた高札たておくならば、おそし三日に相知れまする。書いて下され高札を。

こゝは途中で硯がないぞ。伽藍堂迄連れ行き給ふ。細い硯に墨すり流し、鹿の卷筆たんぶと染めて、左御手に高札とりて、書くぞ語れよ都の御童兒。先祖名のるは耻づかしけれど、先祖名のりやにや、行方が知れず。わしが身は又筑紫に於て、筑後筑前さて肥後肥前、大隅薩摩で彼の六か國なる御大將に、加藤左衞門名は重氏と、常に信仰八幡樣の櫻馬場にて陣幕うたせ、御一門中寄集りて、花の御會なされし時に、父が持ちたる御盃に、散るべき花は散らずして、蕾一房なう落ち給ふ。あんな蕾を二前三前、もしは此世になき身と思ひ、姉の千代鶴三歳のとき、見捨ておかれし緣子丸は、今に成人名は石童と、語り給へば御僧樣も、袖に涙ぞ絞らせ給ふ。それで若君不審をたつる。こいしゆう尋ぬる御僧樣に、お前でござるとさて云ひければ、去年までは朋輩(ほうはい)であるを、去年以前に空しくとなる。そこで若君涙にくれて、右に花たご手向けの水を、上(あ)ぐるしんぜん御出家樣に。（下益城郡）

## 石搗歌



○春は東に木の芽ぐむ、ハーヨイ〳〵、夏は西にてかつきをのぞみ、ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、秋は北にて其氣も休む。冬はみんなみ其つゝるづゝ、ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、いつゝみつこそ世に寶なれ。ハーヨイ〳〵、たやのなりぎりのにかたどりて、ハーヨイ〳〵、天の河原の其柱建て。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

○陰陽二性の下柱、三方の柱は三世の諸佛、ハーヨイ〳〵、四本の柱は四天王でござる。ハーヨイ〳〵、四海太平大安全と、ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、いともすぐなる太平づみと、ハーヨイ〳〵、鋸屑も數々と、ハーヨイ〳〵、祝ひ納むる墨坪の絲。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

○祝ひめでたの若殿さまよ、ハーヨイ〳〵、御知行增します其年々に、ハーヨイ〳〵、門に立ちたる祝ひの松よ、ハーヨイ〳〵、一の枝にはなう金がなる、二の枝にはなう福がなる、三の枝にはなうなよ〳〵と、ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、天から鶴が舞ひ降る下から龜が舞ひ昇る、ハーヨイ〳〵、鶴と龜との舞ひ遊ぶなり。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。祝ひ納むる、長う申すはいと安けれど、祝ひ納むる此家の繁昌。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

○石棒立てたは東の方よ。ハーヨイ〳〵、まはり〳〵て又東に、ハーヨイ〳〵、まはり來たのは大黑柱、ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー、四海浪風治まる御代に、枝もならさぬ相生の松、ハーヨイ〳〵、松と竹との祝ひをのぶる。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

○君と吾との契をこむる、ハーヨイ〳〵、これは萬歳千秋樂の、末々までもめれたけれ。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。天の浮橋立て幷べて、ハーヨイ〳〵、數多福神より集りて、天のしやち鉾御手に持ちて、ハーヨイ〳〵、靑やうなばら御さぐりたまへ、ハーヨイ〳〵、陰陽和合のとゝとか、、是は萬歳千秋樂の末々迄もめでたけれ。ハーヨイ〳〵、ヨイヨナ、ハリヤリヤ、コリヤートセー。

○今日(けふ)は日もよしどうづきなされ。一歩小判は栗石につめて、銀の石棒に錦の手繩、手繩取るのが、七福神、しん木とるのが大黑ゑびす、飛驒の匠が建てたる御家、水に流れず火難に燒けず、風に倒れず盜人入らず、ひだのたくみのたてたる家は、榮えますぞえ世の末までも。（葦北郡）

## 木遣歌

○ヨイサー、今日は材木めーがー都にだしてー、おざもときめて、ヨイサー、やれこのやつは山の神のー守りぎーかよ。わかのしゆーがましたてのうちよーしめて、ざんきりばうずのたぶさのさきまで、ゆら〳〵するほどなびきたのめば、なんたる神の守りぎでも、いやがーならでーずんずらずいとゆるぎーたしたよ、おざもとまーではぞーさはないぞ。ヨイサー、やれこのやつはゐのしゝ武者かよ。はなをくじりてそーでもないがよ、てんぐどん

ぢやなけれど、たーかい鼻ぢやが、わーかのしゆーが、またはづみが足らねば、やれこのやつは、いかんというたよ。はづみでなれば、やれこのやつは、ずんずらずいと、おのがまゝにもいかうというたよ。

○ヨイサー、春のひーには永のひーで、わかのしゆうがなぐれまいぞー、はづみをたぬだぞ。ヨイサー、このよなだいらでかゝりたが、こぶのえかよ、そーでもないかよ。わかーのしゆが、またはづみが足らで、やれこのやつは、いかんというたよ。ヨイサー。

○ヨイサー、ウーエー、やれきんぴき木遣りで、ヨイサー、エーンヤ、このよなだいらで。ヨイ。

○ヨイサーウンエー、これからはーみつゝをたのみぢやが、ヤンサエー、ソレハエー、まひとつ、エーエーヨ、おきたろ、ながう、エーヤーンサーラーエー。（球磨郡）

## 井戸突き歌

○ヨーイコレ、ヨイサンコーレ、一つけが親類、二つけが辛いか三けがやゝもち、四けなら雨風、五けさんなこつちやん、六けぢや丸藥、七おきや歩がつく、八け酒飲みたい、九けさんな東京でとぼけかねたろか。ヨーイコレ、ヨイヤサンコーレ。

○ヨーイコレ、ヨイサンコーレ、十七娘が病まずに死んだなら、御醫者がけかちで、御寺が豐年、御村の若いしが墓場のこやしか。ヨーイコレ、ヨイサンコーレ。（阿蘇郡）

## 舟　歌

○正月二日の初夢に、我家の山の楠木を、切手を雇ひて切倒し、こびきさんに賴んで板にわく。かぢやさんにたのんで釘作る。大工さんに賴みて舟つくる。もーは大なる舟おろし、帆は錦緞の卷きおろし、柱は金銀つぎ柱、ともの間にはいりて眺むれば、たつたる建具は金障子、次のわきの間ながむれば、鶴と龜との舞遊び、そこで御舟玉もお喜び。

○舟はからかね、ろはこがね、大黑さんが船長して、ゑびすさんが水さきで、壽老人が中のりで、金銀寶を中につみ、出雲をさしてはしりこむ。（熊本市）





○昔の人のやさしさは、扇の要に池ほりて、池のぐるりに田を植ゑて、一番草をとりをさめ、二番草をもとりかやし、秋風吹かせて實を入れて、十七八の姉さんが、さらしの手拭ほほかぶり、あかいじゆばんに繩たすき、みかづきなりのかり鎌で、一もと刈つては千石と、二もとかりては二千石、三もと四もとぢやかずしれの。米になしても千石よ。千石船にも積みやきらの、千石藏にも入りやきらの。この米つぶして酒つくり、酒はどこ酒、いづみ酒、この酒頂戴した人は、末は長者になるわいなー。

○二日の晩の初夢に久田良木の木をきりて、大工を入れて板をわり、三十二折りに舟をくむ。黃金の帆柱おし立てて、帆はきんだんのあやにしき、艫のおこしに松をうゑ、舳に積んだる米俵、艫につんだる金俵、七福神な集りて、蛭子大黑艫の役、松風吹かせて此に來る。（飽託郡）

○こんぴら山からながむれば、いか釣る舟が二三ばい、烏賊はつれずにふくがくた。そこでおふくさんの物語り、わたしのやうなるおだふくを、つりて肴にしようよりは、さかなは、トコサイ〳〵、おらんどな。

○餘りさびしさに浦に出で見れば、內のお裏の泉水に、白帆が三ばいほどまひ込んだ。さきなる舟の積み物は、あや錦をつんで居る。中なる舟のつみ物は、金銀たからをつんで居る。後なる舟の積み物は、米の三千俵もつんでゐる。七福神のうはのりで、おゑべすさんの水さきで、大黑さんが梶を取る。此よなめでたい、トコサイ〳〵、事はない。（宇土郡）

○花の敦盛十六歲で、花の玉織後に見て、さいて行くのが一の谷、ほんに熊谷是非もない。

○扇の要に田を植ゑて、十七八の姉さんが、晒の手拭ほほかむり、みかづきなりの鎌持つて、一もと刈れば千石田、二もと刈れば二千石、三もと刈れば數知れず。米につぶせば近江山、酒につぶせば和泉酒、此酒頂戴したものは命の長き德もあり。

○舟は早かれ、順風はよかれ、先の仕合はまだよかれ。

○舟は船頭が持つ、艪は水手がもつ、內の世帶はかゝが持つ。

○一で一村氏神様よ、二では身分の船神様よ、三で讃岐の琴平様よ、四では信濃の善光寺様よ、五つ出雲の大社よ、六つ六角堂の觀世音菩薩、七つ長崎鹽神様よ、九つ高野は弘法大師、十遠い處の日輪様よ。

○舟にや乘るとも天まにやのるな。てんまかやれば灘の底。

○ちよいと染めわけ船頭さんの浴衣、肩には大船走り船、裾には立つ浪金錨、質においても流りやせぬ。

○艪も舵も浪にとられて身は浮舟よ、どこにとりつく島もない。

○舟よ〳〵と夜中とこに、渡してくだされ船頭さん。たとへあなたの渡しても、何の難題かけはせの。（八代郡）

○木崎せん崎の鯖舟せんど、さばはつらず。サマヨーヨナアライサテ、鯛を釣る。

○つりてつりあげて生魚でのぼせ、チウハイナ、花の都も値のよかれ。ネノヨカゲナサーコゲ。

○あとに一こん殘して、味噌こゆ〳〵と、宿の娘に煮て喰はしゆ。アライサテ。

○のもの岬ではよこがきれた、帶のはよこでたすきまで。

○西の暗いのは雨ではないか。雨ぢやござらぬ風ぢやもの。早く港に着くがよい。

○廣い港を出て行く舟は、嵐や風に吹かれては、舟頭はおもてに立ちのぞき、浪にゆられてしを〳〵と、行くへもわかず灘の中、風に吹かれて行くわいな。（葦北郡）

○雨はしよぼ〳〵横つかれ、ろかぢは折れる帆はしやける、柱は中から折れて飛ぶ。十と二人の舟のりが、鉢巻や手に取る、金比羅さんへと願をこめ、我家にや子も居る妻も居る。夫れ程しらずが船頭さま。

○三寶御幣をば前にすゑ、かみそり手にとる髪を切る。さうかうする間に實あねさん風をする。

○艪も舵も汐にとられて身は浮鳥よ、どこぞとりつく島もない。

○高砂や尾上の松を臼つくる。其枝とりて杵をとる。萬劫祝の餅ぞつく。餅つく音さよー高砂よー。（天草郡）



## 酒造歌

○松の葉、ハーソコヂヤイ、葉色と、ハーヨイサヨイ〳〵、つき、ソレ、日の出しほ、ハーヨイヤナー、い、ソレ、まとむか、ヨイトサノヨイ〳〵、しは世はか、アイナソレ、はらねど、かは、ソレ、りやす、ヨイサノヨイ〳〵、いはたゞひ、ヨイヤナー、と心。トコセーノヨイヤーセノヨイヨナー。

○これが今年の始めのそへよ。そへにかぐらのまひはじめ、面白や。

○これが今年の二度目のそへよ、此酒熟成すれやほうめい酒。（阿蘇郡）

## 絲引歌

○じてんしんゑの車より、さんどくごよいの絲を出す。しやうじのかせわでへてみれば、ぎりきぎまんの絲を出す。（球磨郡）

## 櫨摘歌

○秋最中鎌倉原に團居して、水平山を眺むれば、はぜの紅葉の錦して、花にもまさる景色あり。

○世を渡る道はといへば樣々に、ある其中、櫨の木に登るとこはし、のぼらねば、あすが煙も立ちかぬる。（阿蘇郡）

## 馬子歌

○しやかにもらうたる此駒いさめ。今は御禮に參らるゝ。

○今日は日よしと門いですれば、馬頭觀音御夢想ありて、駒も勇めよ、馬子しよもよかれ。鈴も、いさみも、おもても、つなも、子孫繁昌なほよかれがし。（球磨郡）

## 棒踊歌

### 呼出し

○おせろは山で、おせろは山で、ヤソ〳〵ヨーナサ、まよーだハゝえ川。

○鎌倉の御所のお庭の十七小女郎酌に出た。目につこばつれて行かのせ、わし諸共に、竹崎のはて迄も、エーそら。

○矢山で、ヤレおしろは山で、イヤソレハヨーデナサヨ、まえへ〳〵〳〵のヨだハゝえへ〳〵〳〵かは。

○よが寺の徳よが寺で、ソレハヨーデナサ、まえへ〳〵〳〵、の竹よやよゝえへ〳〵〳〵のよをしやくや。（八代郡）

## 庄屋殺

○今年や子の年大星な年よ。もとよ肥前な水かたけか、田作畑作日にやけまする。此處の上村お庄屋樣は、親子三人水見て廻る。今年計りは取留めむと、此處の下村甚平殿も、是も同じく水見て廻る。甚平上田で下田が庄屋。甚平上田は干ごらがたちて、庄屋下田は笹浪ぐひて、そこで甚平が樣子を語る。お前其田が三反七畝、わしが此田も三反七畝、お上納拂はばかはりはないが、水は分け取りしませうではないか。水は入れ勝ち喧嘩はし勝ち、頭撲れてもてど打たれ損。そんな無理するのが、庄屋か。人のけんくわも止むるが庄屋。役にたてつく卑怯な人よ。向は三人味方は一人、畦を枕に打ち臥せられて、濁り泥水顏振りすしで、鍬にすがりて我家と急ぐ。内に戻りて女房のお龜、早く出て行け子連れて行け。妾に行けとは邪見でござろ。樣子聞かねば妾や出て行かぬ。そこで甚平は樣子を語る。今日は上村お庄屋殿と、水の遺恨で口論したぞ。向うは三人味方は一人、四十九の撲ちなやされた。鍬にすがりて是まで來たが。仇討なされ助太刀しませう。妾も義理ある武士の子なれば、二年三年習うた手筋、一に眞劍二になぎなたよ、三に小太刀の受けまへ覺え、親の讓りの大段平も、鞘をはづしてねたばをつけて、三つになる子をひへさしとめて、軍神ぢやと血祭しませう。夏の頃なら身かりぐ〳〵と、綾の鉢卷黃金の襷、さつさ行きませう甚平殿よ。前に立ちたる姿を見れば、巴御前か藥師の神か。夜の夜中に庄屋と急ぐ。急けや程なく庄屋に着いて、夜の事なら門つめござる。夜の夜中に戸をとん〳〵と、夜の夜中に戸を打つものは、公儀の使かふれ狀持ちか。公儀の使でもない、ふれ狀持ちでもない。書の喧嘩の仕掛けでござる。あんな手筋ぢや勝めはないが、命助くる甚平殿よ。なんと言はんすお庄屋殿よ。喧嘩しかけて是迄來たが、そこでお庄屋の兄息子殿が、八丁掛の蠟燭出して、四方八方に火をともされる。火をともさるれや書よりあかい。そこでお庄屋の兄息子殿が、



斬りてかゝればお龜がむかる。勇士と勇士の戰なれば、暫しが間は火花をちらす。一手後れて兄息子殿は、右のかひなを打ち落された。左のかひなも打ち落される。上へ上りて首打ち落された。そこでお庄屋の二番目殿が、此處にはやらぬおろんに流儀、下段で來るのは中段で下す、中段でくるのは下段で落す。飾り置かれし六尺の棒、打つてかゝればお龜がむかる。一手おくれて二番目殿も、右のかひなを打ち落された、左のかひなも打ち落された。上へ上りて首打ち落す。さらばお庄屋はそれ見るよりも、飾り置かれし大太刀持つて、斬りてかゝれば甚平がむかる。勇士と勇士の戰なれば、暫し間は火花を散らし、一手おくれてお庄屋殿は、一手おくれて千手の弱味、右のかひなを打ち落される、左のかひなもうち落される。そこで甚平が樣子を語る。庄屋するとて貪慾するな。我れは此世のみせしめと置く。手なし庄屋と笑はりゆよりも、お前手にかけ殺してくれろ。（以上庄屋殺）（八代郡）

○年はとりても心は一つ、古き櫻に花がさす。サーレハエーコレハエー、かはばたいし〳〵おこせば、かに〳〵。かにのなまやけは、食傷のもと〳〵。（球磨郡）

## 武者踊

○このには參りて見れば、やらみごと、しろがねしらすみ參るにはかな。

○此家はたからの家とき、そろへ、しろがねはしらにこがねはりかな。（八代郡）

## 臼太鼓歌

○オーめでたいや〳〵、ハルワイネソライアーア、天の岩戸と申せしは、日本國中くれの暗、七日七夜や舞ひをどり、ハリワイニヤソライ、其時日本國中の神々が、春日白髮大明神、肩には何を附きゆか。柳の內綠、裙には何を附きゆーか。裙には松の內みどり。ハリワイネソライ、踊りよければ自ら、其時扉を開いたりや。ハリワイネソライ。（葦北郡）

## 都入歌

○をんごく出羽にかくれなき、佐藤莊司の御館、六萬餘騎勢揃へ、都軍の事なればいんしゆう軍のかど入りに、わかぎみさまの御上覽に、六萬餘騎の其中で、佐藤莊司の物語り、沖に鷗の立つときは、敵は船と判ぜられ、月夜烏はいつも鳴く、暗夜烏の鳴く時は、敵は山と心得て、深く用心いたされよ。群雀のさわぐ時は、心を靜に持つべきぞ。仇の命がすたるぞえ。言ひ置きするもこれまでぞ。あづまをさして急がれよ。

雨乞又は落成式祝勝會等の場合に踊らる。（葦北郡）

## 太鼓踊歌

○これのお國のちよ女樣、十九で九よみの布織りて、一月さらえて蟬のごと、二月さらえてさぎのごと、三月さらえて雪のごと、紺屋〳〵を望まるゝ。丹後紺屋を望まるる。染は何かと尋ぬれば、肩にはぢんちよー籠の鳥、裾には早船五葉の松、祭禮踊を踊らうや。祭禮踊と申するは、天竺までも聞えたり。さてさむらひの花見には、天竺までもきこえたり。

○曾我の十郎五郎は、豐後のぎをんに初まゐり。何が望みで參らるゝ。まとが望みで參らるゝ。其ころまとがなくして、扇をまとに立てさせて、十郎どのは七ばん、五郎どのは八ばん、十夜四ばんのけさかけばん。

○おとに聞えし羅生門、さて又きこえし大江山、大江山と申するに、きじんがすんでわざをする。太鼓打ちてにあたりたる、金時殿はほーぞどんと綱どんと、渡邊どんと、五人の人をめしつれて、大江山へかがりある。いくさの裝束花やかに、鬼と軍をなされしが、鬼の打首あな見事、浮きつ流れつあな見事。引いてもの、夜明けには、お庭の遊びは引たよし。

○島原は近く名所とうち見えて、うしろは松山前は海。島原の松の緣に絲はへて、ひけよなびけよ島原の松。島原の町のこゞちの霜ぶけば、いつもたいせんふみと天草。

○りうざん王のしろのまはりがはちりなり。なゝへのもがり、うしろはこがは、前はだいがは、西と東はしらたきなり。



○大日の本なれども照りもせず、おゝさいとてに、あめがした。

○御馬屋に駒立てゝ、中にたてたる眞の黑、駒が參ると板を蹈む。七ひき馬屋に駒立てゝ、中に立てたる眞の黑、敵が見ゆると板を蹈む。

○若殿樣の、おのり出し、舟が千艘に、帆を上げて、錦の旗が二千本、あやの旗が二千本、雨は降らねど、さゞめき渡る。舵に拍子をそろはせて、都に昇る、ぎよいくだり。

○大廣間の景を見てやれば、弓矢揃うて胴甲。おほみうまやの景をみてやれば、ォーこれやほどのごかれいは、七間みまやに駒立てゝ、中に立てたるしんのくろ、ひいての門の夜あけには、よあけがたの横雲。

○豐後の國の金平樣よ。八萬餘騎で御たちあひ、立花殿をおせめやる。立花勢は少しの武士で、槍と太刀とで手向ひ召せど、無勢に多勢で手も合ひ召さぬ。（球磨郡）

## 檢校踊經文



○釋迦、毘沙門、阿蘇、十二區大明神、比惠、猿野、五尾、神々の長崎の御神、保小の谷の護神、小川内、三多良伊の護神大良、下登屋、上登屋、藤の尾、灰木、小屋の谷、道級小山、高灰口、小谷々々の護神、水神達はけあひの護神、七曲りの護神、常に此經六字奉る諸人萬人、富貴萬福圓滿息災諸願成就、うやまうて候。

### 終りの謠

○ことしや滿作穗に穗がさいて、君の惠にゐぐちをかけて、末安樂の御世となる。

○阿蘇山岳に登りて見れば、おとうつ山の布の水、（球磨郡）

## 獅子踊歌

○むかうか山に鳴くすゞ蟲は、暑さになくか、寒さになくか。朝草きりの目をさます。

○あんどか山にあるとは聞けど、まだ見んものは百合の花。

○土佐より船が三隻や上る。先きのは金よ、後のは錢よ、中のは土佐の早米よ。（球磨郡）

## 五家念佛

○去年(こぞ)までは人の上よと思へども、今年になればまさる我上。イヨサ。南無阿彌陀佛。

○蜀鳥(ほとゝぎす)げに極樂の鳥ならば、親の行方(ゆくへ)を語り聞かせよ。イヨサ。南無阿佛陀彌。

（八代郡）

## 肥後琵琶端歌

○一花(いつけ)ひらいて四方の春、皆あさなれや〳〵、門松祝う二柱、ぢつと引寄せ御七五三繩、だい〳〵子孫ゆづるはの、にほひなつかしとびの米、影をよろこぶ鏡餅、かみとき流す串の柿、伊勢鰕飾る蓬萊の、萬々石の寶船。

○積み込む數はほん俵、うちのせ曳けや牛車。昔は神功皇后の、異國退治の神いくさ、蒙古の首を打ち鮑、姿を返す蜜柑かな。煎りこがしたる鬼豆の、鬼は外内は打ち出の小槌なる。

○垣つめの障子にかをる庭の梅、雀は竹に戯れる、松には鶴の巣をくひて、君の齡は幾千代の、限りもあらぬ壽の、祝ひつきせぬ初春に、御倉は珠玉滿ち〳〵て、治まる御代のめでたけれ。

（葦北郡）



## 嫁入歌

○親はどんなもの、柴茶に迷うて、ノシコラ、知らぬ他村に娘やる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良(よ)うなかばつてん、どうしゆうか。御勘忍々々々。

○今年始めて姑婆々添へば、ノシコラ、石で袴を縫へと云た。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良(よ)うなかばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〳〵。

○石で袴が縫はれぬならば、ノシコラ、山の松葉が針となる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良(よ)うなかばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〳〵。

○山の松葉が針となるならば、ノシコラ、山の蔓(かづら)が絲となる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良(よ)うなかばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〳〵。

○山の蔓が絲となるならば、ノシコラ、天の村雲が綿となる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良(よ)うなかばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〳〵。

附記　本俗謠は嫁入りの際、途中友達及び同伴者、拍子を揃へて歌ひ、前方に送るものにて、中流以下に行はるゝものとす。されど上流社會の嫁入りにも往々行はるゝことあり。

（玉名郡）

## よいやなー節

よいやなーぶしは其數頗る多く、類別すれば左の數種となる。

（い）元服ひもときなどに祝ひとして謳ふ類。

○祝ひめでたの若松さまよ、枝も榮ゆれや、葉も茂る、枝も榮ゆれや葉も茂る。ヨイヤナー。

右は婚禮の席にも謳ふ。

（ろ）新嫁新婿其他家人への祝ひの謳ひ。

○これのお家に入りくる嫁は、黄金枕に錦の蒲團、末代長者と祝はんせ。ヨイヤナー。

○玉のやうなる息子を持てば、夕日暉く嫁とりすゑて、嘸や親樣およろこび。ヨイヤナー。

○一度(ひとたび)茲に來て見れば、こゝは祝言祝ひごと、二度(ふたたび)こゝに來てみれば、二親(ふたおや)さんのおよろこび、三つ見事にようでけた。四つ嫁さんのごきりやうは、五つ出雲の神さんが、結び合せた緣ぢやもの、六つむこどのなるならば、七つ何事ないやうに、八つやはらかにあたらんせ。九つこゝに來たほどに、十をごえんと居りなされ。ヨイヤナー。

（は）娘を嫁にやる親より。

○蝶よ花よと育てた娘、今宵あなたに上げます程に、末はよろしく賴みます。ヨイヤナー。

同じくめとる方の親より返し。

○蝶よ花よと育てた娘、今宵こちらに下さる程に、さぞやおあとが淋しかろ。ヨイヤナー。

（に）客に盃をすゝむるとき（女より）。

○わしは大阪船頭が娘、船も押します艪も押しまする。お前さんにも押しまする。ヨイヤナー。

男より女に盃を返すとき。

○わしは大阪船頭がむすこ、風のないのにや船出しやしま

い。元のみなとに押しつくる。ヨイヤナー。

（ほ）酒宴の際客より謳うもの。

○わしに下さる肴がなくば、胡椒や山椒や苦瓜なりと、油でこないて下しやんせ。ヨイヤナー。

同主人の謳うもの。

○まれなお客に何がな御馳走、師走筍冬なる茄子（なすび）、まだも御馳走は胸の中。ヨイヤナー。

（へ）新築落成の時大工に謳ひやるもの。

○これのお家はようたちました。柱白銀桁まぢや黄金。軒にさがりし金すだれ。ヨイヤナー。

（と）家の繁昌を祝ひ、家人の爲に祝詞を述ぶる等の歌は頗る多し。

○これの座敷は祝ひの座敷、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ、〳〵。ヨイヤナー。

○これの小坪にや植木がござる。一の枝には大判小判、中の眞木は錢と米。ヨイヤナー。

○これの御庭にや小鳥がふける。何をふけるか立ちより聞けば、御家繁昌とふけります。ヨイヤナー。



○これの小坪にや井戸堀りまして、水は涌かでな金が涌く。ヨイヤナー。

（ち）其他にも種々なるものあり。

○こんな田舍に名所のお客、お出で下さる有難や。ヨイヤナー。

○今宵お客は皆牝鷄か、時を知らぬか、謳はぬか。ヨイヤナー。

○これの御家は祝ひの御家、庭は米つく、御前ぢや碁うつ、店ぢや手代が錢はかる。ヨイヤナー。

○こよひあんたの御とりもちは、金の盃、黄金の銚子、下さる御酒は保命酒。ヨイヤナー。

○正月の〳〵、二日の晩の初夢に、扇子の要に池を堀り、池のめぐりに田を堀つて、一（ひと）かな植うれば二千石、二（ふた）かなううれば、四千石、三かなううれば數知れず。酒につもれば泉酒、山につもれば富士の山。ヨイヤナー。

○正月の〳〵、二日の晩の初夢に、白き鼠が三つづれに、又三つづれに、むつづれに、先き行く鼠は金くはへ、中行く鼠は米くはへ、あとの鼠のいふことにや、これにもお家の福ねずみ。ヨイヤナー。

○正月の〳〵、二日の晩の初夢に、衣更山の楠木は、切りてつくりて板にわき、舟を作りて朝おろし、帆は金襴のまきものに、手綱に綱は繻の絲、舟のへさきに松を植ゑ、松の嵐で行く時にや、千里萬里は一日に、急げばお江戸の品川に。ヨイヤナー。

（阿蘇郡）

## 裏の段々畑

○裏の段々畑に獅子が芋ほる、子じゝが芋ほる、しゝ芋ほる、子じゝ芋ほる、子々じゝ子芋ほる。ハーツトズイタ〳〵。

○それをなんぐり返やせば、芋がしゝほる、子芋がしゝほる、芋しゝほる、子芋しゝほる、子々芋子じゝほーる。

○裏の段々畑に鳩が豆つむ、小鳩が豆つむ、鳩豆つむ、子鳩豆つむ、子々鳩子豆つむ。

○それーをつんぐりまんぐり返やせば、豆が鳩つむ、小豆が鳩つむ、豆鳩つむ、小豆鳩つむ、小々豆小鳩つーむー。

○裏の段々畑に、ぢーがごんぼ堀る、子ぢーがごんぼほるー、ぢーごんぼほる、こぢーごんぼ堀る、子々ぢー子ごんぼほるー。

○それをなんぐりかやせば、ごぼがぢーほる、こごんぼがぢーほる、ごんぼぢーほる、子ごんぼぢーほる、こゝごんぼこぢーほる。

○裏のぜーたんぼーにや（下水溜には）どぢやうがによろ〳〵、小どぢやうがによろ〳〵、どぢよによろ〳〵、小どぢよによろ〳〵、子こどぢよこによろつーく。

○それをつんぐりまんぐりかやせば、によろがどぢよつく、こによろがどぢよつく、によろどぢよつく、こによろどぢよつく。こゝによろこどぢよつく。

此歌は中以下の者の歌ふ所にして、種々の宴席に用ゐらる。然して比較的老人社會の集合の時多く用ゐらるゝが如し。

（鹿本郡）

## 酒座歌

○盃はだんぶと受けし影見れば、四萬四千の倉ぞ見えけり。

○こよひの客はのしろの草とたとへます。押してかなはぬ

さすぞ盃。

（八代郡）

## 名附祝歌

元服の時にうたはる。

○春の光りに烏帽子屋五郎太夫ひとり姫、公卿の交り序ひらき、職士なれば烏帽子折り、忍ほしも段々ございます。折り烏帽子立烏帽子なしうちゐほしもございます。中に立てたる左り折り、之を着する人は又源氏の大將左馬の頭父義朝の八男目、常盤腹にて三男目、當時鞍馬に住居する牛若丸にて候へば、着せて姿を眺めたい。（葦北郡）

## 潮來歌

○年の始にさて飾りもの、代々ものもち鶴の羽に、串柿かけだし幸木、門に立ちたる松と竹、小枝に遊ぶ鶴と龜、番ひ蝶々かはらけに、肴にや數の子のせぞんほ、末は鶴龜五葉の松、萬歳あくるといはうたる。

祝日にうたはる。

（葦北郡）



## しよんが節

主として酒宴の席にて歌はる。

○めでたいこなたのお座敷に、白い鼠が三つ出た。又三つ出て六つつれて出た。小判なくはへてかねはこぶ。これが此家の福の神。ナーションガイ。

○西行法師の食い物は、豆腐の骨をば喉に立て、もしこれ〳〵女中樣、之れに藥はないかいな。之に藥はだん〳〵數あれど、山にはえたる蛤と、海にはえたる松茸と、夏降る雪に寒なすび、水の黑燒き、火でといて、これが西行の疵藥。ナーションガイ。

（葦北郡）

## 祝歌

○昔の昔の又むかし、千年よりもまだむかし、萬年よりもまだむかし、昔の人のやさしさや、扇の要に池を堀り、池のぐるりに田をひろめ、其田になほす早稻の稻、一もとなほして千石ござる、二もとなほして二千石、三もと四もとで石づもり、石につもれば四千石、桝は白銀とかきは黃金、金の俵にはかりこむ。ヨーシュンガエー。

○世間の方を見廻せば、蕗とめうがを植ゑそだて、どれがをしやふやら旦那やら、小庭に泉水堀らせたも、中に築山つかせたも、五葉の松を植ゑ育て、一の枝には錢がなる、二の枝には金がなる、三の枝には妻がなる、下から龜がはひ登る、上から鶴が舞ひ來る、そこで鶴龜五葉の松。

結婚、還曆等祝儀の場合に歌はる。

（球磨郡）

○たかさごよ〳〵尾の上の松に臼くりて、其枝とりて杵造る。祝ひめでたの餅をつく。其日祝に肴なし。のめや大黑、うたへやゑびす。中に酌とりや福の神。

○高砂や〳〵此浦舟に帆をあけて、月もろ共にいでしほに、波の淡路の嶋かげや、遠くなるみの沖過ぎて早すみのえにつきにける。

（天草郡）

## 琉球歌

○旅の出立觀音堂、千手觀音伏し拜み、黃金取り立ち分る。

○袖に降る露おし拂ひ、おほじよ松原步み行く。行けば八



幡崇福寺。

○三重路高橋打渡り、袂を連ねて諸人の、行くも歸るも中の橋。

○沖の寺迄親子兄弟連れて別れる、旅衣、袖と袖との露涙。

○船の纜とく〳〵と、船子勇みて、眞帆引けば、風はまともに午未。

○又も廻れば、御緣とて招く扇は見え薄く、さんば岬を後に見る。

（熊本市）

## おりやんこ節

○高田原めい物あ、ゆもじの上からまいだりして、頭ねぢごふらでせんつき屑煙草。オリヤンコ〳〵、リヤンコ〳〵、リウケガニヤ。

高田原は封建時代下級士卒の家宅多數を占めたる地なり。ゆもじの上からまいだりしては、上半身裸體の意を表し、あたまねぢごふらは。片外しと稱し、士卒の妻にかぎり結ひし頭髮、せんつき屑煙草は貧民の喫する屑煙草。

○高橋名物あ三本木をやつたりとつたり、御手にくひの立たぬがそれが名物ぢや。

高橋町は熊本の西約一里、三本木は松を割りたる薪なり。高橋は古來此薪を天草郡より輸入し、熊本に商ふを業とするもの多し。

○法華坂名物あ、わん〳〵狸が、そら出たもう出た。かゝさんがお手引いて通ればちつともあぶなうない。

法華坂は新町より熊本城に上る坂にして、當時樹木欝蒼、行人稀なりきといふ。

○春日名物あ、ぼんぶらわい〳〵、ぼんぶらわい。あいぢやにやつけ瓜もござります。巾着長なすび。

ぼんぶらわいは南瓜を行商するふれ聲を云ふ。春日は熊本に近く、古來蔬菜の産地なり。

○松尾名物あ六本樟、大きなからいも、鶯の觀音さん、こつて牛、干大根。

松尾は熊本の西一里餘、金峯山の裾にある山地なり。六本樟は此村にある名物にして、樟の大樹なり。甘藷干大根を此地の名産とす。鶯の觀音は古來靈驗あらたなる觀音と稱す。此地山なるを以て多く牛を使用す。故にこつて牛をかふか。

○上町名物あ春白きなつたれや小ひまがござらぬ。のみとりし、とりちよと出てくぢらほす。

上町とは高橋に於ける貧民の巣窟、其生活の樣を歌ふ。

（飽託郡）

## しよんがら節

○正月の二日の晩の初夢に、新造つくりてけさおろす。百千反のまきばしら、あやや錦を帆に卷いて、手繩水繩は琴の絲、ともに大黑、おもてにゑべす、十二おふな玉まん中に、とものみこしに松植ゑて、松の嵐を帆にうけて、寶が嶋とぞ走りつけり。色々寶をつみそろへ、やるぞ晒の河口。ションガイ。

○一つ謠ひませう、はゞかりながら。ところは箱館すみやの舟よ。出はやの字机ゑちぜんの、共に過ればするゑよしまるよ。末はよけれど今ふがわるい。出ては出もどる、はせては流す。能登の福浦に又はせもどす。弘化三年お午の年よ、頃は七月なかばの頃に、二百七兩の金ぬすまれて、一つ人をば疑うてみたり、二つ船中又疑ごたり、三つ港をやさがししたり、四つよその船船止したり、六つ六十になるせんどさん、七つないたり、くやんだり、八つ役所に願を上げて、九つ小宿も又其世話よ、十問屋を詮議をしても、二百七兩の金の行方はまで知れぬ。

（玉名郡）

## ぼんぼこ節

○汐日戻りに麥飯ひやかして、とろゝかくれば、オヤすましの顏で。オーサボンボコ〳〵ニヤ。

○花の熊本長六橋から眺むれば、オヤボンボコニヤ、下は白川兩芝居、少し下れば、オヤ本山渡舟。オーサボンボコ〳〵ニヤ。

○あのや浦島さんな龜に打ち乘り龍宮行き、わが釣竿を振りかためて波にゆーられ、オヤほんまのきやうてんじ。オーサボンボコ〳〵ニヤ。

（上益城郡）

## 十九文節

○一の谷まで行かしやんすか。わしやなんぼうでも離れや



せぬ。邪魔になるなら今茲に、殺いてたもれよ我夫さん。サーナンデモカンデモ十九文。

（阿蘇郡）

## 思案橋

○思案橋こえて來るはだれ故、ぢやう樣故。

○小池の眞菰いつか穗にでゝめぐりあふ。（八代郡）

## 流山歌

○よいとき生れた親の御蔭で〳〵、よいほん〳〵でみた。

○たちからの明神ましまさば、七日七夜の神かぐら、まひやすめどもつひにも大神どのはいれでもいれさせ給ふらんものかと、とかくしの明神ましまさば、おくせん萬歲の力を出し、天の岩戸を取つてひき破り、いつさい山のすぢよ。

○一方のとびらは、みのくにあふぎがはらになげさせたまふ。

○一方のとびらはもとのしづくに納め置く。その時日本國朦朧月夜となりたまふ。

（八代郡）

### きみさま節

○櫻木は冬は枯木と思へども、又來る春は花もさすらん。
○櫻木は尾ごしに見ればなつかしや、櫻の下の露となりたや。
（八代郡）

### 猿踊歌

○音に聞く、よし八代の德の淵より御舟に召され、御舟の數が五百艘、御旗の數が一千本、十二の音樂たてさせたまへば、神もいらん佛もいらん。
右は相良侯、昔日參勤交代の節、八代より舟出せし景を歌ひしものなりと云ふ。
（球磨郡）

### 螢がり

○夕風浪ふきよする澤水に、うつる螢のかげやすゞしき。
（天草郡）

### おつや

○こひしさに山めぐり、早くもこゝに木原山、松山に龍田山、ちらと見染めし紅葉山、阿蘇山、ゆふだに、にほひ岳、わたしや根子岳、洞が岳、どんな口説は飯田山、うそぢやない、本妙寺山に茶臼山、かたい約束中のぜいにや、石山木山に山鹿山。
（下益城郡）

### 鈍太郎歌

○今朝の寒さに笹山越えて、露に羽織の裙ぬらす。裙のぬれたは大事はなえど、絹布羽織の紐ぬらす。黑い羽織に大紋つけて、行けば夜な〳〵門に立つ。
○えいさどんが、承はつたか。寺の住持は坊主なり。ゑの子の母はめいんなり。とゝとかゝさん夫婦なり。柄杓じよふけは古じよふけ。鼠けた走れば猫きつと見ます。鈍太郎でございます。
（球磨郡）

### 地方特有歌

○宇土で名物轟の水、五色山、人は不知火、桂原、梅の生木の椽柱。
（宇土郡）

○南關の四方のけしきをながむれば、東は小富士で南をがみ松、北は書院のゑ土手つゞき中を流るゝ龍瀨川。
備考　小富士は本名大津山、一名舞鶴山といふ。此山は大津山河内守資基の城趾なり。をがみ松は加藤淸正朝鮮征伐の歸途八人の戰死者を葬り、參拜の目標に松を植ゑたりといふ。今尙八つ塚と稱する墓の如きものあり。書院は加藤淸正の城を築かれし跡と稱する高原にあり。此處に書院の松などいふ名殘れり。龍瀨川は關川にて、和歌手引に、龍の瀨川と見えたるものなり。
（玉名郡）

## 宮崎縣

### 田植歌

○物の見事は肥田木の城、前に大川後にやとゞろ。
○腰の痛さよ、せまちの長さ、四月五月の日の長さ。
○臼が廻らぬ、わが氣を廻はせ。我氣廻はせば、臼廻る。
○持つたもんが長者なら、盛籠持ちや長者ぢや。コイドデードコイショ。
（西諸縣郡）
○田植上手はなかにこね、ヨレンヤルワイヤルワイエ、植ゑぬ樣なんはもとゝさいばこ、ひくにひかれてらくをめすね。ヨーレンヤルワイヤルワイ。
○丈の高いは葵の花よ。低いは寺の御庭の南竹燭よね、ヨーレン、ひくいはヨー寺の御庭の南天燭よね。ヨーレンヤルワイヤルワイ。
（東諸縣郡）

## 草取歌

○腰の痛さや、せまちの長さ、四月五月の日の長さ。
○なんぶついても此米はけん。これは御倉の中のはえ。
○沖のと中にのゝばた立てゝ、波に織らせて瀬でさらす。
○さても見事なうど山蘇鐵。花は咲かねど葉が見事。
○車廻して田の草取れば、夏の暑さも苦にやならぬ。
○今年や豐年穗に穗がなりて、道の小草に米がなる。道の小草に米なる時は、山の樹茅に金がなる。
○腰の痛さや、畝まちの長さ、四月五月の日の長さ。五月四月はおろかの月よ。あけの六月は未だ辛い。（宮崎郡）

## 盆踊歌

○施餓鬼のお庭に詣りて景を見て居れば、お庭にだん〳〵植木が御座る。その又植木は何々か。八重梅、八重松、八重櫻、お庭の御景で面白い。
○お庭に參りて見てやれば、四方に植木を召されたよ。植ゑたる木の名は何々か。牡丹に唐松、松に藤、八重菊、八重梅、八重櫻、三十二間の板椽に、十二や三の稚子たちが、唐木の机をもちすゑならべ、黄金の硯を取り出し、油煙の墨をすり流し、蒔繪の筆を染め卸し、おもひ〳〵の文字を書く。書いたる文字を見てやれば我子によかれと書いてある。
○ちゆう〳〵さいこら節や、どこでも流行る。肥後も肥前も長崎も。
○向ひ小籔にや鶯鳥が、親を大事と法華經よむ。
○天下泰平穩に、國常立の尊より、おりしよ正しく水神宮、五穀成就のさゝ踊り。末には五穀の成就して、一同家内安全のふどうも願ひ奉る。天の岩戸は昔より幾萬年の末迄も、變らぬ今のさゝ踊り。（宮崎郡）
○物の見事は吉田の城、後は山、前は大川。
○神の田なれど、お田植なれど、清めの雨がはらい〳〵。
○神の御庭の南天燭（なんてんじく）よ、一枝折れば八枝榮ゆる。
○やまたろがには川の瀨に住も。燒野のきじは岡のせにすむ。
○つほや七九郎樣な同役を殺して、御金を盜んで、末は捕らへて、竹鋸にさゝれ。イロシヤノスイソデキハジヤン。
○殿の御庭にごま植ゑて、ごまが榮えて五萬石。
○道樂馬喰の云ふ事にや、燒酎はのみたし、赤牛やうれず。牛がうれずともかけのみに、ぐつと云うちやしやんと飲め、ぐつと云つちやしやんと飲め。河原なでしこのしく、しやうぶはわれわれとわれとさつ。（西諸縣郡）
○鹿兒嶋の館、情ある館。御盃賜る、琉球で話す。山河の池は千尋。夫より賤が思ひよね。
○琉球と鹿兒嶋が地續きなれば、馬にくらして、行たり來たり。（東諸縣郡）

## 六調子

○燒酎は昔の主樣の末よ。飲めば昔が偲ばれる。（西諸縣郡）

### おちゝどの

○ごしよでん造りを眺むれば、おほはつちやうのそのやしき。そのやきにしよの色を出す。（西臼杵郡）

宮崎縣　盆踊歌

### 春

○東遙に眺むれば、東は春の景色にて、うぐひすがのきばの梅に音を出す。けゝんほろゝのきじの聲。

### 夏

○南を遙に眺むれば、南は夏の景色にて、つゝじの花咲き亂れ、とりの一聲おもしろや。

### 秋

○西を遙に眺むれば、西は秋の景色にて、きくにむらそめおもしろや。

### 冬

○北を遙に眺むれば、北は冬の景色にて、山に雪ふりしぐれ、鶴の一聲おもしろや。

中央

○なかを遙に眺むれば、四方カしほーのじせつがうつろひて、雲が五色の色を出す。（西臼杵郡）

## 極樂

○はなづゝはよはさかさまのものなれど、たこけのそーはぎの花。

○ごくらくの前を流るゝ水なれど、たこけの水はのむにのまれぬ。

○油火のきえう滅えずに生れ來て、おやをばとはで、おやにとはれる。

○ごくらくの前の小川にふみ入りて、わたらぬ先きに濡るゝ、袖かな。

○いにしへの神の子供が集まりて、やまとのことばでひをぞさみしさ。

○ごくらくの橋の上なる人々は、かねやたいこで日を暮すなり。

○わかいとて末を遙にたのむなよ。無情の風は時をきらはぬ。



○七日の五日の五日の今宵（よひ）こそ死したる人の後を弔ふ。（西臼杵郡）

## 臼太鼓歌

背に旗を負ひ、前に太鼓を着け、足を揚げ手を振り、鐘に合せて踊る。中々勇ましきものなり。

○大將軍の宮に、しちぶしのこーまはり、天より下つた駒なれば、三か月しよーにて影をさす。之れこそじやうみとうち見えて、大將軍に奉る。へーにてものゝようきには、御庭のみあそびおもしろ。（兒湯郡）

○神の御前の二本松、神の植木か、落て松か。四方にさかえてやら見事。下る小枝を見てやれば、黃金の花が咲いたよな。さて其花をつまうとて、露に袖ぬらした。お日さへ照らし給はれば、露の袂をほそや。（西臼杵郡）

## 四季

○さて春のはじめに梅と櫻はちりぢりと。

○夏は涼しき瀧の水、水に心のさそはれて、水に心のちりぢりと。

○秋は色よき紅葉葉のちるに心のさそはれて、ちるに心のちりぢりと。

○冬はあられに雪と霜、雪に心のさそはれて、雪に心のちりぢりと。（西臼杵郡）

## 梅の小木

○東を遙に眺むれば、東は春の景色にて、梅の小木に花咲いて、春の景色が面白や。

○南を遙に眺むれば、南は夏の景色にて、池の眞菰は生ひ茂り、夏の景色で面白や。

○西を遙に眺むれば、西は秋の景色にて、紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲、秋の景色が面白や。

○北を遙に眺むれば、北は冬の景色にて、松の綠に雪つみて、冬の景色で面白や。

○四節の草木おもしろや。人の心が花に似て、よそに心のちりぢりと。（西臼杵郡）

## さかへくだり

○さかへくだりのこわかしゆの、手には牡丹のゆかけさし、足には黃金のくつはいて、腰には虎毛の犬をつれ、十二ふまえた十（とを）の弓、十三はいた鳥の羽、あまたにかくらをせききれば、十二つれたかのむれを、一つのまぶしにせき出し、一つももらさずいてとめた。さてそれほどの弓とりは、みやこの方にもよもあらじ。（西臼杵郡）

○しよてんの前に參りて見れば、あら見事。庭なる松の枝々に、しんじよしやくじよのほじがなる。庭の櫻の枝々に、鶯がとまりて琴を引く。さても鶯音を出す。ざれ石や小石や。（以上を前歌と云ふ）

○先づ春の始めに梅と櫻と散り〳〵よ。音羽の瀧と申するは、夏は冷しき瀨の水、秋は色よし紅葉ばよ、冬はしーめいしーら（明カ白）雪、雪に心がさそはれて、よそに心が散るばかり。（東臼杵郡）

○師匠立て習うて、あの位にやまはず、師匠どんが恥ぢやらう。
○あかぎれ足でよーめー申すばい。（西臼杵郡）

## かづねほり歌

かづねとは秋の葛なり。

○かづねほりやむぐしや、おくはをかたけて野の中を。
○登るかづねも堀りおりや下る。下るかづねのおもしろや。（西臼杵郡）

## 亥子餅搗歌

これは舊暦十月の亥の日に、五六歳より十二三歳の子供、楕圓形の石を繩にてくゝり、繩の兩端を各五六人宛にて握り、人家の戸口にて地につけては上げ、上げてはおろしつゝ歌ふ歌なり。

○ゐのこ〳〵ゐのこのぼちやつーかんか。つけぬもんな鬼なれ、蛇になれ、角の生えた子を持ちやれ。
○ゆゐましよ沖を通る大船はいなる大工の造り初め、船は白銀で艪は黃金、こがねのせーびをくゞまして。サーヨーナ。
○エートナ〳〵、ゐの日に祝はんものは鬼になれ、蛇になれ、角の生えた子をもちやれ。
○向へのおばさん茶のみにおじやれ。今は鬼が居るからどもならん。鐵砲かついで、どん〳〵いはせて、おじやらんか。（宮崎郡）

## 稻刈歌

○ことしや豐年滿作年よ。一歩一畝に七俵。庭の榎實よ二股榎實、榎のみやならずに金がなる。（宮崎郡）

## 米蹈歌

○臼に米入れ糖ぶく時は、娘したてゝ立たすごとく。
○米蹈の米はうたずき、歌はにやはけん。歌へ歌ふなら、はよはけた。
○とろりとろりと今蹈む米は、酒に造りて和泉酒。
○なんぼついても此米はけん。どうした意地の悪米ちやろか。
○酒屋男は乞食にや劣る。乞食や夜寢て晝稼ぐ。（宮崎郡）

## 新地節

○今年はじめて御新地に出たら、ハラヨー、ぶりのにない道やまだ知らぬ。
○ぶりの荷ひみち知らんなら敎よ。ハラヨー、腰をかゞめて歌で立つ。
○故郷惡しや我古里の、ハラヨー、笠の庵りのなづかしや。
（囃）「來る時や寄りやれ。茶沸けて待つちよれ。道ばたたるけん、ひや豆腐醬油かけ。」（西臼杵郡）

## 地搗歌

○竹になりたやひちくの竹に、年に四度の誕生なさる。
○竹になりたやこさんの竹に、本は尺八其うらは、惠比須さんの鯛釣り竿ぢや。（宮崎郡）



○サーサヨイ〳〵ヨイサテヨイナ、よいはだいても、まだでやはぬが、ヨイヤナ、ハリヤナー、コリヤナー、ヤートセー、出合ひ次第にや何がな一づ。何か一つは理のある事を。（兒湯郡）

## 石搗歌

○富士の白雪や朝日でとける。御庭に井戸堀りするゐて、水の出日に金がわく。（宮崎縣）

## 木遣歌（松前節）

○エー一段目には、ヤーエヤツトコセー、ヨーイヤナ、一段目には一段松、ヨーイトナー、ソコハレバ、ハリヤリヤノヨイ〳〵、ヨーイトヨーイトナー。
○エー二段目には、ヤーエヤツトコセー、ヨーイヤナ、二段目には二段松、ヨーイトナー、ソコハレバ、ハリヤリヤノヨイヨイ、ヨーイトヨーイトナー。
三段四段五段と皆同じ。
○ちよいと、あひ（補助）せうか。ヤーエヤツトコセー、ヨー

イヤナ、ちよいとな、あひせうか、こあひせうか。ヨーイトネー、ソコハレバ、アリヤリヤノ、ヨイヤートコネー。

（東臼杵郡）

## 新築歌

○此家は何處の大工が作りしぞ。紫檀黑檀唐木を混ぜて、床柱には金の竿、いぬゐの末に井戸堀り、水も涌く〳〵金も涌く。下から龜がもり上る、上から鶴が舞ひ下る。鶴と龜との酒宴に、中の酌取りや福の神。（宮崎郡）

## 木挽歌

○おがもかろかれ、この木もよかれ。上ぢや材木の價がよかれ。

○木挽やよいもの板さい割けば、刻煙草に米の飯。

○七十木挽に物云ふな娘。木挽や七十が花ぢやもの。

○木挽さん達や山から山に、都都にや緣がない。

○山で兒が泣きや木挽の子ぢやろ。木挽ややもめで子は持たぬ。

（宮崎郡）



○サーイタ、サーイタ、ヤーホヽン、あー今度の木は大材だ。そこで力を入れて、アードートコナー、今度は皆一所に拍子を揃へて、ハラヤードートコナー、アー今度の大材はともの今度は掃子つけぢや、アレヤツタヤードートコナー、アーまだも、アーまだも、アー今度の木は、アーずらりと行くぞ。今度は用心して給もれ。アーまー一つ、ヤラヤツタゾー、今度の大材はやまゆき拍子を揃へて、ヤードートコセー、まだも〳〵、やれ拍子を揃へて、ドートコナー、今度はつーりをかまへたらうか。ハラドートコセー、やー今度のなりはゆうとすきたらうか。はーかを揃へて、ハードートコナー。

（兒湯郡）

## 船歌

○伊豆の下田をあとにまけば、そた〳〵ばんにやシユシユラのとばの浦。

○わしがお父ちやはおんどの瀨戸で、浪に搖られて鯛を釣る。

○わしがお父ちやんは河船の船頭、嘸や寒かろ川風で。

○目出度いな、目出度いな、目出度い魚は鯛の魚、いでもいつこと鯰の魚、三で狹魚やしま鰹、いつゝいわしやむろの魚、七つ投網八重鰤、九つ小鯛をかき並べ、十で飛び魚とび込んで。

○珍らしや、獨娘が妹を連れて、川にはまりてやけどをしたと、盲目が見付けて、手無しがあげたと、つんぼが聞いたと啞が云うた。

○鹿が泣きます秋鹿。寒くて泣くのか、妻呼びか。寒くて泣かぬ、妻呼ばぬ。明日は大山大鹿狩り、どうして我子も討たれます。宜う賴む山の神。迚も命のない子なら、私しも一所に殺して下しやんせ。

○一に玄海、二で遠江、三で日向の赤江灘。（宮崎郡）

○此度日向の美々津の港、美々津を卷き出しや細島の、氣はのべ〳〵と延岡の、延岡入れずの島の浦、後ろは高山前は海、木の柄の錨をどんとつく。鶴は居らねど鶴見崎、夜舟を乘るなよ千崎を、かまへあらしを帆にや入れて、北の風まんまともで、とこ姉さん下下り。（東臼杵郡）



## 漁歌

○きさらぎや〳〵、きさらぎ山の楠を切りてはつりて、板に挽く。四十四枚にひき割りて、船をつくりて、今おろす。白銀柱を押したてゝ、黃金のせびをくゞませて、手綱は荷繩は琴の絲、帆は金襴の卷物よ、ともに大黑艫にゑびす、中には十二のお船玉、とものまむきに松を植ゑ、其松嵐を帆に受けて、千里萬里は一日和、とばやあの日によらずとも品川に。ションガエー。

○よい名を私が貰うて三番叟、前なる袖には鈴を持ち、ちり、や、ばらりや、やほんは、なるは瀧の水お日はてる。ションガエー。

○目出度きものは芋のくき。上には白銀露を持ち、下には四十二の子をくばり、萬の倉よりや子は寶。ションガエー。

○目出度きものは破れ蚊帳、つるかと思うたら、かめが出た。ションガエー。

### 酒造歌

○今のとろりとろりとする元は、酒に造りて和泉酒。いづみ酒なら、嘗もつと欲しい。もろて育て、和泉酒。和泉酒なら人に飲ませ。人に飲ませて喜ばせ。

○薩摩二才衆はどこでも知れる。尻をちんとからげて。ヨイヤナ。

（宮崎郡）

### 的射歌

○向うは金の的、手前白木弓、手先き悪かれや當りやせぬ。ハラヨイソラホンニー。

○内の男とまー的射て暮らす。あとの女子のまー泣いて居る。ハラヨイソラホンニー。

（西臼杵郡）

## 鹿児島縣



### 水汲文句

正月元日の朝、鶏鳴より初水とて汲み初む。一番水は唐芋の根入り良き抔云ひて競ふ。

○年男が年改まりて、年の初めに水汲み初をする時は、南下りの堀川に、水は汲まずに黄金汲む、〳〵。（熊毛郡）

### 臼おこし（又臼搗き始め或は臼祝ひ）

○高砂の尾の上の松で臼きつて、其枝々できねきつて、千徳々萬徳々。

一月一日の夜明、臼の祝物に向つて右の歌を三唱し、杵を取りて臼搗く眞似をなし、其臼に祝ひある餅を貰うて去るなり。

○年初めに年男が米搗き初めをする時は、東高砂が北の野隅に立つたる、五代の松で臼切つて、其枝々で杵切つて唐の鳥と日本の鳥と飛や渡らんその内に、千徳々萬徳々とつかせ玉へよ、伊勢米、〳〵。

○東こうさが山に立ちたる、尾の上の松で臼切りて、其枝々で杵切りて、唐の鳥と日本の鳥と、飛び渡らぬ内に、搗かせ給はれ、伊勢の上米、伊勢の上米。

○東こーさが山に立ちたるをのへの松で臼きつて、其枝々で杵きつて、鳳凰の鳥のおそまぬ内にさんさつつかせ給へ、七五三一、七五三一。

（熊毛郡）

### 船祝歌（一名綱さらへ）

○詞「ともへ〳〵ともに申し」。「何とうけたまはりませう、」「時頃潮もよささうに御座る」。「それ一段よう御座りませう」。（歌合唱）「彌三やーざう〳〵〳〵、伊藏いざう〳〵〳〵、英三えいざう〳〵〳〵」。（詞）「取楫」。「オツトー」。「おも楫」。「オツトー」。「今の楫取つてさふらふ」。（歌）「やーらいめでたいなー、めでたのわかまつー、枝もさかゆる、〳〵葉もしける」。「なほもめでたいなー、御世はめでたのー、帆矢帆も、うやみなー、とーどに、そよに、そよ〳〵と〳〵、吹いた嵐に乗りだすー。それも船頭衆の仕合はせや。サーノ」。「佳例よしや、佳例よしの船に、なだよしをーのせて、船頭から船中衆みな佳例よしで」。

右船祝の歌は毎年正月二日日の出の頃、船頭始め乗組員一同甲板上に整列し、各所定の位置に就き、先づ船頭より初めて右の歌を謠ひつゝ、一切の船具を取揃へ、乗組一同之に和して船玉様を祭り、以て其年中航海の無事を祈るものにして、其式甚荘厳なるものなり。而してこの歌は正月二日より以外には決して謠はざる定なりと。

（熊毛郡）

### 正月七日祝歌（くさいもん）

若きものども各戸につきて謠ふ。

○祝ひ申そ、〳〵。いつのよしな、今年はこれの門松榮えた。そーれに榮えたる枝に鶯がとまつて、さえづるやうに、家の亭主これのやどを見渡し見れば、四方のすみ〴〵の湯水酒の湧くごとく、黄金のびん白銀のひしやく、汲んでも〳〵盡きもせん。祝うてやほかほー。

○祝うて申す。こーれの門松いつよりも今年は木戸の松がさかえーた。榮えたもろーよ。西の方の技にはとびよがとまつて、東の方の枝には鶯がさがつて、鶯がめーに生ひたる稻は、一株かへば千石、二株かへば二千石。そなたの宿を見渡し見れば、米の俵千石、籾の俵二千石、祝うて申す。（普通の家を祝ふ歌）

ろーよは「道理」の意、とびよは「鳶」のことならん。めーには「眼」のことなるか詳ならず。かへば「かれば」の訛。

○祝うて申す。こーれの御船に白銀檣を押し立てゝ、黄金のせーびよくるませて、大帆にや綾錦、手繩、みなは琴の絲、寶一艘積込んで、寶が島に打向けて、思ふ港にそよそよと祝うて申す。（漁船等所有者の家を祝ふ歌）

○祝うて申す、こーれの御庭に、ゆ川を堀りて、水は湧かねども、泉酒の湧き候。白銀壜に黄金のくしやく、汲んでも汲んでも、盡きしはせぬ。祝うて申す。（井戸の在る家を祝ふ歌）

（ゆがはは「井川」、くしやくは「柄杓」なり。



○これの御寺のみうちには、打出小槌うつでんこーづゝこーぶくろー、ゆはいのすーみーあるとやー、つる龜がほろ〳〵ーかんめこーでさふらふよ。四方のすみ〴〵にぜんとかねを祝うて申す。（寺の門前にて歌ふもの）

○これのだんなさまーきんかたびらめして、おーびはにしき、かたなはひぜん、大小めされ、ふすま障子をひきあけて、こがねのさしまくらー、ひきあけみたればー、あかいこそでむす〳〵（生ひ出づ）しろい小袖むす〳〵、六つなるちごにしよーがすーすきむーすきたてがみ、おらきくのはな、はなおいきせて祝うて申す。（役人等の宅にて歌ふもの）

○祝ひ申さう。いつもよい、今年こーとしはーきどの門松がーさーかえたーも、ろーいよ。西の方の枝には、とーびほが道理さがつて、東の方の枝には、うぐひす鳥がとまつて、鶯鳥のまへにー、おえたるいねは、一本かれば千石ー、二本かれば二千石、そなたのやどを見渡し見れば、米のたはらが千石ー、もーみたはらが二千石。とーびは滿足祝うて申す。（普通の家の門前にて歌ふもの）

「祝ひ申す」と亭主に案内を述べ、左の通り歌ふなり。

○ヒョーソーラ、イヤソーロヨ、福歳物や、さうろよ。これの御亭主様の御屋敷は、何時よりも今年は門の松が榮えた。ヒョーさかえたもろーりよ。ヒョー四方の隅々に、泉酒が、たとへた。ヒョーたとへたもろーりよ。ヒョー白銀の曲げ桶に黄金柄杓で汲みたとへたもろーりよ。ヒョー西三條四條には白銀の山を築く。東三條四條には黄金の森を築く。ヒョー黄金花が蕾うで、錢花が開いた。ヒョー開いたもろーりよ。ヒョーこれの殿の御内に祝ふ物は何々。ヒョー錢と米を祝ふよ。ヒョー祝ふこそやろーりよ。ヒョー雪豐年の年ならば、とんぴ寶がとんぴ來て、鶴と龜が舞ひ來る。ヒョー福吉、萬福時あるとは冥加に叶はせ給へよ。ヒョーこれの殿の御内に丁度御祝ひ御籠めやれ。

○ヒョー久歳文ぢや候よ。ヒョー何時よりも玆年は、ヒョー門の松が榮えた。榮えたこそも道理よ。ヒョー是の殿の御内に、ヒョー錢と米を祝ふよ。ヒョー東三條四條には白銀の山をつき、ヒョー西三條四條には黄金の森を築く。ヒョー四方の隅に泉酒が湛へた。湛へたこそも道理よ。ヒョー白銀の曲り桶に、黄金のちやぴ杓で、汲み湛へたこそも道理よ。ヒョー鶴と龜が舞ひ來た。ヒョー三十二艘の千石船を積み込んで、えいやらさらりととぎ込んで、ヒョー町の御祝ひ御込めやれ。

○ヒヤーこれにこーそや候よ。ヒヤー福歳物や道理よ。ヒヤーこれの主の身内に、ヒヤー祝ふものは何々。ヒヤー金錢と米を祝ふよ。ヒヤー祝ふこそや候よ。ヒヤー何時よりも今年は、ヒヤー門に松も榮えた。榮えたも道理よ、豐年の歳なれば。四方の隅々に、泉酒がたゝへた。ヤーたゝへたやも道理よ。ヤー黄金しやみしやくで、くみたゝへてやー道理よ。ヤー火の神、田の神、御門の神、ヒヨ三十二方の作り物、ヒヤー祝ひこめてや道理よ。ヤー富貴自在みやうがに、かなへたまへば、ヤー西三町四町には白銀の山つく。ヒヤー東三町四町には黄金の森をつく。ヒヤーこれの御門の門を見てやれば、ヤー黄金の門がたしてや道理よ。ヒヤー黄金花が蕾んだ。ヤー錢花が開いた。ヒヤーこれの御庭の景を見てやれば、ヤー金銀の毬

がかゝりける。ヤーよき豐年の歳なれば、ヒヤーとんび袋飛んできて、ヒヤーとんび寶置いて行く。ヒヤー鶴と龜も舞ひ來た。ヤー是程目出度い祝儀を、御受けなされよ。ヤーちやうど御祝をこめなされた。御祝儀目出度し。

右の歌は、正月七日の夜、農作の祝として歌はる。

○何時よりも舊式の門祝ひ申す。（青年）ヒヨ何時よりも今年は門の松が榮えた。（少年）ヒヨ榮えたもー道理よ。（青）ヒヨこれの殿の御内に、鶴と龜が舞ひきた。（少）ヒヨ福龜めして候よ。（青）ヒヨ四方の隅々に泉酒がたゝへた。（少）ヒヨたゝへたもー道理よ。（青）ヒヨ錢と米を祝ふよ。（少）ヒヨ祝ふこそやそふろよ。（青）ヒヨ錢花が蕾で黄金花が開いた。（少）ヒヨ開いたも道理よ。（青）ヒヨこれにこそやそふろよ。（少）ヒヨくさいもんや、そふろよ。

（熊毛郡）

## 穗垂挽

一月十四日朝、園子用餅搗の時の祝ひに歌はる。

○米も穗もぶらぶらー、麥粟の穗もぶらぶらー、唐芋はごとごとーぶんどーささげは、ぽつとせー。（熊毛郡）

## 蠶舞（一名・このみやぢやう）

○これから申す、門から申す。これの御家は裕福の御家と、見掛け申すが、九十九かいの、このみやぢやうを舞はし舞はするさあーきに、綾をはーへて、錦を擴げて、是から思へば、東の峠の朝平の木蔭の雉子鳥の雌鳥の、右のおぼりばね左のかざきり、おつとり合せて、一羽がひすくへば、千枚すーくふ、二羽がひですくへば、二千枚すーくふ。三千枚の子種をよーせ集めて、篤と產ませて、蟻ありごになるときやーはいりやい、りやいと申す。つみらごになるときや、むつむつと申す。蟲に起るときや、雨桑も嫌はず、露桑も嫌はず、ながめになるときや、はいのまいと申すが、春駒は、夢に見てさや、ものうきもーのと、聞こえ申すが、龍の駒かよ。（テンテンと戸壁を打ちて拍子をなす）まい蘭にまはせて、そーのまーいのかたさは、あんまがはらの、石堅固にしよーりも、まーだかーたい。このみやぢやうを、尙堅固祝ひに祝うて、おじやる、ろーから、かがせたまへよ、御媼ばーばーぢやうさま、娘孃さま、丁度御祝ひ、御籠めやれ。

備考　正月十四日の晩「祝ひ申す」といつて一人座敷に上り、舞子となりて舞ひ、他の人數は皆庭に立ちながら右の歌を歌ふなり。

○（兒童）御亭主樣〳〵年々の通り、御祝儀を御祝ひ申上げ申す。（亭主）あー祝うて給ふれ。（兒童合唱）ヤーラ〳〵、ハ是から申す、門から申す。ヤーこれの御家は裕福な御家と見かけ申候。定めし木の實や祝うて御じやるどーず。九十九かいの木の實や孃のまはし召す先に、綾をはへ錦を廣げ、ヤー篤と踏ませて、是より東の朝ひらの峠の、けん〳〵鳥のめん鳥の、右のおもひは左の風切、おつとり合せて、一羽かいてすくへば、千まゆすくふ。二羽かいてすくへば、二千まゆすくふ。三千まゆの子種子を寄せ集めて、蟻子になすときは、はいりやいりやーと申す。はいりやいりやーになる時は、つぶらごと申す。やーふじに起れば、春のしゆうを召す。春駒を夢に見てさへ物憂きものよ。まして況んや龍の駒から駄らんだ此の繭の〳〵、かたさはかんまがはらよ。まして況んや龍の駒から駄らんだ千秋萬秋目出度御座る。（亭主）あー内に御じやれ。

最後に「あー内に御じやれ」を亭主言はざる時は、童男等不平にして「すくべー、なれ〳〵」と言ひ放ち去る。舊正月十五日に作の祝として、木の枝に切り餅を貫き、家の四隅及び門に挿す。而して多くの童男一團となり、各戸毎に庭より右の歌を合唱し、終りて年長の者二三名家に入り、盃を受け、引き出者に亭主より大なる餅數箇を貫ひ去る。

○ヤー是から申す、門から申す。ヤーこれの御家は裕福な御家と見掛け申候。定めしこのみや祝うて御座る。上極上の桑の葉はこのみやぢやう。申しまつるさきに綾をはへ錦をひろめ、やーとーとふませて、これよりや東の、朝平のたうけの、雉子鳥の女鳥の、右と思へば左のかざきり、おつとり合せて一羽がひぢや千枚、二羽がひぢや二千枚の三千枚の子種子をよーせ集めて、蟻子になるときや、粒子と申す。粒子になるときは、はいりやいりやーと申す。やーふしにおきれば、はぢの用意をめさる。はー

るごまは夢に見てさへものよきものとなして、いはいはじょーのこまかららんだんやー。此繭の繭の堅さは、あんまがはらの石よりや、まだ堅う御座るららんだん。上極上の桑の葉は雨桑も嫌はん、露桑も嫌はん、赤繭白繭かがせ給ふは、母女樣かららんだん。

右の歌は正月十五日、農作祝ひの一部として子供の歌ふもの。

（熊毛郡）

## 御田踊（一名棒踊又田植踊）

○苗は小苗で一本苗よ。よねが八石八百石、九石になしてくまにまるらせ。

○物の見事は吉田の城よ。後は山で、前は大川、花の流れ。

○むかへ此地が地續きならば、なるこさけて花の鳥を追ふ。

○花もいろ〳〵多けれど、手にそむ花はとつさごの花。

○花たねとると日を見れば、月の九日、日の七日。又日を見れば、かのえかのとのかのえさる、あかりとの風。

○けふの日を見れ、御日を見やれ。西山木蔭におてんどさまのちろ〳〵。

○おしろが山は、まへはたいがは。

○七はた立て、筬の目の數。

○やけ〳〵雉子は岡のせに住む。

○霧島躑躅は黃金花さす。

○たのかみ山は躑躅卯の花。

舊二月村社竹田神社（舊日新院公を祭る）前に於て、毎年此踊を執行し又村社伊勢神社例祭の後にも盛に踊ると云ふ。

（肝屬郡）

○燒野の雉子は岡のせに、そーそりやようやれ。

○一本苗は稻の八石。

祭禮其他式のとき、十數人鎌棒或は長刀等をもち、丁々と打合せて躍る時、列外に在る二三人のはやし方は、右の歌を三度四度くりかへしくりかへし、音を長く引いて歌ふなり。其間舞手は合圖にイヤサエー〳〵など



○めすが、ころもよいころ、あがりごろ、あがりとの風そよ〳〵とふくかな。

（姶良郡）

と囃す。

○實に面白や、年の內より春は來ぬ〳〵。鶯がほーほけきやうと囀りて、軒端の梅に宿しつゝ、春や人につげつらん。りう（又じう）のさんみつ深けれど、かゝる調をきくからに、若しみつけてたのしみぬ。あけとほやらん面白や。アーヒーエー。

○千里駈ける樣な虎の子が欲しや。アーエーアーハツ、便りき、たいきかせたい。アースサノイチョイ〳〵ノー。

○何時も熊狩り八兵連れて、龜井、片岡、源八兵衞は、エー〳〵エー〳〵ヨーイヤサー、それさ、それ八千代で、エー八千代取るかよ、九重を取るか。二ツ取りたら八千代が增しよ。

○おばはーどちに行く三舛樽提げて、サー〳〵嫁の在所に、ヨーイヤナー、嫁貰ひエー。

毎年陰曆九月氏神祭の時、赤襦袢を着、其の上より五色の布を褌十字にあやどり、後に長く結び垂らし、各七八尺の丸き樫木の棒を以て、右の歌を謠ひ、打ち合ふなり。尤も人數に限りなきも、二列となり、各列同人數にて各列の先頭は太鼓を打ちつゝ、其拍子をとるなり。

（熊毛郡）

○おせろは山で、前はだい川。

○せのぢが、濱の砂のめのかず。

○武藏の原の、かやのめのかず。

○霧島松は、こがね花さす。

○山田の牛は、木を引きだす。

○鎌の柄が折れた、三把おくれた。

○かたげたつとは、中は雪めし。

○燒野の雉は、岡の背にすむ。

備考　三尺棒の歌は早く、長刀の手は稍遲く、六尺棒の歌は最も遲く歌ふ。

（揖宿郡）

○後おせろは山で前は大川。

○霧島松は、黃金花咲く。

○一本苗は、米で八石。

○清めな雨は三度ばら〳〵。

○神に物参り、今こそ遅る。　（川邊郡）

○一本苗は、米が八石（八石は處に依り百石又ははるとも謠ふ）
○後は山で、前は大川。
○清めの雨は、三度ばらつく。
○今こそ通ろ、神にものめい。
○武藏の原の、茅の根のかず。
○鳳仙花は、もめば手に染む。

傳へ云ふ、今を距ること百五十年前、禰寢丹波守清雄農事に注意し、擊劍の淺山流より棒踊を案出し、歌は武士踊の調子より作り替へて、農民に踊らせ、農事奬勵の方便として農作を祈らせたりと。　（日置郡）

## 苗取歌

○イーヤーレ、九石蒔きの御苗を、ヤーレー何時とらうとも出よれ。ヤーレ、御苗とりと云ふならば、ヤーレー、婿も出てとらうよ、三葉さいたる御苗を下に手を添へ添ふよ。ヤーレー、苗採り上手のとる時は、ヤーレー、下に手を添へ添ふよ。ヤーレー、苗採り下手のとる時は、ヤーレー、うれさきつかんでのせぴき。

右の歌は神社の苗採りの時のみ歌はる。

○エー苗代では苗の葉、のーにでーては百合の葉。
○なへしろの植木は、始めてうーゑた植木よ。そのうーゑ木を、そーだてゝやうじによかろ、けーるもの。
○さー〳〵と採る苗やれ、さーみつばたいやれー。
○さーよつはにもなるにや、ともとまさつとやれ。
○苗採り上手の採る苗はもとに手を添へ、苗採り下手の採る苗は、うれ先つかんで、のーせ引き。苗のすその揃はぬはー、やーど、置けば揃ふよ。　（熊毛郡）

## 田植歌

○わかいこよ、わかいこ。かみーよーなづる、わかいこー。
○作れ〳〵、そーとめー、笠かうてかぶせうーよー。
○日暮の千鳥が、笠の緣よ廻るよ。何ようたうて廻るか。とむらたうて廻るよ。
○おきの〳〵たーなかにえぶりさす、たー中の苗、かぎりともいふならば、ふみこみ〳〵植ゑて行かう。しろかきりといふならば、走る〳〵植ゑて行かう。
○今日此の田に參りようたが、明日又どなたに參りようか〳〵。ちくらが沖の種子が島、稻田大明神の御田をば作りまします。ヤーハー。七草を十草に分けし種子が島、波の上にも守りまします〳〵。ヤーハー。
○宵てんまのかはせ出に、ヨイ〳〵、聲を取られた、川風に。沖のとなかにはたなき、波に織らせて瀨にきせる。ちいさいのー。　（熊毛郡）

## 草切歌

○アヨー、草は切りてもたばりはほてよ。かんめもどりのはづかしさ。
○いたて見やんせ、平山の廣田。いなし處と音に聞く。アーヨーナーナー。　（熊毛郡）

## 安城踊

又掛打太鼓（太鼓を掛けて踊れば）、大踊（多勢にて踊れば）、づんちきちん（鐘太鼓の調子より）とも呼ぶ。元安城村より起りたりと云ふ。村民神佛に希願し、成就したる時の踊にともなふ歌なり。

○この城の西と東の山見れば、木の葉の上に黃金の花咲く。朝日さす、夕日かゞやくとのもとに、黃金の花が咲きやこだるゝ。
○是の御庭にひよこが遊ぶ。皆國々は太平樂、彌勒の御代と謠ふ鳥、是の御庭のいんるの角は、さんほ榎、元は白銀白藤かゝり、枝には黃金がなるそよ。
○東長者、西長者、中なる長者のちやうけには、黃金が九つおいたよなー。一つでしよていにまるらせう、二つで長者になるなれば、黃金の御門を立て申さう。黃金の御門が立つなれば、やりでもがりをゆはせうよ。やりでもがりをゆふなれば太刀でとべりをはらせうよ。刀でとべりをはるなれば錢でついぢをつかせうよ。錢でついぢをつくなれば、やら〳〵みごとやらみごと。（熊毛郡）

○ちとせふる松のみどりも君が代も、いまこそちとせのはじめなりけり。
○ときはなる松のみどりも君が代も、いまこそちとせのはじめなりけり。
○わか綠いろもかはらぬ松が枝に、いまぞちとせの初めなりけり。
○今は難波に何はやる。うらのれふしが綱をひく、えーさら〳〵と綱をひく。
○とても參らば清水に、花の都を見おろして、おもしろや、いよのかたゞ〳〵。

明治三四年の頃迄は高山士族出揃ひ、竹田神社前（舊日新院公を祭る）にて、毎年六月十三日に此踊を爲し、甚盛なりきと。

（肝屬郡）

○千歳ふる松のよはひも君が代も、今こそ千とせのはじめなりけれ。
○常盤なる松のみどりも君が代も、今こそ千とせのはじめなりけれ。



○深みどり色も變らぬ松が枝は、今こそ千とせのはじめなりけれ。
○今は難波に何流行る。浦の漁師が網をひく、エー〳〵〳〵〳〵〳〵、さら〳〵と網を曳く。
○秋の田の面に何流行る。賤が鳴子の繩を引く、エー〳〵〳〵〳〵〳〵、さら〳〵と繩をひく。
○御崎山をば削り平げ川にして、船をやりたやな、おらが船をや。
○とても參らば清水に、花の都を見おろして、面白や、いよのかたゞ〳〵。

（熊毛郡）

## 兒踊歌

○君が惠は清瀧川の、流の末もすむ御代なれや、民もゆたかに、サンサアルヒハサ、あらししづけき此時よ。
○松はもとより常盤の色よ。梅は匂ひよ。柳はみどり花は紅、サンサアルヒハサ、あらし靜けき此時代。
○幾久し、二葉の松の千代のみどりも今年より、色もまさりて常盤木の、松と竹とのすぐなる御代は、代々をふるとも盡きせじな。
○春はまづ咲く梅の花、招く尾花にさそはれて、行けどはてなき武藏野は。
○夏は澤邊に飛ぶ螢、いとゞこゝろのあこがれて、行けどはてなき武藏野は。

右加世田士踊歌は島津日新公の作にて、出陣前勢揃の節、必ず諸士に命じて踊らしめ、合圖の手拍子を以て、忍び間者を試みたりといふ。然るに島津貴久公薩隅日三州の大亂を裁定し、初めて加世田に入る時、鄕内の諸士之を萬瀨川に迎へしに、惣て供を命じて、御屋形に著く。日新公は貴久公の爲めに三州の平和を祝せんと、諸士をして此踊をなさしめたり。降りて貴久公逝去の後、藩主命あり、其御忌日に當り此踊を踊らしむ。故に今に至るまで毎年舊六月二十三日、加世田村東加世田村、即ち舊加世田鄕の鄕士は、大半來り集りて此踊りをなすを常とす。兒踊は十四歳の男兒の踊りしところにして、今は廢れたりと雖も、其歌曲は當村士人の間に傳へらる。

（川邊郡）

## 二歳歌（一名兵兒踊歌又强張歌）

○千代にな、八千代はふるとも動かしまい、君が治むる國ぢや程に。
君前祝等の時先に謠はる。
○敵がよせかけたりとも、逃しやしまい、さいた刀のやくぢやほどに。
他鄕の兵兒に對する場合に先きに謠はる。
○みさき山をばややけぞにたひらげて、川にして船をやりたるうらが船。
最後の歌は諏訪神社へ花火を獻じて歸る時に、歌はる。最終の花火を頭上に差上げ、花火を行ひて歸る。最も危險なる仕事なり。
○へこさん御前は、どこに行かさんす。おいどま出水になぐさみに。そんならわたしも、つれて行かさんせ。こまい子供はじやまになる。なんのわたしが、じやまになーろかいな。そんならけもーけ。さいまなこ、姉さんどーしゆかな。かぼちやの、ごまじゆり、どじよのあんかけ、

うまかろなーな。よかろなーな。　（姶良郡）

○エーくゝ若竹の世々のするまでの君さま、イヨこのまことに千とせふる、サ谷の流れに龜遊ぶ。御代はかはらで長久安穩ぢや。

○エーくゝ千世をへとなくや雛鶴の君樣、イヨこのまことにをさまりて、サ谷のながれに龜遊ぶ。御代は治まる長久安穩ぢや。

右二才踊は四五人の鎧武者を先着とし、他は向鉢卷をしめ、陣羽織を着、尻をからげ、双刀を帶びて踊る。慎重にして活氣ある踊は、よく高雅勇壯の歌曲と合し、毫も卑俗の嫌あるなし。　（川邊郡）

○きろーどのこそ、だてにとらへ、みはぼたんきろー。くわらん（花壇）に、菊うゑて、切るな、こやすな、枝をるな。きろーどのたより花きらう。くわらんに立つ竹は、もとは尺八なかは笛うらは、諸國そこくの筆のぢく。

毎年盆祭に社前にて踊る大鼓踊なり。　（熊毛郡）

## はじめの庭

○佐渡と越後のさし向へ、橋をかけようか、あれへや舟橋を。はしの下には鵜の鳥が、鮎をくはへてふりしやんと。

○沖のかもめに物問へば、我はたつとり波にとへ。

○集殿作りは、やら見事。柱は何本立てたよな。六十六本皆黃金。たる木口には金をぬき、上はひーはだ、のーせぶき。のせぶきには、舟作りは、やら見事。

○ひいてものゝよーきには、夜明かたの横雲。

## 中の庭

○東長者西長者、中なる長者の茶受には、黃金を九つおいたとさ。二つは諸ていにまゐらする。七つで長者になるならば、黃金の御門を立て申さう。黃金の御門が立つならば、錢でつきぢをつかせうよ。錢でつきぢを築くならば、鎗でもがりをいはせうよ。やりでもがりをゆふならば、太刀で扉をはかせうよ。たちでとびらをはくならば、やらくゝ見事やら見事。





○ひいてものゝよーきには、夜明かたの横雲。

## 末のには

○この寺にひよこがあそぶ。みな國々も太平なるが、みろくの御代とうたふ鳥。

○この寺のいぬゐのすみの三本榎、えの實はならいで黃金なる。

○この寺の西と東の山見れば、木の葉の上に黃金花さく。

○朝日さす夕日かゞやく木の下に、黃金の花が咲きやこだるゝ。

○島原彌七は氣作よし。花の千代女に暇出す。それが、いとまか、おなさけか。その時、彌七のはなむけに、五貫かたびら、二貫帶、それを、千代女に參らする、その時、千代女のはなむけに、元結百かの花實藏、それを、彌七にまゐらする。その時、彌七は舟を出す。乘りておじやれよ、平戸まで。平戸までこそ帆も見ゆる。

○ひいてものゝよーきには、夜明かたの横雲。（熊毛郡）

## 太鼓踊歌

○敦盛殿は御裝束村重籐の弓でんじ（手にしなるべし）、眞羽の矢そろへ十二筋、しよ年（少年）年は十六歳、軍は今朝が初めなり。

○今度富士野の牧狩は、諸國大名の馬揃へ。曾我の十五（十郎五郎の義なるべし）はある兄弟、親の敵と志す。

○淀の川瀨の水車誰を待つやらくるくゝと。

○熊谷次郎直實殿は敦盛殿を打棄てた。敦盛殿は組み伏せられて、よにくるしけの息をつく。

○肥後の高瀨の二本松、肥後に靡かぬ二本松。音に聞えし高砂の、松の葉色は常盤山。　（川邊郡）

## 盆踊歌

○高砂やこの浦船に帆をあげて、月諸共に出潮の浪も淡路の島蔭や。

○武藏野に須摩や明石の名所もうつして、此處に照る月の眺めはいつもひの澤や。（ひのさまや、又いろ澤や、とも云ふ）

○ふしぶしをかさねし若竹の、直なる御代は何時までも、枝も榮ゆる葉もしげる。千代の始めは〳〵。

○秋の田のかりほの色を見るからは、壹歩に米が七俵、さても見事なみになりた。今日から鶴が六つつれて、又六つつれて、十二つれ、其時鶴が、うたをよむ、御代も永けれ、世もよけれ。

○さても見事な、たからお舟が見えた。舟は白銀ろはこがね、高いやぐらに積みかさね、とものはぐろも、ほにかけて、ろかぢをそろへて、おせ〳〵さー〳〵やー、とんとろと、みなと入る、こゑをそろへて舟あそび。

○今歳の稻の葉色を見やれ。今歳の年は賑ひ年よ。白銀延べてたすきにかけて、黃金の舛で米はかる。

○御寺のけいきを見やれ。十二か三かのちご達が、白銀五机するゑならべ、吾も人もと學をなす。父さんは何をなす。きんらんろんすのけさかけて、ほけきやうらんぷで面白いー。

○種とりて、うれしうなれば武藏野の、せまくやらん吾思ひ、草繁れ〳〵よ、治まる御代こそ芽出たけれ。



○千早振る、千早振る、神の御前の鈴の音、神樂をとめの颯々の聲、萬歳樂には命を保つ、あひおひの松風。

○君が代は治まる國や四つの海、岸打つ波は閑にて、一世を過ぐるひなづるが、直ぐなる枝に巢をくんで、惠も深くたまがはや（又とまがや）

○千代を重ねし常盤の松は、名をも身をもあふぐなり、枝もあをみて千代の春。

○南さがりのほり川に、白さぎおりてほろろ打つ。ほろろは打たいで鶴の子の、錢金含んであひおひの松風。

○今年（早稻）やよいとし、穗（中稻）に穗がさいた、わせに八石、なかてに九石、晩稻増しておくてにや十二石。

○松は唐崎、時雨は富山、月の名所は須摩明石、青葉を殘す一の谷、扇子かついて招かんせ。

○ちはやふる、神のおまへの鈴の音、かぐら少女の、颯〳〵々の聲。

○まんざいらくには、命をたもつ、あひおひの松風。

○武藏野にしまや武藏の名所を、うつして此處に出る月を、眺めよいつもいろさはや。

以上三章は願ほどきの踊にも用ゐらる。

○釣りて來た、はねて來た、大鰹魚を釣りて來た。木綿帆を掛けて、笑うておじつたー。

○うれす目出度の若殿樣よ、御世も永かれ世もよかれ。

○今年や豐年滿作ちや、〳〵、道の小草に米がなる。

○そね（魚の居る處）には鳥卷き（魚の出で居る處に鳥の集まるなり）、中海は出魚（魚の多く遊泳するを云ふ）、灘の雜魚場には雜魚が涌く。

○世々を重ねし若竹の、すぐなる御代は何時までも、枝も榮える葉もしげる。

○面白や、民のかまどを眺むれば、早夏も過ぎ秋の來て、もみぢは今ぞ盛りにて、むらがる蝶の遊びにぞ、心もはれて面白や。げに思ひ出にしほーりあみ（蜘蛛の巢）手ごとにとりてかけむとて、群る蝶を追ひまはし、ひまなくまなし遊び遊びて、今ぞかへる。

○種子取りて嬉しうれなば、武藏野も狹くやあらむ。我思ひ草、ヒーヨー、茂れ茂れと、治まる御代こそ目出度けれ。

最後の歌は種子島信基公始めて南海十二島の主に封ぜられ、島に入りし時の作なりと云ふ。（熊毛郡）



○年の內より咲く梅の花、燕早く目に懸る、お顏の露袂に殘る。

○白いのかたに、六字を書いて、艫て行くもの極樂に。

（川邊郡）

○「ちとせまでサテ、」かぎる松さへ今よりは、君にひかれて、ノーサテ、よろづよやへん、君にひかれて、ノーサテ、よろづよやへん。

○「つきもせぬサテ、」君がよはひは、幾千代も、かはらぬ松の、ノーサテ、色にこそあれ。

○「君が代にサテ、」あふは誰しも嬉しきを、花は色にも、ノーサテ、出でにけるかな。

○「佐渡と越後は、」筋むかへ、橋をかけうや、船ばしを。いづれうき身や。

○「いざやまゐらん、住吉にな、」明石むこ山見渡して、面白や、イヨノかた〳〵。

○「千代ニナ、」八千代はふるともや、うごきやせまいの、君がをさむるや、國ぢやほどにな。

「……」の分は歌揚のみ歌ひ、他は惣勢にて歌ふ。（薩摩郡）

## 殿の御庭

○とのゝおにはに、梅と櫻が見事咲く。一の小枝につぼみにさいた、しんとろとろと。エーく。

○とろりとさいた、オーその枝とては、末迄も末は多いて、ヨイサドツコイ、さいたはー。（熊毛郡）

## 祭禮踊歌

打込

○天下泰平長久に、治まる御代こそ久しけれ。峯の松風さーく雛鶴がちとせずも、末もはるかに祝ひ治むる。ヒーヨー。

踊歌（扇子）

○千早振る、ヒーヨー、神の御前の鈴の音、神樂少女のさーさつの聲、萬歳樂には命をたもつ相生の松風。

同（手）

○松は常盤木色ぞいまさる若みどり、千代を爭ふとも鶴の、雌雄の翅に養はれ、梢にす鳴くひなの聲、雲井長閑けき春なれや、ようもうらくうらかに庭の面。ヒーヨー。

○武藏野に行き暮れて、月を眺めて草枕、さやけき夢に似ると見て、袂をしほるうたゝねに。ヒーヨー。

同（扇子）

○面白や高野の原の秋の日に、小たかのすゞの音高く、勇む心が若たかに、連れて我家にかへりける。ヒーヨー。

○八幡參りに勇んで遊ぶ。ヒーヨー。神や久しく氏子の末も、通ふ千鳥の幾千代かけて、須摩のせきやは面白や。ヒーヨー。

○君か代は、君が代は巖となりて、二葉の松に折りそへて、千代のはじめは、千代のはじめは、さゞれいし、さゞれ石いはほとなりて、二葉の松に折りそへて、千代のはじめは、く。

引端

○南下りの堀川に、白さぎおいて、ほろろうつ。ほろは打たいで鶴の子の、錢金ふんで舞を舞ふ。まことや是れぞ目出度けれー。



**備考**　此の祭禮踊歌は北種子村西之表西町に於ける盆踊の歌なり。刀を挿し扇子を持ちて踊る。括弧中扇子とあるは扇子を持ちて踊り、手とあるは扇子を帶に挿み手のみにて踊るなり。又打込とあるは、踊をなす隊形をなすまでの歌にして、引端とは踊の隊形をくづして引き込む時の歌あり。（熊毛郡）

## 山口踊

○土佐から船が三艘ほど參る。先なは錢よ、中なは金よ、後なは土佐のわさ米よ。わさ米ならば箕でひて手ではかれ。斗かきは置いて手で計れ。

○上は山、下は清水で冷された。開きかねたよ。櫻花かよ。やらくく見事よやら見事。

○鶯がくく花踏み散らす細足でお薙刀でさくと切らばや。やらくく見事、やら見事。

九月九日節句の祝儀として踊る時に唄はる。（熊毛郡）

## 豐年祭踊歌

鹿兒島縣　山口踊　豐年祭踊歌

○みさき山をば、けづり平けて川にして、舟をやりたいおらが舟。

○とてもまゐらば清水に、花の朝顏みをだして、おもしろや。

○肥後と薩摩の間にこそ、阿蘇門嶽とて嶽がある。其嶽の御許に、天より駒がおい下る。天よりおり來る駒なれば、鞍には何鞍敷かせうよ。金覆輪の鞍を敷く。あぶみは何をさゝせうよ。白銀あぶみをさゝせうよ。其の御馬に召す殿は、薩摩の舘と相見えた。

○此の寺の西と東の山見れば、木の葉の上に黃金花咲す。朝日さす、夕日輝くとのもとに、黃金花が咲しやこらるゝ、さしやこらる。

○おーらが弟の千代稚は、まーだも幼なき十三で、富士野の戰に誘はれて、じやんばいかむとの、じやばらまきー、黑くろしやくどう、ふちかたなー、前八文字にさーさせて、味方のじようどう打ちをがむー、敵のじよーどー打ち招くー。かーかれかかれと招きをる。

以上三章の歌は、九月十一日豐受神社にて、豐年祭の

踊に合せて歌はる。　（薩毛郡）

## 秋の田

○さても目出たい御代なれば、とふから鶴が六つつれて、また六つつれて十二つれ、佐賀の松よと、こゝろざす。
○そのとき鶴が歌をよむ、こがねばなさく佐賀の松。
○秋の田の刈穂の稻を見てからはー、一歩に米が七たはらー。
（熊毛郡）

## 白鷺

○しらさぎがゝ、濱邊の松のエゝ二の枝に、しばかきー寄せて、巣をくんで、十二のまひこをうみそろへ。
○十二が一度に目をひらく、親諸共にエゝ立つ時は。
○黄金の銚子を取出す、又白銀のエゝ盃を。飲めよ大黑、歌へよ惠比須。受けて喜ぶフゝ福の神。ションガエー。
（熊毛郡）

## 川踊歌

○西は熊原、東は鹿屋、北は花岡つづきは野里、野里、岡村、堂園村よ。村のむかへにごけぞ（寡婦）がござる。ごけが息子に善太郎殿よ。今年はじめて山入るすれば、なたは腰差し、斧ふりもちて、高い山から谷そこ見れば瓜やなすびのはなざかり。
豐年祝の踊に歌はる。　（肝屬郡）

## 辨慶踊

之れは毎年舊九月氏神祭の折、辨慶の組は鎧を着薙刀を持ち、牛若の組は襦袢を著太刀を持ち、兩方共草鞋脚袢份裝にて、辨慶の先頭は太鼓、牛若の先頭は鐘を叩き、二列縱隊となつて舞踏す。

口上

○（辨慶）そーもそも吾れは西塔のかたはらにすまひ申す武藏坊辨慶。吾等も此の度思ひ立ち、五條の橋にて千人切申さばやと存じ候。イヤーツドンドン〳〵。
（牛若丸）……の出でたる處なり。
あゝどのべに見えたは辻切と見えて候。あーるまじき事。たとへ辻切に逢うたるとも、後の如くは歸らずして、たーんだ切りに切り通らばやと存じ候。牛若の使に參り、辨慶殿こそ五條の橋で千人切り申さるゝ由承り、わーれらも此度思ひ立ち、辨慶殿に太刀カうけ立ち申さばやと存じ候。
（辨慶）あーらいたはしの稚兒方や、辨慶にてはかなふまい。
（牛若）あーらいたはしの辨慶や、稚兒方にてはかなふまい。
（歌）さーゝゝゝ。（三度）
○さらば太刀を合はせ申すよな。太刀をつくとはみえつのありまの宿のまちわらめ。
○辨慶殿は薙刀以てかゝる。牛若殿は小太刀を抜いてちやうと打つ。ちよーろくじんな出て拜む。其時牛若御威勢ゝゝ。
○牛若殿はこたかのいんろーむすんでかけて、あきずの羽がへしとんぼがへりの水車を、やつはなまでは受けたれど、遂には辨慶かなはれぬゝ。
○辨慶殿は五條の橋にて千人切を始めつゝ、九百九十九人は打ちたれど、只一人にきをー落すゝ實にきを落す。
○やまがらの山にはなれて、やつゝれて、枝なし枯木でもどろうつゝ。
○山伏のときんの上におく露は、つかれのもとの涙なるもの。
○山伏のかりほーを胸におとし置く、時を何でつくらうに。
○天竺のてんだい樣の姫君は、まだまだ五つにはならねども、胸に法華經よみくだし、顏に日本の日をてらし、やせたる松にこけはえて、あかしかねたる御用意かな。
○これのおんれいは今こそ見たれ。西は杉山、東にやこよしぐ、おもてにや名所な石ごー立。
○百で買うた米は千石六斗、ごまいにや酒が七ひさけ。
○伊東殿ゝは吾がもとじよーには、かまいれて、油斷めされた星のとのゝ。
○ほしのとのゝは茶園畑に打ちすわり、ここーせんどとおまちやる。
○ほしのとのゝは、おせんようきけ、なみかけ潮打ち渡す、筑後の國よいそがるゝ。

○もーは手の下、お手の下、おさきおつはなお手の下。

（熊毛郡）

## 舟卸歌

○エーしんぞつくりて、ヤーエ、ヤツトコセーヨーイヤナ、しんぞつくりて、おろして見れば、ヨーイトコサ、ソラハーレハ、ハレワノヨイ〳〵、ヨーイトコ、ヨーイヤーナーエー、沖のかぼめの、ヤーエ、ヤツトコセーヨーイヤナ、沖のかぼめの、サマ、うきすがた。ヨーイトコサ、ソラハーレハ、ハレワノヨイ〳〵、ヨーイトコ、ヨーイヤナー。

（熊毛郡）

## 舟　歌

### 艪　歌

「歌之助詠を申せ。」

○ハート目出度のな、嬉しう目出度の、アーレ、若枝も、ソーレ、榮ゆる、ヨー葉も茂る。

○いまの歌は何といふ歌かな。歌ひさとりが、アーレーコージュー、思ひの基ぞ。

○いーじゆー行くまいな、到るとえ居るまい。鹽屋かまぢが、よめ壺の鹽さす所作が大事。いーじゆー行くまいな、我古里の柴の庵も、ヤーレ、夏みやこ、ソーレー、なれどもよ、旅わるい〳〵。われは身はたゝないふすきなためめの、ヤーレー、ごま、ひとにいはれて門に立つ。

○とろり〳〵な、サテモ此船は瀬戸内海漕き送りか、ヤーレー、艪ではやらじで、歌でやる。

○われはあはの者、鳴門昨夜出いて、此處は小鳴門の脇、錨おろして潮だらみ。

○めでたの、ノーエーソレ、若枝も、エー〳〵、榮ゆる、ヤヨエー〳〵葉も茂る。

### さ　げ

○鳴るか鳴らぬか、天につりがね、しゆ木あてゝ見よ。

○鳴るか鳴らぬか、ヨーヤコヨー、鳴ろと、ヤーイ、思へばのたのむしが、あのたのむしが、かけたたすきのよしたすきや、おほしさはなう、主と共に。

○知らで硯のえ知らですゞりのよそばに出て、染めもヤー



染めたよ墨ぞめに。

○ともとしもつゆのあひの白石で、汐がわけそよやう月月のやー出汐やの、いでししほの。

○越後佐渡島へ佐渡と越後はよー、つちむかへ、橋を、ヤーイ、はしをかけうもの、ふな橋を。

### かすり

○年の初めの初夢に、草なぎ山の樟の樹で、船をつくりて今おろす。白銀はしらおしたてゝ、黄金のせびをくゝませて、たつな水なはに琴の絲、綾と錦の帆をかけて、寶の島に乗り込んで、思ふ寶を積みこんで、其方のくらに藏めおく。ヤーラー。

### 松くどき

○やら目出度の鶴は千年、松はちとせの代々を經て、エー葉色は同じ深みどり、かゝる目出度き松は異國我朝おしなべて、エー先づ正月には門松、あなたこなたと祝ひける。エーヤヨエーヤーラー。



○君が代の久しかるべき例にぞ、かねてはうれし住吉の松。エーオモシロヤンデ、松の名木多けれど、猶も其名は高砂の、松のみどりは君が代の、ここに榮ゆる目出度さは、攝津播磨のさかりの松とや。

○和田笠松、高野山では三鈷の松とや、志賀唐崎の一つ松、今に絶えせぬ名所松。音に聞こえし越前の松、エー鹽こう松とは是とかや。加賀の國では鷹の松とや。はる〳〵壺ねて此方するがの、三保の松山清見寺、音には北野の老松は、エー直ぐなる御代に住吉の、松はときはの色ふかし。千代の年ふる春ごとに、エー猶色まさる姫小松。ヤーラーめでたの、ノーエーソレ、わか枝も、エー〳〵さかゆる、ヤヨエー〳〵、葉もしげる。

### じよや

○今のうけしさが何時もあるぞよ。せうじは御免なれ。十二船だま、艫に大黒帆にえびす、中に召しては十二船靈。

○薩摩出いては七つばへ、帆影かくすはうど崎の松、吹いてのほせ上げようなだの夜嵐、又も吹いたら思ふ港。

○おらがとのじようは、かみあがり、最早上るどよみ、やは蛭子舞とて、當地にて年中一萬の鰹を釣り得たるとき、萬の供養とて祝ひをなすことあり。此時必ず歌ひしよし。

（熊毛郡）

○君の局はほど細けれど黄金たるきに檜皮のせぶき。君は松らの鏡山、くもる此世は見えつかくれつ。

○躑躅椿は山照す。殿の御めしは、灘照らす。伊勢の雀が、なだの汀に巣をくんで、何につけても伊勢地戀しき。

備考　此舟唄は、島主種子島公外遊歸島の際、主君の召船には四十八挺の艪を立て、綾錦等の幕を張り、えも言はぬ美觀を呈し、西之表港に入る時、其着埠の時間を見計らひて歌ふなり。

（熊毛郡）

## 大漁歌

○よべすまひまたはねてきた〳〵。それよから（小魚）はな魚よせかけた。まづはでかしたをしきな〳〵。大がつをついすまいた。一里しほがみとりがまふ。それをみておせ。おきにやとりまき、なだにでいを、へた（岸邊）のなかせ（暗礁）にざこがわく。

是は三四十年前には歌ひたるも、今は全くなし。此歌の祝儀の席上にて謠はる、歌謠にして、最初に「金のなる木節」を謠ひ、引續き「まだら節」に移り、必ず相離れざるものなり。

（熊毛郡）

## 祝の歌

### 金のなる木節

○金のなる木を一本ほしし。植ゑて、ヨイ〳〵、育てて樣にあけう。

○屋久の御嶽をおろかにや思ふな。金の、ヨイ〳〵、藏より尚寶。

### まだら節

○酒にやもろはく、肴にやまだら、いかな、ヨイ〳〵、下戸衆も三つあがれ。

○常にやあがらずと、今宵はあがれ。そなた、ヨイ〳〵御馳走に取り寄せた。

○五島平戸で立てたる檣、取るはヨイ〳〵大阪の新川で。

金のなる木節、まだら節は家祝、船祝、網祝其他一般の祝儀の席上にて謠はる、歌謠にして、最初に「金のなる木節」を謠ひ、引續き「まだら節」に移り、必ず相離れざるものなり。

（熊毛郡）

## 坂田節

○歌へ〳〵と、サー〳〵サー、ドーカイコカイ、望まれまする。うたふまいとは思へども、肥後の小謠のすきなれば、何のてにはに、あひませうと、箱より出づる三味線も、坂田小夜の濱、サー〳〵〳〵、ドーカイコーカイ、米ならよーかーろ。上の小ざいしよにただす、このつませましたよーなー。

○ゆふべ見て來た酒屋のつゝじ、朝は開いて夜蕾む。

○此花一枝折らんとや。大事なこちが花ぢやもの。よその花なれや、見て通れとなー。

○わしがとゝさも小間物賣で、剃刀や小刀、紅や針、縞や木綿にや、茶や煙草、まだもござるよ、つけのくし。賣りませうと、あいきやうめすこの買うてたーもれとなー。

（熊毛郡）

## 家祝ひ

○此の家のうちにやー、うれし事きくーの、ヤーうれしいこーと、（囃）「アーヨイヤサ」、きくーぞ。ヤーはなのヤーよーなしたで、せんぐわんなもといえーて、ヤー千貫ーなもといえーて、ヤー萬貫もやーるよーなー。（熊毛郡）

## 金山節

○ことしや殿樣の、金山がござる。天氣ちよけれ、ふく金もよけれ、大坂の町でねもよけれ。

○名所〳〵よ金山は名所。水がふきよさす、これ名所。

○殿の金山がも一年あろば、藏をたちよもの金庫を。

（熊毛郡）

## 御神田節

○今年や御神田、おさほがござる。土手と山下うちづしやめすな。それぢや、おとなしゆが、たまりやせぬ。

○一ぶさがりもーせよ、御奉行樣よ。一ぶ二ぶしよは、さげてもくりよが、三ぶさぐれば、おうへのさはり。

（熊毛郡）

## 六調子

○千里奥山、鹿の子が鳴くか、淋して鳴くかよ、夫子を呼ぶか。淋して鳴かんよ、夫子は呼ばん。
○明日は御上の狩がある。やぐらはせむま。
○おみうぶし助けてたもれよ山の神。責めて此の子が生れたならば、師走八日にや子も引き連れて、參詣致す。ヨイヤナー。

（熊毛郡）

## どん〳〵節

○あーどん〳〵ぶしや道琉球にはやりなー、こんだ本琉球の道までもなー。カレハドン〳〵〳〵。

（熊毛郡）

## しよんが節

○しよんがぶしならしほやがもとよ、東しほやがほんのもとやー。ションガオー。

此節は舊時宴席に用ひられしも、當今の女子は得歌はず。

（熊毛郡）

## そんそへ節

○御召御座船白帆をかけて、綾と錦を積み受けて、手繩水繩は眞紅の絲よ、萬の寶を積み入れて、思つた港にそよ〳〵と。
○親が子を思ふ幾多の事か。山ぢや木の數、野ぢや茅の數、濱ぢや眞砂の數、それまでや愚、落つる千里の瀧よりも。

（熊毛郡）

## よろこん節

○いかなる大工が建てたやら、柱白銀、けた黃金、軒もたるきも皆黃金、黃金花さす。ナイヨエ。
○此日此夜の御祝に、床にかざりし松や竹、一の枝には金錢がなる、二の枝にはでにがなる、三の枝には米がなる、でんやら米やら、なりーさがる。上から鶴が舞ひさがる、下から龜が舞ひ上る、鶴と龜との御祝に。ションガオー。

右は一般の祝宴の席上にて歌ふ。

○此家は此家は、如何なる大工が建てたやら。ナンノイナー。柱白銀、桁黃金、貫も垂木も皆黃金。こがね、切り窓に簾。ションガオー。

此歌は家屋新築のときに歌ふ。

○目出たいものは、芋の種子、莖長く、葉も廣く、元にや繁昌の子がさす。ナイヨエー。
○はんじやうの子がさすならば、幸ひよ、子供も數多にもたされ。ナイヨエー。
○目出たいものは、そばの種子、花咲し、實がないて、三角そろひが。ナイヨエー。

右三章は產兒の祝宴に歌ふ。又婚禮の祝にも歌ふことある由。

（熊毛郡）

## よいこの節

○先づ今日は祝ひとて、先づ吉日の日を撰み、イヤドンドコヤー、座敷の內にはさかもりよ。臺の回りに松植ゑて一の、イヤドンドコヤ、枝には錢がなる。其二の枝と申せしは、イヤドンドコヤ、金と銀との米がなる。龜が歌へば鶴が舞ふ。イヤドンドコヤ。何とまーをろかとえて聞けば、奥にや、オイヤ、お祝ひよといはひてまふ。ションガオー。



「いやつゞけてやらしめい」と囃して次の歌を謠ふ。次の歌は略す。

（熊毛郡）

## おがどん節

○おがどんの刄に蚤が腰掛くる。あぶない腰の、ヤレ、掛けどころ。シヤント〳〵。
○おがら挽く衆にや恨みはないが、中のつい取り、、ヤレ恨みある。シヤント〳〵。

「つい取り」とは大樹を兩方より相向ひて挽けば、鋸は自然に繩目を外るゝ恐ある故に、鋸目の曲らぬ仕掛ありて、其役目に當るものを云ふ。

○おがらをふりかたげて、鑢を腰さぐる。どこが色やら、やれ定めない。シヤント〳〵。
○おがもさがれよ、今日の日もさがれ、身どもがおがまは、やれ日を限り。シヤント〳〵。
○鬼ぢや鬼ぢやよ、喜左衞門樣鬼ぢや。花の喜藤太樣、ヤレ、地藏菩薩。シヤント〳〵。

喜左衞門、喜藤太の兩人は、藩侯より派遣せられたる

監督にして、寛嚴の差ありし者なるべし。

○くもれくもれよ小杉山は曇れ、花の喜藤太樣は、ヤレ、日にや當てぬ。シヤント〳〵。

小杉山は上屋久村楠川山の境内にして、製材の場處なり。

○御召し、かはぐら御板がくだる身ども御蔭で、ヤレ、おが山に、シヤント〳〵。

「かはぐら」は「かぐら」ならん。重きものを引き又は揚ぐる器械。

年代詳ならねども、藩主島津侯の造船用の屋久杉板を製材する木挽連が謠ひし歌謠なりとて、今猶傳はれり。

（熊毛郡）

## へら踊歌

○神はおいせの、おはらひばこよ。ナヤーレ。目出たい〳〵おはらひばこよ。ナヤーレ。目出たい。オー。

○今年やよい年、おほそがはやる。おほそ神さま、踊りずき。

○かみは島田がみ、化粧足袋はいて、踊ををどればおほそもかろい。

○踊りををどれば、おほそもかろい。しめもおろさず、もばらひいらず。

（揖宿郡）

## 佛舞

座興の舞にて、一人囃せば舞手は舞ひつゝ歌ひ興ずるなり。

○佛舞は見さいなー。佛舞と囃されて、佛舞をやるからは、皆樣囃は賴みませう。佛舞の初めには、鳥こそ佛よー。鳥が佛ならなしやー準繩矢にや恐るかー。そんなら矢こそ佛よ。じんじよー矢が佛なら、なしかー石にや立たぬかー。そんなら石こそ佛よ。石が若しも佛なら、なしかー火にやゝけるか。そんなら火こそ佛よ。火が又佛なら、なしかー水にや消ゆるかー。そんなら水こそ佛よ。水が又佛なら、なしかー人にや飲まるゝか。そんなら人こそ佛よ。人が又佛なら、なしかー佛を拜むかー。そんなら佛が佛が本の佛よー。

（熊毛郡）





## 新納忠元數へ歌

○一つとや、肥後の加藤が來るならば、煙硝肴に團子會釋、それでも聞かずに來るならば、首に刀を引出もの。二つとや、深き手だては胸の中、敵にもらすな此事を。味方〳〵の陣所とは、合圖定めてつけし火を。三つとや、御國の人は殘りなく、鎧冑を備へつゝ、すはやと云はゞ其儘に、陣所々々に馳せ屯せ給へ。四つとや、夜打を敵が掛くるなら、眞弓鐵砲を構へつゝ、大將と見えし人々を、ねらひすまして射落せ。五つとや、何時もかはらん加藤めが、片穂の鑓で鎌共に打落せ。六つとや、昔の人もあざむける。薩摩荒武者此度は、思ひ極めし事なれば、岩もこがねも一くだき。七つとや、中々そちも退屈よ、氣をばきかせて引き取りや。いかに必死と極めても、薩摩武者には勝ちやせん。八つとや、屋敷〳〵の角々を、さがし求めて敵方の、間者居りなば其儘に、なはや綱にてしばり置け。九つとや、こゝの處は大口よ、肥後の多勢をやす〳〵と、只一口に引き入れて、口の中にてみなごろし。十とや、とがなき敵を法もなく　殺さば後の罪作り、よわき加藤が其儘に、いざや仁愛加へ置け。敵ぢやとてなにしに人のにくからん、おなじからだにおなじ身ぢやもね。

（伊佐郡）

## 琉球人節

是れは德川時代琉球の島主より、薩摩の島津侯へ貢として琉球の物產を獻納するときの灘唄にして、始八章は其航路の歌、以下は獻納濟みの祝宴の歌なり。

○物のみごとは那覇の町、赤いもの賣り、煙草賣り、ハイヤ、トンキヤン、キヤン、キヤン、キヤン、ハイヤ、ピツピツピツピツピツ、白いものうり豆腐うり、黑いものうり紺地賣り、ハイヤ、トンキヤン、キヤン〳〵〳〵、ハイヤ、ピツピツピツピツピツ。物の品々うり拂ろてー、寺や畑まぢや親と兄弟。（囃）

○つれて別るゝ旅衣、袖とそでとのすよ涙。（囃）袖にうくつゆのおしはるてー二度とかへらん那覇の町。（囃）

○那覇の河に出るときは、てんまこぐ〳〵いさば船。（囃）

船の纜解くときは、舟子いさんで矢帆ひけば。（囃）

○風はまともに午未、那覇を出てから今二日。（囃）島にみならぶ三つの島、一つ見ゆるは霞かな。（囃）

○雲か霞か浮島か。あひに見ゆるは屋久、永良部。（囃）けむり絶えずの硫黄島、佐多の岬に立ちならぶ。（囃）

○西を拜むはお開聞、またごしなーだをすよ〳〵と。（囃）内の山川へなりぬれば、番所改め相濟んだ。（囃）

○船の纜とくときは、舟子勇んで矢帆ひけば、（囃）風はまともに午未、知林小島を後になし。（囃）

○富士に見まがふ櫻島、最早鹿兒島ぎよやの濱。（囃）ぎよやの濱から琉球見れば、琉球の新橋思ひ出す。（囃）

○かれよしの船はなだよしを乘せて、山も見えぬ、となかも見えぬ。針が〻よーをあらす。

○鹿兒島の館は、お心よいやかた、お盃たもる、琉球でかたる。

○朝寢して起きて、手洗ひ鉢の水見れば、わがおかほの鼻があるがふしぎ。（摂宿郡）

## 北海道

### 田植歌

○（男）ヤーハイダー、今日の一田のー、（女）ヤーハイダー、あさよー、はかの、みづのくち。

○（男）ヤーハイダー、花のやうな男が、（女）ヤーハイダー、花のいぶりをかついでー。

○（男）ヤーハイダー、苗子もよいー、しろもよい、（女）ヤーハイダー、投げれややーちよんほとなるやうだ。

○（男）ヤーハイダー、今日の田の代じなー、（女）ヤーハイダー、あづたこのむたろーじなー。

○（男）ヤーハイダー、小手にこまかに植ゑおいて、（女）ヤーハイダー、あきはかぴをかるやうに。

○（男）ヤーハイダー、千石積の倉立てー、（女）ヤーハイダー、千石俵を積みかさねー、（囃）大黑惠比須の舞遊び。

○（男）ヤーハイダー、ひるや餅はおそさにー、（女）ヤーハイダー、ひるや餅のむかひに誰人かまゐるー。（囃）三國カ千石一のさむらひが。

○（男）ヤーハイダー、おー田の神のひるねになー、（女）ヤーハイダー、金なるびやうぶをたてまはしー。

○（男）ヤーハイダー、むらさきの花は、なんどき咲いてこぼれる。（女）七十八時さいてこぼれる。

○（男）ヤーハイダー、ひくれてなう、をしどり西をさしてとんでゆく。（女）ヤーハイダー、今日の田のたろーずな、おいとま申す、たろーずな。

田植、稻刈、米搗等は宮城縣移民間に行はる。（室蘭）

### 草取歌

○昔先年やしまのいくさー、いまにござんすーぞ、ゐに書いてー。（小樽）

### 盆踊歌

○盆の十三日やほけやする晩だ。エヤサカサツサ、小豆強飯なう、豆もやし、ソレヤ、豆もやし強飯、なう豆もやし。

北海道　草取歌　盆踊歌

ほけとは當地方にてはほかるといひ、十三日の夜墓前に供養するをいふ。（函館）

○あねこ、ちよこらねて、かしなべまけた。ハーエヤサカサツサ、杓子さくしおよばなにて、手でさらた、ハリヤ、てゞさらた、およばなにてなう、手でさらた。

○船さ帆かけて、笹原はせた、ハーエヤサカサツサ、山の頂きてんけて鰊やくきだ、ソリヤ鰊やくきだ、てんけてなう、鰊やくきだ。

くきだは澤山來る事なり。

○盆が來たとて、我親こない。ハーエヤサカサツサ、やちのみそはぎ、なう我が親だ。

○ほんの十三日ほかるするばげだ、ハーエヤサカサツサ、あづきこわめし、なう豆もやし。（壽都）

○盆の十六日は、ほかるする晩よ、小豆こはめしやら、豆もやし。

○一合蒔いたー籾種の、其舛有り高は一石一斗一舛一合と

一句よ。オイ〳〵ヨーイヤサ。

右九石まで同じ工合に歌ふなり。

○ヘーヤーお江戸には田がない、畑がないからー畑はまぐり掘つてもーない。溫飩の三角に、玉子の四角に、雪の黑燒見ることない。（囃）ソレヤヨイ〳〵サノサノヨヤサトーセ、ソレヤヨイ。（室蘭）

## 稻刈歌

○十七がなー、今年やれ初めて作すればなー、（囃）コノーヨンデコイ。作すればなー、丈が一丈でほが五尺、（囃）ほが五尺なー、刈りとるたばは五千把、（囃）五千把なー、こくそのもみは五千俵、（囃）五千石なー、するその米は四千俵、（囃）四千俵なーその米たはらつけたす。（囃）つけだーてなー、うりだす金は五千兩、（囃）十七がなー、はたちのまいに倉たつ。（囃）（室蘭）

## 米搗歌

○おあねもさやー、をほこがなくぞー、おだましやれやー。

○井戸ばたのなー一もとすゝきでー、末は千條ー青々。エントエント。（室蘭）

## 餅搗歌

○餅つき三太郎、あいどりせでや、手つかいこ、戸開けろでや、とんがりこ、窓開けろでや、まんがりこ。スツトコ、ドツコイ、ドツコイショ。（小樽）

## 舟歌

○ヤンセー、〳〵、ヤンサーノヤンセ、ヤンセーヨー。あいぬのーぼつこ（あいぬの女）、長い烟管をくーはいて、バフランエー。

○エエー、ソランエ、イヤヤノーナ、ヤサホーエ、トコとーみこな、横座のまん中で、たんぜんぶつかけて。ワーヤタホーエ。（宗谷）

## 鰊沖揚歌

○漁夫は神さん親方神主だ拜めで。アホーイ。

○鰊は一ぱいのつた。大漁滿作だ。ドーコイー、ドツコイーヨ。

○漁夫はほた餅食ふ事すきだよ。オウーンヨイサ、綱こを起せば、ほた餅食はせる。オーンヨイサ。

○漁夫は神さんだ。御國に生れて、ぜんこーもたねば、みんなにわらはれる。ホーラホイ。

○オウーンヨイサ、エンヤラホーイ〳〵、鰊は大漁、漁夫が神樣、いそいでかせげ。コラサデドツコイ、ドツコイドツコイーヨ。

○今年の大漁、鰊が馬鹿野郎、か、たもかゝた、大漁滿作。オウーンヨイサ。いそげや〳〵。オウーンヨイサ。

○鰊が大漁、爺ちやでも婆ちやでも、ふんばれ〳〵。オウーンヨイサ〳〵。（宗谷）

## まつち工場歌

俗に下取謠といふ。一種の數へ歌なり。マツチ側の木地突をなす時、下取女（又は童男）が突方の調子に合せ、製品を束ねんがために歌ふ。一束總て五十一枚、即ち五十一までの文句を以て一段落とし、拍子は突方の遲速如何によりて一定せず。左の如し。

○一けた、二けた、三けた、四けた、いつやの、嬶さん、なにいつて、やかまし、こゝらへ、十んで來、十一、十二、巡査、だまして、免職させて、車ひかせて、ぼくが、のるわいな、のるわいな。二十一、二十二、二十三にんじん、昆布まき、たべて、うまけれや、も一つ、おくれ。三十、さら一、さら二、さら三、さら四、西郷、たかもり、いわしか、雜魚じやこか、鯛におはれて、にげてゆくわいな。四十三、しゝやこい〳〵、しろ木や、おこま、すこぶる、別嬪。ラー〳〵。（室蘭）

# 俚謠集終



# 索引

## あ


赤名節〔田植歌〕
廣島(雙三)……四六七
あがらしやれ
山形(最上)……三二一
秋の田〔豐年祭踊歌〕
鹿兒島(熊毛)……七三
惡魔はらひ
山形(最上)……二八六
上げ歌〔田植歌〕
廣島(比婆)……四六五
あげ歌〔盆踊歌〕
廣島(安佐)……四八五
朝の歌〔田植歌〕
島根(仁多)……三五四
阿字平句
廣島(蘆品)……五一〇
愛宕參り〔盆踊歌〕
京都(北桑田)……一〇
あぢめ作法〔鄕神樂〕
福島(北會津)……二五〇
敦盛
廣島(廣島)……五一二
敦盛〔盆踊歌〕
愛媛(南宇和)……六〇四
あなさやけ〔鄕神樂〕
福島(北會津)……二五〇
あなたのし〔鄕神樂〕
福島(北會津)……二五〇
間の歌〔田植歌〕
廣島(安佐)……四六九
油絞歌
長崎(南高來)……八七
德島(勝浦)……五七六
蜑女歌
三重(志摩)……二二三
雨乞歌
埼玉(秩父)……一三二
三重(志摩)……一八三
熊本(八代、葦北)……六七三
(天照)雨乞歌
京都(天田)……一八
雨乞願もどき踊音頭
廣島(安佐)……四七四
雨乞踊歌
京都(相樂)……一三
愛媛(喜多)……五九九
雨乞風流の笛の譜
長崎(西彼杵)……六八
安城踊
鹿兒島(能毛)……七三二
あんば祭歌
千葉(香取)……一四〇
新玉
神奈川(三浦)……二七
あら踊
佐賀(杵島)……六六二

藍こなし
德島（美馬）……五七七

い

烏賊捕口説
山形（飽海）……三一三
勇み田（田植歌）
廣島（安佐）……四六七
いざやまき
山形（最上）……三一一
（東田川、飽海）……三二一
石搗歌
京都、京都、船井、何鹿）……三二
長崎（西彼杵）……七九
（東彼杵、南高來）……八〇
奈良（宇智）……一七五
三重（津、河藝、一志）……二〇七
山形（東田川）……二〇一
石川（羽咋）……三二八
島根（仁多）……三九〇
福岡（絲島）……六三三
大分（下毛）……六五七
佐賀（佐賀）……六六三
（神崎、西松浦、杵島）……六六五
熊本（葦北）……六八六
宮崎（宮崎）……七一一
石童丸（地搗歌）
熊本（下益城）……六八五
石運歌
三重（志摩）……二〇八
石棒祝（地搗歌）
熊本（下益城）……六八五
伊勢音頭
三重（桑名、一志）……二一七
德島（三好）……五七七
愛媛（北宇和）……六一〇
伊勢坂節
岩手（岩手）……二七六
伊勢長節
德島（勝浦）……五七七
伊勢節
德島（阿波）……五七七
伊勢踊
京都（加佐）……二六
伊勢踊音頭（盆踊歌）
奈良（高市）……一七三
潮來（地搗歌）
三重（員辨）……二〇四
潮來歌
熊本（葦北）……七〇一
一谷（盆踊歌）
香川……五八五
愛媛（越智）……六〇四
嚴島御島廻歌
廣島（佐伯）……五〇二
五つ拍子（雨乞踊歌）
愛媛（喜多）……六〇〇
絲繰歌
埼玉（入間）……二二七
絲抽歌



香川……五八九
熊本（球磨）……六九一
稻荷舞
新潟（佐渡）……九二
稻刈歌
新潟（中蒲原）……一一一
千葉（山武）……一五二
三重（一志）……二〇二
岩手（氣仙）……二六五
青森（東津輕）……二七九
山形（飽海）……二九七
宮崎（宮崎）……七一〇
北海道（室蘭）……七四四
稻扱歌
山形（最上）……二九七
祝歌
三重（阿山）……二一九
熊本（球磨）……七〇〇
（天草）……七〇一
祝ひ詞
廣島（廣島）……五一一
祝の歌
鹿兒島（熊毛）……七六三
いひたて
廣島（廣島）……四九八
家祝ひ
鹿兒島（能毛）……七三七
今樣
福岡（福岡）……六四二
いもだね
佐賀（西松浦）……六六九
伊豫節
愛媛（松山、溫泉）……六一二
（宇摩、喜多）……六一三
入棄（盆神踊）
德島（名東）……五五八
いろは口説（盆踊歌）
福岡（三潴）……六二六
（京都）……六一七
大分（西國東）……六五三
驚ながれ（田植歌）
島根（邇摩）……三八一
牛若丸（田植歌）
廣島（比婆）……四六六
牛若丸（盆踊歌）
三重（飯南）……一九八
……二〇〇
大分（西國東）……六五四
牛若踊（盆踊歌）
德島（那賀）……五八六
臼祝ひ
鹿兒島（熊毛）……七一四
臼おこし
鹿兒島（熊毛）……七一四
臼太鼓
熊本（葦北）……六九三
臼太鼓歌
宮崎（兒湯、西臼杵）……七〇八

（東白杵）……七〇九
白搗歌
岩手（岩手、稗貫、九戸）……二六六
白搗き始め
鹿兒島（熊毛）……七二四
白挽歌
神奈川（橘樹、三浦）……四九
新潟（北蒲原）……二一
（中蒲原）……二一三
（東頸城、西頸城、岩船）……二一四
（佐渡）……二一五
埼玉（北足立、秩父）……二三三
愛知（西春日井）……二三八
靜岡（安倍）……二三四
山梨（南巨摩、南都留）……二四〇
岡山（眞庭）……四〇四
廣島（蘆品）……五〇四
（から）白挽歌
神奈川（久良岐、三浦、鎌倉）……四八
歌題目
千葉（市原）……一六五
諺ひ物
新潟（佐渡）……九三
卯の花流れ〔田植歌〕
島根（邇摩）……三八〇
梅の古木〔臼太鼓歌〕
宮崎（西臼杵）……七〇九
裏の段々畑
熊本（鹿本）……六九八
嬉しき舞
岩手（上閉伊）……二七三

え

謠曲百番づくし〔盆踊歌〕
新潟（佐渡）……一〇九
えーとこなー節〔地搗歌〕
山口（阿武）……五四四
惠美須送歌
熊本（球磨）……六七一
夷祭船歌
新潟（佐渡）……九一
蝦屋甚九〔盆踊歌〕
愛媛（北宇和）……六〇五
えんとこ節替歌
福岡（福岡）……六四四

お

御伊勢踊〔盆踊歌〕
廣島（豐田）……四八七
御祝歌
岩手（岩手、九戸）……二七二
御江戸踊〔盆踊歌〕
三重（一志）……一九四
御神樂〔盆踊歌〕
三重（安濃）……二〇一
おがどん節
鹿兒島（熊毛）……七二九
御神踊〔盆神踊歌〕
德島（名東）……五五八
御神田節







鬼兒島（熊毛）……七三七
おかめさ節
新潟（岩船）……一一九
奥淨瑠璃
福島（伊達）……二五五
おさへ節
神奈川（三浦）……一七
お釋迦舞〔座敷歌〕
山形（最上）……三〇五
おすがた節〔田植等歌〕
德島（那賀）……五五五
（板野）……五五七
御田植歌
廣島（賀茂）……四一〇
御賓〔盆神踊歌〕
德島（名東）……五六〇
御田祭
三重（志摩）……二〇一
御田踊
鹿兒島（姶良、肝屬、熊毛）……七一〇
（揖宿、川邊）……七三一
（日置）……七三二
おちゝどの〔盆踊歌〕
宮崎（西臼杵）……七〇七
おつや
熊本（下益城）……五
お庭踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六七
お花踊〔盆踊歌〕
奈良（吉野）……一七四
おひかけ
岡山（吉備）……四〇五
（上道）……四〇六
追ひかけ〔盆踊歌〕
京都（京都）……五
追ひかけ
島根（熊義）……三九四
（邇摩）……三九五
追分
岡山（川上）……四六〇
お福
德島（阿波）……五五三
お舟おろし〔船歌〕
千葉（安房）……一五七
大歌〔田植歌〕
山口（阿武）……五二五
大江山〔祇園踊歌〕
三重（安濃）……一八一
大切畑堤〔地搗歌〕
熊本（阿蘇）……六八三
大澤節
山形（最上）……三一
大樽區夏祭歌
佐賀（西松浦）……六六一
大の坂〔盆踊歌〕
新潟（中魚沼）……一〇七
大拍子〔田植歌〕
廣島（比婆）……四五九
大宮〔盆踊歌〕
三重（安濃）……一八六

大山椿
島根（仁多）……三九五
大ぢどり〔盆踊歌〕
島根（邑智）……三八八
大踊歌
廣島（安佐）……四八九
（大奇木）大踊歌
廣島（安佐）……四九三
御宮入〔盆踊歌〕
三重（飯南）……一八八
御宮樣〔盆踊歌〕
三重（飯南）……一九九
御馬揃ひ
廣島（甲奴）……五〇九
御門〔盆神踊歌〕
德島（名東）……五六〇
御屋形〔盆神踊歌〕
德島（名東）……五五九
御屋敷〔盆神踊歌〕
德島（名東）……五五九
おりやんこ節
熊本（飽託）……七〇一
御禮〔盆踊〕
三重（安濃）……一八七

## か

郷神樂
福島（北會津）……二四九
郷藏附節
新潟（佐渡）……二一七
江州音頭〔盆踊歌〕
三重（三重）……一八五
楮打歌
山梨（西八代）……二四三
高大寺
新潟（中魚沼）……一一九
高麗踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六六
鉤引音頭
三重（阿山、名賀）……一七六
神樂〔盆踊歌〕
三重（安濃）……一八七
神樂歌
新潟（北蒲原）……一一五
千葉（香取）……一四〇
福島（北會津）……二四四
岩手（岩手）……二七〇
島根（美濃、知夫）……三九四
廣島（蘆品）……四九九
神樂囃
宮崎（西臼杵）……七一〇
笠踊歌〔盆踊歌〕
廣島（豐田）……四八八
鹿島歌
神奈川（足柄下）……四一
鹿島くどき〔船歌〕
千葉（安房）……二五九
鹿島踊歌
靜岡（田方）……二三三
數へくどき





山口（阿武）……五二七
帷子踊〔盆踊歌〕
三重（飯南）……一九八
鍛冶歌
廣島（比婆）……五〇八
羯鼓踊歌〔盆踊歌〕
三重（度會）……一九七
（飯南）……一九八
かづれほり歌
宮崎（西臼杵）……七一〇
かつま〔田植歌〕
廣島（比婆）……四六三
かつま歌〔田植歌〕
島根（大原）……三四四
門田の歌〔田植歌〕
島根（仁多）……三六四
門開き
廣島（比婆、賀茂）……四〇七
香取神宮神田耕式歌
千葉（香取）……二五五
金崎の光原さん
長崎（西彼杵）……八七
金高踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六三
金のなる木節〔祝の歌〕
鹿兒島（熊毛）……七三六
金堀節
新潟（佐渡）……二二七
金山節
鹿兒島（熊毛）……七七七
鹿子舞〔盆踊歌〕
岩手（氣仙）……二六四
川水踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六七
川踊歌
鹿兒島（肝屬）……七三三
鷺舞
鹿兒島（熊毛）……七一八
かへり踊〔盆踊歌〕
廣島（安佐）……四八五
鎌倉踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六四
釜蓋被せ
大分（西松浦）……六六七
神歌
廣島（蘆品）……四九八
紙漉歌
山梨（西八代）……二四三
神踊〔盆踊歌〕
德島（那賀）……五六五
神田祭歌
三重（志摩）……一〇一
唐芋踊〔盆踊歌〕
大分（宇佐）……六五〇
から臼挽歌
神奈川（久良岐、三浦、鎌倉）……四八
烏と田螺
長崎（壹岐）……九〇
刈敷歌
岩手（氣仙）……二六五